

都市の風景に関する研究

(第1回)

* 文中敬称を省略します。

都市研究センター 研究理事
渡辺 直行

目次

序章

はじめに

1. 都市がもっとも必要とするもの

2. 人間をつくる風景

(1) 風景と心

香月泰男のばあい

ピエールのばあい

関根元神父のばあい

風景のふるえ

(2) 愛から自由へ、有限から無限へ

(3) 風景の意義

3. 都市をどう見るか

(1) 新しい都市、新しくない都市

(2) 見えない都市、見えにくい都市

4. 20世紀の都市、21世紀の都市

(1) 20世紀の都市

(2) 逆さまに考える

(3) 21世紀の都市

5. 都市の経済

(1) 経済の意義

(2) 経済政策論

経済政策論の分類

各派の主張

(3) ビジョンと倫理の時代

各派の主張

短期的視点で経済を語り得ない時代

(4) 都市へ

幻想から現実へ

地域社会の再創造

社会的共通資本としての都市

自由な都市、弱い都市

経済政策の統合

(5) 都市の市場経済化

消費し尽くされる空間

市場経済がもたらす空間

都市の商品化

誰が都市を決めるのか

都市づくりの難しさ

おわりに

(参考)街の風景(1) 佃島

はじめに

1. 佃島の人と風景

2. 佃島の起源

3. 島形の変遷

4. 町割の変遷

5. 海と空の風景

6. 外へ向かう風景、内へ向かう風景

7. 公と私との狭間

8. ロジロジ

9. ジロジロジ

10. 公が私から生まれる空間

11. 佃島のアイデンティティ

序章

はじめに

本年4月から都市の研究に従事することとなり研究課題を何にすべきか迷った末「都市の風景」を選んだ。この研究課題の意義については未だ不明な点も多い。極端なことを言えば風景こそが都市の最重要課題であるかもしれない、あるいは風景など無意味であるかもしれない。後者の可能性はあまりないとは思ふものの、研究である以上可能性は排除できない。現時点では前者に大きく傾いているが、結論が後者になる場合も当然有り得る。

以上が本研究の素朴な動機であるが、説明が乱暴すぎる印象もあるので少し補足すると、風景が倫理を育み、倫理が学問を生み、学問が人間に枠を超えさせるという経路を通じて風景が枠を超える契機になるが、今の日本においては都市において枠を超えることが最重要課題のひとつであることから、「都市の風景」を研究課題とする次第である、といういかにも本当はよく分かっていないのでは？という説明になる。かなり古典的な問題提起であり、また、その問題がそう簡単に解けるわけもないのであろうが、それを肯定的にも否定的にも考えつつ風景の意義を多面的に模索することで、これからの都市のあるべき姿がほんの僅かでも見えてくればよいと考えている。

もう少し補足すると、そもそも倫理とは枠を超えるためにある、という倫理の考え方がとりわけ都市にとってこれから重要になる。組織の枠、共同体の枠、民族の枠等々の狭い枠を乗り越えるのが倫理の役割である(したがって枠が人間に倫理を強いるなどということ

はあり得ないと思っている)。そして、そのような倫理に突き動かされて行なうのが学問であろう(学問が倫理を作るという側面もちろんある)。ところが昨今の風潮では、枠の中でうまくやる方法を見つけるのが学問だということになっているようで、実践的な「学」が大変な人気を集めている(老婆心ながら一応断っておくと、枠の中で実利的な研究を行なうことそれ自体は言うまでもなく有用であり無用ではない)。

枠の中でうまくやることばかり考えていると、枠の間の摩擦がどんどん激しくなる。それぞれの枠が離れているうちはまだよいが、接近してくると壊滅的な打撃を相互にもたらす。そういった枠が重なり合って存在しているのが都市であろう。あるいは、現代においては都市が枠を作り出しているとも言える。

枠の中に未だ余裕があるうちは、その余裕を埋める形で社会が発展する。しかし、枠の中が充満してくると、枠が疲労を起こして劣化していく。その枠を超える力が生まれず、枠の中の古い力が衰えないと、結局のところは自爆する。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。驕れる者も久しからず、ただ春の夜の夢の如し。猛き人もついに滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ」ということになる。枠を作っているのが都市であるならば、その枠を超えるのは都市の責任である。

枠を超えるという目的に照らせば、長期不況というのは日本の将来にとって大変良い働きをする側面がある。その働きとは、古い力を弱め新しい力を強める働きであり、要するにシュンペーターの言う創造的破壊を生み出す働きである。長期不況にも関わらず新しい力が出てこないとする、その原因は

学問の不在にあると考えるのが順当なところであろう。それは言い換えれば倫理の不在ということにもなるし、そのひとつの要因としての風景の不在ということにもなる、と思っている。

風景が倫理に結びつくとすれば、そのような風景は自発的にできるものであって外からの規制によってできるものではない。計画やデザインでできるものではなく、むしろ計画やデザインを崩したところに行けると思うのだが、そのあたりは今のところ定かではなく研究しながら考えていくことになる。

このような次第で、本研究は「都市の風景」を根本から考えてみようとするものであるが、最終的には実践的な分野にまで及びたいと思っている。そして、そこまで進むには本来であればおそらく気が遠くなるような時間を要するであろうが、3年程度で何らかの結論を出したいと思っている。本音を言えば直ちに実践的作業に没入してせいぜい1年程度で結論を得たいところであるが、それでは意義のある研究にはならないであろう。

以上、なかなか歯切れの悪い説明であるが、その根本的な理由は筆者には未だ「都市の正体」がよくわかっていないところにあると思っている。都市の「正体」などいくら探求してもそこに何かがあるわけがない、という主張もある。しかしその一方、太田佳代子・伊藤留美子は「都市の変異」(NTT 出版、2002年)の序で「都市」という言葉で私たちが思い浮かべ、語っているのは、じつはかなり狭い視野でのイメージでしかないのではないかと問題提起をしている。筆者は、「都市の正体」をつかむことが今何より重要であると思っている。

ところで、数年前ミュンヘン市の都市計画

担当者から話を聴く機会があったが、その担当者は、「経済効率のためにどこかに大きな建物を建てるなどということは考えられない」と述べていた。経済効率などたかだか10年程度の効果だが、建物はそれよりはるかに長く存在するものだから、というのがその理由である。経済効率を考えないというのも極端だが、筆者にとってこの言葉は強く印象に残った。そして、「都市の正体」なるものも一度経済とは対極にあるものの視点から眺めてみたら少しは見えてくるのではないかと考えた。人間が生きていくための最下位レベルの即物的なニーズを満たすものが経済(かなり狭義の)だとすれば、その対極にあるものは何か。それは風景であろうと今は思っている。「都市の風景」を研究課題とした背景にはこのようなこともある。

今回から次回にかけては、研究に入る前の助走としての序章として、都市の存在意義等を考えながら、研究の趣旨を述べることにしたい。

1. 都市がもっとも必要とするもの

研究課題を設定するにあたり、都市がいま最も必要としているものは何であろうかと考えてみた。そして浮かんできたのが、島崎藤村『春』の最後の部分である。

汽車が白河を通り越した頃には、岸本は最早遠く都を離れたような気がした。寂しい降雨の音を聞きながら、何時来るとも知れないような空想の世界を夢みつつ、彼は頭を窓のところに押付けて考えた。

「ああ、自分のようなものでも、どうかして生きたい」

こう思って、深い深い溜息を吐いた。玻璃窓

の外には、灰色の空、濡れて光る草木、水煙、それからションボリと農家の軒下に立つ鶏の群なぞが映ったり消えたりした。人々は雨中の旅に倦んで、多く汽車の中で寝た。

復たザアと降って来た。

(島崎藤村『春』新潮文庫)

重要な箇所は、彷徨を続ける主人公岸本捨吉が「自分のようなものでも、どうかして生きたい」と考えるところである。「自分のようなもの」と半ば自己を否定しつつ、翻って「どうかして生きたい」と思う。ここで翻らずに「もう死にたい」(実は今の自分を捨てたい)というのが昨今広がりつつある風潮で、それで本当に自分が死ぬ場合もあるし、人を殺してしまう場合もある。「自分のようなものこそ、どうかして生きたい」などというのも結構いるが、こういうのは論外である。

自己を半ば否定する反面には、幸田露伴の『五重塔』の主人公のっそり十兵衛の次のような意地、自己へのこだわりがあり、今の自分を捨てたいとは思わないから苦しむのである。

ああなさない、何程風の強ければとて頼みきつたる上人様までが、この十兵衛の一心かけて建てたものを脆くも破壊る歟のやうに思し召されたか口惜しい、世界に我を慈悲の眼で見て下さる唯一つの神とも仏ともおもふてみた上人様にも、真底からは我が手腕たしかと思はれざりし歟、つくづく頼母しげなき世間、もう十兵衛の生き甲斐なし、たまたま当時に双なき尊き智識に知られしを、これ一生の面目とおもふて空に悦びしも真に果敢無き少時の夢、嵐の風のそよと吹けば丹誠凝らせしあの塔も倒れやせむと疑はるとは、糸糸腹の立

つ、泣きたいやうな、それほど我は腑のない奴が、恥をも知らぬ奴と身ゆる歟、自己がしたる仕事が恥辱を受けてものめのめ面押拭ふて自己は生きてゐるやうな男と我は見らるる歟、たとへばあの塔倒れた時生きてゐるやうか生きたからう歟、糸糸口惜い、腹の立つ、お浪、それほど我が鄙しからうか、あああ生命ももういらぬ、我が身体にも愛想の尽きた、この世の中から見放された十兵衛は生きてゐるだけ恥辱をかく苦悩を受ける、糸糸いつその事塔も倒れよ暴風雨もこの上烈しくなれ、少しなりともあの塔に損じの出来てくれよかし、空吹く風も地打つ雨も人間ほど我には情無からねば、塔破壊されても倒されても悦びこそせめ恨はせじ、板一枚の吹きめくられ釘一本の抜かるとも、味気なき世に未練はもたねば物の見事に死んで退けて、十兵衛といふ愚魯漢は自己が業の粗漏より恥辱を受けても、生命惜しさに生存へてゐるやうな鄙劣な奴ではなかりしか、如是心を有つてみしかと責めては後にて吊はれむ、一度はどうせ捨つる身の捨処よし捨時よし、仏寺を汚すは恐れあれど我が建てしもの壊れしならばその場を一步立去り得べきや、諸仏菩薩も御許しあれ、生雲塔の頂上より直ちに飛んで身を捨てむ、投ぐる五尺の皮囊は潰れて醜かるべきも、きたなきものを盛つてはをらず、あはれ男児の醇粹、清浄の血を流さむなれば愍然ともこそ照覧あれと、おもひし事やら思はざりしや十兵衛自身も半分知らで、夢路を何時の間にか辿りし、七蔵もさへ何処でか分れて、此所は、おお、それ、その塔なり。

(幸田露伴『五重塔』岩波文庫)

意地があるから生き方で悩み、そこから自己否定の気持ちも生まれれば、なんとか外に開きたいという気持ちも生まれる。意地が

なければ本当に外に開くことはできず、世間の一部を構成するだけになる。もちろん世間に向かって開くなどということはありません、そのような努力は単なる時間の浪費である。個人のない人間ばかりだと「つくづく頼母しげなき世間」などということになる。

いま都市が最も必要としているのは、自己を半ば否定しつつも外に開こうとする人間の集まりであろう。このような人間の集まりができるか否かに都市の将来どころか人類の存亡がかかっている、と言うと誇大妄想のようだが、真面目にそう思っている。

このような次第で都市の風景を研究することとしたが、なぜ人づくりが風景に結びつくのか分かりにくいかもしれないので、次項で少し具体例を見ることとする。

2. 人間をつくる風景

(1) 風景と心

香月泰男のばあい

香月泰男は、大工が捨てた木切れやブリキの切り屑、鉄屑など、およそ役に立たないと思われるものから実に生き生きとしたおもちゃを作った。リズムカルに縄跳びをする男、体の芯から澄んだ歌声を発する女、ゆるやかに歩を運びながら哲学にふける男、駆け寄ってくる子どもを手を上げて迎え入れる母親、親子連れで仲良く散歩をするイノシシ、静かに佇みつつ凜として自らの虫生に耐えるトンボ、等々。それぞれの生き物の心が外面に表れ、それがさらに周囲の風景の広がりをつくっていく。これは本当は見えない風景である。香月泰男がこのようなおもちゃを作ることができた背景は、以下のようである。

香月泰男はシベリアから帰ると二度と生家を

離れることをしなかった。そして野の花や小さな虫けらをこよなく愛した。それはひょっとすれば、シベリア体験がおのずとしむけたのかもしれない。香月泰男は静かに叫ぶ　　ここが私の空であり、大地だ。ここで死にたい。この土になりたいと思う。思い通りの家の、思い通りの仕事場で絵を描くことができる。それが私の地球である。

(東義人『わたしの香月泰男ノート』

海鳥社1996年)

香月泰男は、敗戦後のシベリア抑留でいくつかの収容所を転々としたが、その時の長い漂泊体験が故郷の風景をかけがえのない貴重なものとした。彼は、故郷の風景の中に精一杯生きる小さな生き物たちを見、それらをこよなく愛したのである(香月泰男のおもちゃに関して、『香月泰男のおもちゃ箱』(新潮社2003年)を参照されたい)。

ピエールのばあい

香月泰男の漂泊体験から来る身近な風景への愛情は、トルストイ『戦争と平和』のピエールがフランス軍の捕虜になって次のような心境の変化を起こしたことを想起させる。

彼は以前は、なにものの中にも、偉大で、無限で、捕捉しがたいものを見る力を、持たなかった。ただ、どこかにそれがあるべきだと感じて、それをさがしていたにすぎなかった。理解のどく手近なものなかには、彼はただ、限りある、浅薄卑俗な、無意味なものだけが目についた。彼は知性的望遠鏡をかまえて、この浅薄卑俗なものが、煙れる遠景の中に没してはっきり見えないばかりに、なにか偉大な、限りないもののように思われた遠いあなたばかりを、

見ていた。ヨーロッパの生活、政治、マソン、哲学、博愛などが、彼にはそんなふうに思われたのである。しかしその時、彼が自分の弱点とかぞえていたような時間でも、彼の知力は、この遠方をも突きぬけて、そこにも同じ浅薄卑俗な、無意味なものを発見するのだった。ところが、今や彼は、すべてのもののうちに、偉大で、永遠で、無限なものを見ることを学んだので、おのずからそれを見、その観察を楽しむために、それまで人の頭ごしにのぞいていた望遠鏡を投げすてて、自分の周囲で永久に変化してゆく、永久に偉大な、捕捉しがたい、無限の生活を、よろこんで観賞するのであった。

(『トルストイ全集6 戦争と平和(下)』)

中村白葉訳、河出書房新社1972年)

「自分の周囲で永久に変化してゆく、永久に偉大な、捕捉しがたい、無限の生活を、よろこんで観賞する」という背景には、次のような考え方がある。

捕虜になってバラックにいたあいだにピエールは、理性でなく、自分の全存在、つまり生命をもって、人間は幸福のためにつくられたものであること、幸福は彼自身のうち、人間自然の要求をみだすことにあること、そして、いっさいの不幸は、不足よりもむしろ過剰から生ずるものであることを、さとった。(同)

このさとりは、次の経験に起因している。

太陽はとうに沈んでしまった。きらきら光る星が空のここかしこにかがやきはじめ、のぼりかけた満月の赤い空やけが、火事のように、空の一端にみなぎって、巨大なあかい球が灰色がかった靄のなかで奇妙にゆれ動いていた。明

るようになってきた。たそがれはすでに終わったが、夜はまだはじまっていなかった。ピエールは新しい仲間のそばから立ちあがって、たき火のあいだを、俘虜の兵隊たちがいると聞いた道路の向こうがわへ行った。彼は彼らと話したがかったのである。ところが路上で、フランスの哨兵が彼をさえぎって、帰れと命じた。

ピエールはきびす(漢字で)をかえしはしたが、それは仲間のいるたき火のほうへではなく、だれもいなかった、馬をはなした荷馬車のほうへだった。彼は足をちぢめ、頭をたれて、荷馬車の車輪のそばの冷たい地面へ腰をおろし、考えともなく考えながら、長いことじっとしていた。一時間以上の時がすぎた。だれもピエールの心のみだす者はなかった。ふいに彼は、持ち前の、ふとい、人のよさそうな声で笑いだしたが、その声があまりに高かったので、八方から人々が、この奇妙な、たしかに一人のものらしい高笑いを、驚いてふり返ったほどであった。

「は、は、は！」とピエールは笑っていた。そして声にだしてひとりごとを言うのだった。「あの兵隊はおれを通さなかった。おれをつかまえて、閉じこめてしまった。そしておれを捕虜にしている。だれを、おれを？ おれを？ おれを — 不滅なおれの魂を！ は、は、は！……は、は、は！……」彼は目に涙をかべて笑っていた。(中略)

明るい空には、たかく満月がかかっていた。さっきまで野営地のそとにあって見えなかった林や野が、いまは遠くにひらけてきた。そしてこれらの野や林の向こうには、ゆらゆらゆれながら、自分のほうへ招きよせるような無限の遠方が、見えていた。ピエールは空を見、遠ざかったりひらめいたりしている星の深所をながめやった。(これはみなおれのものだ、これはみ

なおれの中にあるんだ、これはみなおれなんだ!)こうピエールは考えるのだった。(それをみんな、やつらはつかまえて、板で囲ったバラックへ入れたんだ!)彼はにっこり笑って、寝につくべく自分の仲間のほうへ歩きだした。(同)

ピエールは、周囲に広がる自然の風景と一体となることによって、さとったのである。

関根元神父のばあい

関根元神父は次のように述懐している。

私は終戦の時、特攻隊にいたのです。他の者はみんな戦死して、助かったのは私だけでした……

しかし、やっと日本に帰ってみれば、空襲で家は焼け、家族は死に……そして、将来を誓った恋人もいなかった……

私は人生に絶望して神に救いを求め……そして、自ら神父となって、迷える人々を救うのを、生きがいとして生きて来たのです。

しかし、この町に来て私の信念はだんだんゆらぎはじめた……この町の人々はみな、ささやかな幸せを求めて一所懸命に生きている善良な人々ばかりで、「人はみな罪人」という教えがだんだん信じられなくなって来たんです。そして、いつか私自身、そんな人並みの幸せにあこがれていました。一度は絶望した人生だったのに……

そんな時でした、死んだと思っていた恋人に再会したのは……しかし彼女は、赤線で働く夜の女になっていたのです。私はその一人の女性を救うために、教えを捨てて彼女と結婚しました……

すべてはあの赤い夕日のせいなのかもしれ

ません。不思議なくらい真っ赤なこの町の夕日……

それは悪魔の力でも神の力でもなく……人の心を遠い過去に引き戻す……そして、生きることの喜びや、悲しみを思い出させてくれるのです……

(西岸良平『三丁目の夕日(紙芝居の来る町)』
小学館2000年)

風景のふるえ

身近な風景に心の安寧を得るといのは、鴨長明が『方丈記』に記した次の心境と同じであろう。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望みなし。今さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。

方丈記の冒頭にある「行く川の流るは絶えずして、しかももとの水にあらず」は、水の動きに自らの漂泊を重ねたものであろうが、このような漂泊体験の末、上のような心境にたどり着いたわけである。

水の動きに人生の漂泊を見るという心情は他国にもあるらしく、例えばドイツ民謡「漂泊は水車屋気質 Das Wanern ist des Muellers Lust」の歌詞には「漂泊を水から教わった Vom Wasser haben wir's gelernt」というくだりがある。

固定的な日常を離れて彷徨することによって水のような自然の動きの中に人生を見出す気持ちが生まれるのではないかと思われるが、彷徨の末に人生の安寧の地を見出す鍵は、やはり風景の中の動きにあるように思われる。風景の「風」の基本義は「ふる

える」である。人間は風景の動くさまに人生を感じ、またそのふるえに心のふるえが重なって心が安定するのかもしれない。そうであれば、都市の風景を考える際にはこの点が極めて重要であり、西洋の透視図法的感覚で動きのない景色などを論じても、風景は見えてこない。動きのない、ふるえない景色は、風景のない景色である。

彷徨の意義に関しては、新元良一がバリ－・ユアグロー『憑かれた旅人』の書評の中で次のように書いている。

人はなぜ旅に出るのか。日々の生活から離れ、まったく別の環境を求めようとするのか。(中略)大抵の場合、その目的の根底にあるのは、現実の世界から自分を切り離すことにあるのではないだろうか。ただし、それを達成するためには、ひとつの決まり事がある。普段の自分の殻から抜け出て、生身の「人間」になることだ。(日本経済新聞2004年5月23日朝刊)

自己回復の段階として、日常生活において「私」を見失う、漂泊を通じて「私」を再発見する、その「私」が身の回りの風景に溶け込んで「私」が空になり心の安寧に至る、という段階を想定することができるかもしれない。言い換えれば、自己の「気」を回復してそれが自然の「気」と一致する、ということかもしれない。あるいは、自己の「身体」を回復して自然がその延長になる、ということかもしれない。

なお、を経ないで から へいきなり移行することは可能か、という問題がある。昨今の世相を眺めてみると、彷徨を通じて人間になる方向とは全く逆の方向への動きが広がっているような気がする。つまり、仮想空間

に没入することによって現実の人間を忘れてしまう、という動きである。もしそうであるならば、この点をどう見てどう対処するかということが、都市政策の最大の課題であるに違いない。

(2) 愛から自由へ、有限から無限へ

先の諸例が示唆する重要な事柄は、風景と愛との相互作用、あるいは相乗効果である。また、そこでの風景は鑑賞すべきものではない。能動的に評価しながら見るものではなく、無心に、受動的に見るものである。その場合、見るという感覚も既にないであろう。そのような風景が人間にもたらすものは、愛を通じる自由ではないかと思われる。この点に関しては、クリシュナムルティの『自由とは何か』が参考になる。

私たちはプロバガンダ、すなわち嘘を糧にしてきたのです。私たちはこれらの問題を自分で考え抜かずにきました。なぜなら、私たちのほとんどは導かれることを望んでいるからです。私たちは自分で考え、そして見出すことを望みません。なぜなら、考えることは非常に苦痛で、非常に幻滅を感じさせるからです。私たちは考え、幻滅し、そして冷笑的になるか、あるいは考え抜き、そして超越するかのどちらかです。皆さんがすべての思考過程を超越するとき、自由になるのです。 /

人生にははたして目的があるのかどうか、(中略)もしあれば、それは既知なるもの見地、過去の見地でのみ測ることができ、そして私が既知なるもの見地で人生の目的を測るとき、私はそれを自分の好悪に従って測ることでしょう。それゆえその目的は自分の願望によって条件づけられ、ゆえにそれは目的ではなく

なるのです。(中略)人生の目的を見出すためには、精神は測定から自由でなければなりません。(中略)精神がそれ自身の条件づけから自由なとき、まさにその自由自体が目的なのです。なぜなら、結局、自由においてのみ人は真理を発見することができるからです。ですから、まず第一に必要なのは自由であって、人生の目的を探すことではないのです。(中略)自分自身のちっぽけな要求、追求、野心、羨望、悪意から解放されないかぎり、これらのものからの自由なしに、いかにして人生の目的を探し、発見することができるでしょう？ /

私たちは、自由とは違うものを求めているのです。すなわち、より良い境遇、より良い状態を求めているのです。自由を望んでいるのではなく、より良い、より優れた、よりりっぱな境遇を求めているのであり、そしてそれを助長することを教育と呼んでいるのです。そのような教育が世界に平和をもたらすことができるでしょうか？ /

自由とは、そうしたことはまったく違う何かです。自由はおのずから起こるものであって、探し求めて得られるものではありません。それは、恐怖がないとき、皆さんの心に愛があるときに生まれ出るので。(中略)精神が伝統や知識のなかにもはや自分自身のための安定を求めていないときのみ、自由が生まれ出るので。 /

恐怖にとらわれていない精神は少しも卑小ではなく、ゆえに真の深さを持つことができるのです。するとそのような精神は、愛とは何か、自由とは何かを見出すことでしょう。 /

愛のように、真の善性は思考によって培うことはできません。それは、それ自体としてある状態であって、「私は善良でなければならない」と自分に言い聞かせる精神によって生み

出せるものではないのです。 /

人は非常に真剣でなければならないと思うのです。が、それは何かに掛かりあい、傾倒するという意味ではありません。何かに掛かりあっている人々は、少しも真剣ではないのです。かれらは、自分自身の目的を達成し、自分自身の地位や威信を高めるために、自分自身を何かに委ねたのです。 /

はるか遠くまで達しようとする精神は、ごく近くから始めなければなりません。(中略)ごく近くから初めて、基礎を築かなければならないのです。そしてその基礎を築くためにさえ、自由がなければなりません。それゆえ、皆さんは自分の基礎を自由の上に、そして自由のなかに築くのです。するとそれはもはや基礎ではなく、一個の運動になるのです - 静的なものではなく。

(J・クリシュナムルティ『自由とは何か』

大野純一訳、春秋社1994年)

真の自由にたどり着く経路が、「彷徨 自由 風景 愛 自由」という回路に従って自由を高めていくものであることが、この説明で理解できるような気がする。この回路をどこまでも辿っていくと、愛も自由も無限になる。

小さなものに愛情を感じるの、そこに無限を感じるからという側面があるのであろう。これは、ピエールが自己の中に無限の宇宙を見たのと同じである。つまり、身の回りの風景を愛する人は、そこに見えている以上の大きなものを見ているわけである。

ある風景が有限であったり無限であったりするの、観点が違うからであろう。そこを土地の面積で見たり、許容される容積率で見たり、あるいは金勘定で見たりすれば、有限

である。しかし、風景が含みうる生命の数、風景が人々に呼び起こす生きる力、優しい心などは無限である。風景を無限と感ずるのはそこに美を感じるためであろうが、その場合美とは竹田青嗣が以下のように言うものであろう。

現象学の「本質観取」の方法で「美」の本質を考えてみると、さしあたりそれは「感受化された関係のエロス」と定義されます。われわれが「美しいもの」と呼ぶさまざまな対象の核には、われわれの実存の不安をなだめ、生を肯定し、世界への親和性を醸成しつつロマン性と神性を喚起するような何ものかがあります。さまざまな「きれいなもの」「美しいもの」にはそのような核心的な共通性があるわけです。といっても、美しい対象がそのような核心的な性質を持っているというのではなく、そのような感覚をわれわれに喚起するような対象を、われわれは「きれいなもの」「美しいもの」と呼んでいるのです。また、そのような心性の源泉にあるのは、この世界への肯定感、ロマン性、憧憬、超越性ですが、それらは、自我のエロスが乗りこえられて関係のエロスへと転化していないかぎり豊かに現われないような心性の領域です。美の本質観取はそういうことをわれわれに教えます。

(竹田青嗣『近代哲学再考』径書房2004年)

街づくりを行なう者に美がわからないと、風景は自ずから荒廃し、人々の心も荒廃していく。

(3) 風景の意義

いま都市にとって最も必要なのは、世間の利害に捕らわれない自由を持ち広い視野から物事を判断できる人間である。そのような

人間を育成することが可能であるならば、それを行なうのが現下の最重要の課題であり、風景はそのような政策の主要素になりうるのではないかと思われる。

通常、良い風景をつくるのが都市を良くすることに直接結びつくと考えられがちである。例えば、色や形がそろった街並みを見て良い都市だなどとコメントしたりする。しかし、少し考えればわかることだが、これは美術品や商業デザイン等を眺めるセンスでないかぎり、無意味である。よい都市とは、よい都市社会であると考えらば(それ以外に人間にとって意味のある「都市」はないであろう)、それはよい人間の集合体であるということであり、その人間をつくるのに風景が貢献していることをもって、はじめてよい風景であると言える。

そのような風景は、つくるものではなく、できるものであろう。したがって都市の風景とは本来は計画したりデザインしたりするものではないのかもしれない。しかし都市という人工空間において計画やデザインをすべて排除することも難しいように思われる。仮に計画やデザインの存在を認めざるを得ないのであれば、それらをどのように存在させるべきか、よく考えることが必要である。そしてそれを考えるためには、都市とはなにか、都市は何のためにあるのか、ということを取りあえず考えなければならない。

3. 都市をどう見るか

(1) 新しい都市、新しくない都市

街の中を徘徊してみると、未だに建築工事が盛んであるのに驚かされる。日本がこれから人口急減時代に突入することが全く感じられない。都市社会形成に関する長期的洞

察に基づく建築がどの程度あるのか不明であるが、建築工事を行なわざるを得ない会社経営のとりあえずの都合も相当程度あるのであろう。それで街の姿が急変するのであれば、街づくりとは何なのか、都市とは何なのか、改めて考え込まざるを得ない。

中低層の街並みに軒を並べないようにして巨大な建物が出現している様を見ると、19世紀的都市に20世紀的都市が、あるいは21世紀的都市に20世紀的都市が侵出しているような印象も受ける。歩いていて街から受ける印象も、両者でずいぶん異なる。

古い街並みを歩きながら時折感じたものは、次のようなものだったかもしれない。

マロツィアの密集する家並の壁ぞいに歩いておきますと、まったく思いもかけないときに隙間がひらいて別の違った都市が姿をあらわすのが見えるのでございますが、一瞬ののちにそれははや消えているのでございます。恐らくすべてはどのような言葉、どのような仕草を、どんな順序とリズムで口にし、おこなうかを知るといだけのことなのでしょうし、さもなくばだれかしらの目配せや返事や身ぶり、だれかしらがただそうしてみたいから何かを試してみる - それも自分の喜びがまた他者の喜びともなるようにと - たったそれだけのことで十分なのでございます。そのとき全空間が、高さ、距離、すべてが変り、都市は変貌して、風か、蜻蛉のように明るく透きとおって見えるのでございます。しかしいっさいは偶然のこととでもいうように起るのでなければなりませんし、あまり大袈裟に考えたり、いかにも重大な操作をおこなっているという素振りを見せたりしないで、やがて今にも以前のマロツィアがふたたび頭上に石塊と蜘蛛の巣とかびだらけの天井を閉ざすことに

なるのだということをしっかり心に止めておかななくてはなりません。

(イタロ・カルヴィーノ)

『マルコ・ポーロの見えない都市』

米川良夫訳、河出書房新社1977年)

一方、巨大建築物が建ち並ぶのを見て思いついたのは、次の文章である。

Rather, we think it possible to argue that Lagos represents a developed, extreme, paradigmatic case-study of a city at the forefront of globalizing modernity.

This is to say that Lagos is not catching up with us. Rather, we may be catching up with Lagos.

The African city forces the reconceptualization of the city itself. The fact that many of the trends of modern, Western cities can be seen in hyperbolic guise in Lagos suggests that to write about the African city is to write about the terminal condition of Chicago, London, or Los Angeles. It is to examine the city elsewhere, in the developing world. It is to reconsider the modern city and to suggest a paradigm for its future. In short, we would argue, it is to do away with the inherited notion of “city” once and for all.

(Rem Koolhaas and Harvard,

“MUTATIONS”ACTAR, 2000)

このMUTATIONSには部分的な邦訳があるので、該当部分を以下に引用しておく。

ラゴスに見られるのは、むしろ近代化のグローバルな広がり切っ先に位置する都市についての、ひとつの先進的で極端な範例的ケースと言いうるだろう。

つまり、ラゴスは私たちに追いつこうとしていない。むしろ、私たちがラゴスに追いつこうとしているのかもしれないのだ。

このアフリカ都市は、都市というコンセプト自体の見直しを強要する。ラゴスでは現代の西欧都市のトレンドの多くが虚仮おどしに見えるという事実は、このアフリカ都市について語ることが、シカゴやらロンドンやらロサンゼルスやらの終末状況について語るに等しいということの意味する。それは、発展途上国の他のどこかの都市についての検証でもある。現代の都市について考え直し、都市の未来についてひとつのパラダイムを示唆することでもある。

要するに、私たちが言いたいのはこうだ - ラゴスについて語ることは、「都市」という伝統的な観念を今後いっさい放棄することを意味する。

(『MUTATIONS』 TNProbe 2001年)

(2) 見えない都市、見えにくい都市

ナイジェリアの都市ラゴスは近代西洋都市を「こけおどし」に見せる、ラゴスこそが「先端的」である、これまでの「都市」概念は捨て去ったほうがよい、という指摘は、おそらくパリの表通りやニューヨークなどとの対比で言えることなのであろう。東京の街には、ラゴスほどではないかもしれないが、「先端的な」部分が消滅傾向をたどりつつも未だに広く残されているように思われる。ラゴスの「先端的性」については、コールハースの次の説明が分かりやすい。

私たちが相変わらずそう考えがちな、空間やモニュメントの集まり - 重要であるものもあまり重要でないものもある - が連なったものとしての都市。そしてそれに対して現実とし

て出現している都市。ハーヴァード都市プロジェクトにおいて、私たちは第三世界についての議論への参加を試みました。第三世界とは、物事のあり方の懐かしき思い出として「多様性」がロマンティックに語られ、世界が(グローバリズムという)その計画を着々と拡大化させているにもかかわらず、物事はばらばらなものとして捉えられ、私たちが完全にグローバルな連なりのなかに埋没していようと、あくまでローカルであることに重点が置かれる、そのような世界です。

(レム・コールハース「ショッピング/ラゴス/珠江デルタ/ローマ都市」TN プローブ編『都市の変異』NTT出版2002年)

21世紀的都市とは、第三世界的な都市であるかもしれない。そこに20世紀的感覚で混沌を見るか、あるいは21世紀的感覚で秩序を見るか、この視点の差が都市づくりに決定的な違いを生み出していく。日本がかつて有していた伝統的な「都市」の空間は、西欧近代的定義による「都市」のそれとはおおきく異なるものかもしれない。その風景をどう見るか、長谷川祐子の次のコメントが面白い。

ラゴスなどでは高速道路の高架を屋根代わりに使っていて、私たちからすれば建築の終末、都市のカオスを見るように思われますが、ジャングルやサバンナで育った人々の身体記憶のなかにあるスペース感覚からすれば、あの構築物は快適に見え、彼らなりに適応して「住みこなし」しているのかもしれない。それはそれで大胆で美しい風景だと思うのです。(同)

本来「都市」は最初から形が決まっている

ものではない。目に見えないものも多い。人の存在や動きの形が「都市」であり、それはいつまで経ってもプロセスである。そのような「都市」と静的「計画」としての「都市」とのギャップは大きく、そのギャップはモダン都市信仰が崩れ去った現在ますます大きくなっている。「計画」の対象となる都市を入れ物と見れば、それが西洋モダニズム的視点での都市であろう。入れ物だけでその都市の実態、その都市の良し悪しを判断することは不可能である。入れ物は目に入りやすいが内実は目に入りにくい。

古い街並みを歩いていると見えないものの価値がわかってくるが、また、見えにくいものの価値もわかってくる。例えば、建物の前に置かれた鉢植えや縁台など、机上の図面からは認識できない小さなものの価値を発見する。このようなものが建物の内と外との媒介物になっており、また、見えないものを見えるようにする役割をも担っている。このような媒介物は、近代的で巨大な建物の周囲にはほとんど存在しない。たまに目にしても、それは居住者が手入れをしているものではなく、建物の管理会社がメンテナンスしているものがある。媒介物になっていない。

西欧近代の思想は基本的に視覚に立脚するものであるらしい。ルネサンスが透視図法を発見し、都市をはじめて絵画にしたのもルネサンスであると言われている。20世紀の都市は、少なくともいわゆる「先進国」の都市は、その特質をよく表わしている。都市計画関係者の主たる関心事は都市の絵を機能的、幾何学的に描くことであった。地霊などを気にかける者は少なかった。既存の街を再開発する場合、植木鉢や縁台が今どのように配置されているかなど、きめ細かなところ

に思いが及ぶ者も少なかったであろう。都市計画者の主要関心事はコミュニティではなく施設にあったのかもしれない。

しかし、そのような発想は過去のものとなりつつある。近代の思想を疑問視する声が日本でも強くなっていることは周知のとおりである。21世紀の都市は20世紀的であってはならないとする意見も出てきている。その際の一つの重要な論点が、見えないものや見えにくいものをしっかりと見るということであろう。このような考え方は決して目新しいものではなく、例えば G・カレン『都市の景観』（鹿島出版会1975年、原書は1971年）にはエブ・サドリン『ロンドンの散策者』からの次の引用がある。

小さな公園はチェルシー堤とチェイニ遊歩道にはさまれたテムズ川べりにある。この楽しい場所には、美しい老樹、灌木の茂み、岩石庭園、ベンチ、有名人の彫像などがあり、<王の頭と八つの鐘>という古い居酒屋がよくみえる。そこは足を向けるだけの値打ちのある場所だ。あなたは木々の緑を満喫し、チェルシーの愉快的な人びとといっしょに憩いのひとときを過ごすことができる。しかし、この公園を地図の上で捜そうとすると、とたんに困難に遭遇してしまう。いつも使いなれているロンドンの地図をみても、公園の正確な場所を知るのはむずかしい。(中略)そう、たしかに公園はそこにあるのだが、それは左隅の WALK という「文字」の下小さな松葉のような形をした一画にすぎない。それが公園の全体なのである。(北原理雄訳)

カレンは、「大草原のような途方もないスケールを平気で計画に持ち込むプランナーは、

この言葉を銘記すべきである」と述べているが、日本の場合、路地にある鉢植えや縁台など都市計画の図面に載ってこないものに大きな値打ちがあることを銘記すべきであろう。21世紀の都市づくりはこのようなきめ細かなところへの配慮を要するものであろう。

それでは、20世紀の都市と21世紀の都市とはどのような理由でどう異なるのであろうか。

4. 20世紀の都市、21世紀の都市

(1) 20世紀の都市

20世紀は大都市の時代であった。すなわち経済活動が集中する時代であった。人や物が加速度的に集まり、それにともなって事務所、住宅、交通、その他のさまざまな需要が集中した。このように集中する需要をいかにうまくさばくかが都市づくりの最大の課題であった。要するに20世紀の都市政策とは供給政策であった。

集中するさまざまな需要は都市に何よりもまず供給の量を求めていた。大量の交通を円滑に流すために曲がった狭い道路は真っ直ぐな広い道路に置きかえられた。事務所や住宅は高層化されていった。地面の上に配置される機能は地域ごとに純化され、経済活動に直接結びつかない住宅や大学などは郊外におし出された。事業所やインフラを設けるために非事業所施設が外延部におし出された。

都市を扱う学問は何より効率性の向上を基本的な視点とした。分野としては都市工学や都市経済学が中心となった。都市工学では生態的な形態を排し幾何学的な絵を描いていった。都市経済学では一極集中を是とする理論が展開されていった。それらの諸

学においては都市全体のあるべき姿は効率性の観点から導出されるものとなり、個々のプロジェクトの効率性向上が都市全体の効率性向上に結びつく状況であったことから、研究の視野はしばしば個々のプロジェクトに狭められた。すなわち、特定のプロジェクトをいかに経済的になり立たせるかという研究が盛んに行われ、欧米のさまざまな事業制度が熱心に研究された。そのような研究はほとんどマクロの視点を欠いており、プロジェクトの研究と都市総体のあり方の研究との間の連環は失われていた。

これらの研究では人間の心にはほとんどあるいは全く関心が払われなかった。ましてや人間の魂には無関心であった。これは歴史、文化、風土に対する無関心と表裏一体のものであった。歴史的な土地相を完璧なまでに漂白してその上に機能的な絵を描くということが何の疑問もなく行われた。都市工学にしても都市経済学にしてもアメリカ由来の要素を濃厚にもっていたことがそれに拍車をかけたとも言われている。

都市への需要が極めて旺盛であったことから、経済的観点では建築物を高層化したり道路を拡張したりすることに疑問を差し挟む余地はなく、都市全体の計画は個々の施設計画の集積であっても大きな問題がなかった。政策分担も縦割りで大きな問題が生ずることがなく、むしろ効率的な面があった。都市整備の指標としては質よりも量が重視された(交通の渋滞度や事務所の床面積等)。「都市を美しくしようなんて、とんでもない奴だ」という意見もあったというが(田村明『美しい都市景観をつくるアーバンデザイン』朝日新聞社1997年)、機能を追究した形が最も美しいという近代の考え方からすれば、その

ような意見は合理的であったと言うべきであろう。

(2) 逆さまに考える

都市整備が進むと同時に経済社会環境が変わって需要圧力が緩和されてくると、かつて量的充足を求めていた需要は質的充足を求めるようになった。また、専門家に任せていた街づくりを自分たちの手で行いたいという需要も出てきた。さらに、海外旅行が一般化したこともあって都市全体のあり方に対する関心も高まってきた。ところが専門家の方は整備の効率化を推進する観点から都市を見てきたため、工学的ないし経済学的に都市全体のことを語ることはできても、哲学的、倫理的、美学的、生態学的、社会学的、心理学的、歴史学的に都市を語ることが難しくなってしまった。これは、都市がさまざまな分野の総合された空間であることを考えると、著しく不自然な状況である。この点に関して伊藤滋はおよそ10年前に次のように述べている。

これまでの都市計画といえば、市民の側からみれば、(中略)実に堅苦しいもの、憂うつなものとして受け止められていたと思う。(中略)もちろん、これは健全な地域生活を維持していく上で必要なことである。しかし問題は、それを実際に運営してきた専門家たちが、実は確たる基盤に立っていたわけではないとわかってきたことである。(中略)例えば、安全。(中略)次に、快適ということ。(中略)美しさもその重要な領域に入ってくる。(中略)しかし、では何のために快適でなければならないかという疑問を呈したときに、都市計画の専門家が返答に窮することがある。(中略)

高度成長を経て、日本人全体の生活が格段に向上してくると、一口に安全な町といっても、「そもそも安全とは何か」という、一步踏み込んだ議論がなされるようになる。安全が意味する内容次第では、その安全よりも今自分が持っている財産を最大限使うことのほうに価値を置きたい、そのためには安全などいらないという議論さえ出てくる。これは市民が豊かになった結果なのである。

ところで、市民にとっての豊かさといった場合に、単に金銭面で豊かになっただけではなく、情報が豊かになったという面も大きい。多くの情報に対する判断力も非常に向上してきている。ところが専門家といわれていた都市計画の技術者や事務職は、市民たちが高度に発達したマスメディアを通じて日々頭に入れ、体に染み込ませている情報以上に、十分専門的な情報を取り入れているかといえば、必ずしもそうではないのである。(中略)

専門技術者であれば、『都市計画』や『都市問題』などという雑誌を見ながら現場を探しに行くのだが、若い女性や奥さま方は、主婦の雑誌や若い女性専用の雑誌を見て出かけていく。実は、このような一般向けの雑誌のほうが生々しく街の中での楽しさや怖さを伝えており、情報の収集力が非常に高くなる。(中略)

技術者のほうは(中略)「法律第何条によれば」とは言えても、(中略)一般の市民といわゆる街づくりの専門家とが議論したときに、街づくりに関心を持っている市民のほうが街について詳しい、などということが起き始めたのである。いってみれば、専門家という集団が、もはや専門家としてすべての点で権威的な形では動けなくなった - このようなことが、ここ十年あたりの日本の街づくりに実際に起きてきている。(伊藤滋・大都市生活構造研究会編著)

『新都市誕生論』PHP 研究所1995年)

哲学、心理学、社会学、美学等に堪能な都市計画の専門家が強く求められるが、街づくりの主役はあくまで街を総合的に見ている市民であろう。それに関して伊藤滋は次の提案をしている。

専門家と市民とがどのように連携していくべきか。結論を先にいえば、話し合いの場を数多く設け、なるべく頻繁に多くの人々と話をすることである。専門家がこのようなことを意識して行わなければ、街づくりがこれから至るところで軋んでくるのではないかと思う。(中略)

役所からも市民からも信頼されるような人の存在こそが重要な時代になっていると思う。そうなれば、街づくりが、何かわからないところで動いていくというのではなく、中心になる人と市民、同時に役所の人の会話が秘密裡にではなく、割に自由に行われるようになる。これは街づくりを進める上で非常に大切なポイントなのである。(中略)

では、具体的にどのような人かといえ、それがなかなかいないのである。(中略)自由業として一人の人間が、場合によっては何人かの専門家を使いながら、街づくりに関わっていった、一つの仕事として皆の話をまとめていくという人たちの組織が必要になってくるのではないかと思う。(中略)このような人たちをサポートするには公的な資金が必要になる。公的な資金を市役所や県庁が出資し、市役所や県庁の役人の言葉ではなく、市民にわかる言葉で話をする。これからの都市計画では、このような自由業的な人が必要になってくると思う。(中略)

なるべく街を維持するためには、そこに住ん

でいる人たちに最大限さまざまな形で働いてもらう、それによって環境を守るための無駄なコストを使わないことも重要だと思う。(中略)人的な資源をもっと活用し、無駄なお金を使わないようにして、都市の環境を維持していくことは、非常に大切な問題なのである。(中略)

以上のように考えると、都市計画をもっと市民に近づけなければいけないと思う。(中略)それは、女性やお年寄りを、ただ単にご意見拝聴とか、単純な労働力として使うのではなく、(中略)都市計画の専門家と、お年寄りや女性も含めた一般市民とが協力して街づくりを行なっていくということなのである。(中略)

以上述べてきたようなことを、私は「母親型の都市計画」といっている。(中略)一方では、街づくりには、どんなに反対があっても今これをやらねばならぬという都市計画もある。(中略)これは、いってみれば「父親型の都市計画」なのである。(中略)科学技術的知識をきちんと揃えることができれば、父親型の都市計画においても、ただ単に反対というのではなく、真に市民が参加できるようになるかもしれない。

(伊藤滋前掲書)

これからの都市づくりにおいて重要なことは単なる表面的技術的な発想ではなく「そもそも何か」という根源的な問いについて考えること、役所のいわゆる専門家ではなく市民が中心になること、透明性を確保すること、役所と市民とをつなぐコーディネーターを育成・援助すること、余計な金をかけず地域の人的資源を活用すること、人々の生きがいの創出を重視すること、基幹的な都市計画についても技術情報を開示して真の市民参加の下で行うこと、ということになる。ここから21

世紀の都市が見えてくる。

(3) 21世紀の都市

21世紀は小都市の時代である。20世紀は集中する需要をまかなうためにテクノロジーに依存した巨大都市を生み出したが、21世紀は人口減少、グローバル化、IT化、地球環境制約等を背景に分散する需要をヒューマン・スケールでまとめあげる都市の出現が期待される。市民の視野におさまる都市のあり方を考えることが重要であり、また、散じょうとする需要をうまくまとめて環境のよい都市をつくることを考えることが重要である。

要するに21世紀の都市政策は需要政策である。自らの手で地域をよくしていきたいという人々の潜在意欲を顕在化させることが重要になる。したがって、まずはコミュニティ形成というソフトな発想が求められる。

都市の形態としては、人々が地域にアイデンティティを感じることができ、また、自然を感じることができる生態的なものが求められる。都市再開発はスラム・クリアランス型のものでなく既存建築物修復型のものが、それが難しければ既存市街地と調和するような緩慢な地区再構築が求められる。道路は広くて真っ直ぐなものではなく狭くて曲がりくねったものが、住宅は高層で各戸画一的なものではなく中低層で各戸多様なものが、交通手段は自動車ではなく徒歩が、小売店は自動車利用前提の大型店舗型ではなくモール型が、より強く求められていく。外延部に押し出された諸機能を都心部に呼び戻してコンパクトな都市形態を実現することも重要な課題である。これに関しては、例えば次の指摘が参考になる。

これからの都市のあり方としては、拡散型ではなくコンパクトな都市構造が求められている。また、市民が安全で安心して暮らせるためには、まず、都市そのものが事故や犯罪の少ない「健康で美しい都市」でなければならない。(中略)地域住民の生活や地域の特性を重視した「生活の論理」に基づく「コンパクトシティ」の実現が都市戦略として重要である。その結果、地域のコミュニティや文化を大切にしたい個性あるまちが整備され、それぞれをネットワークで結ぶことによって(中略)まち全体が快適で住み良いまちになるのではないかと思う。

(笹山幸俊

「住民とともに汗と知恵を結集するまちづくり」
日本都市計画学会『都市計画』2004年4月号)

個々の街の単位で主体的な整備を行ないそれをネットワークでつなげていくという発想が興味深い点である。次の指摘も参考になる。

日本人の生活に鑑みて最も評価できる市街地とは、今まで計画の手が入っていない地区で、小スケールの市民参加やコミュニティの組織活動(まちづくり)を通じてデザインし直された地区であると考えた。このような伝統的な地区が、徒歩圏内に揃っている商店街・教育施設・公共交通を伴って機能的・社会的にもミックスされた高密度な住宅地域を形成している。またその中にある狭く折れ曲がった路地も特徴的であり、歩行者の歩行や子供の遊び場として使われており、車は通れるが注意してゆっくり進まなければならない。日本の街区の伝統的な特徴である強い社会ネットワークが今日まで都市の形態にも影響を与え続け、民間投資本意の都市更新の流れに対峙するものとして、

重要な位置づけを保ってきている。

こうした日本の街区の建物や道が、非常に小さく欧米の基準に合わないものと捉えられる一方で、日本人の生活様式は他国の都市への貴重な経験となっている。ニューアーバニズムのように主に欧米で近年主流の都市計画の風潮は、車依存・スプロール・大スケール・単一用途のような米国の都市の欠点に対する改善策として、コンパクトで、徒歩を主体とした、混合用途の開発を促進させようと努めている。米国ほど都市のセグレーションが起きていない欧州諸国でも、機能分化、都市の生活感の喪失、郊外化といった問題に対して、道路幅の縮小、ランプ・クルドサックによる自動車速度の低減と並んで、都市のソーシャルミックスや多機能化を進める多くの取り組みにつながっている。

(カローラ・ハイン(ドイツ))

「外国人からみた日本都市計画のプレゼンス」
日本都市計画学会『都市計画』2004年4月号)

「日本の街区の伝統的な特徴である強い社会ネットワークが今日まで都市の形態にも影響を与え続け、民間投資本意の都市更新の流れに対峙するものとして、重要な位置づけを保ってきている」という指摘が特に重要である。

さて、都市の課題が供給側から需要側にシフトするに伴って、都市を扱う学科(以下、都市学という)もパラダイムの180度の転換が必要となる。経済学ではケインズ主義的デマンドサイドの経済学からサプライサイドの経済学へ、あるいはさらに経済体制論へと主軸がシフトしたように思われるが、都市学でも同様のシフトがあるべきであろう。これは経済学とは逆方向のシフトとして認識される。

経済学はこれまでいかにデフレ・ギャップを埋めるかという観点からの分析を進めてきたのに対し、都市学ではいかにインフレ・ギャップを埋めるか(都市のキャパシティを引き上げるか)という観点からの分析を進めてきた。それを逆転させて、いかに潜在需要を顕在化させるかということがこれからの都市学の大きな課題になる。ただし、それはもはや即物的な豊かさを追求するためのものではありえない。

これからの潜在需要の顕在化は、常に供給側と表裏一体の問題として考えることが必要になる。供給側の問題には大きなものが2つある。ひとつは構造的な供給過剰の問題である。もうひとつは地球環境問題等から来る供給制約の問題である。国民経済においては生産性の著しい上昇に伴って先進国の供給力は構造的に過剰になりつつある。グローバル化の進展を考慮すると過剰の度合いはますます大きくなる。需要は今後の中長期的な激しい人口減により急激に縮小する。一方、地球環境問題等経済学がこれまで外部に置いてきた問題が経済活動にとって致命的な問題になりつつある。

都市においても事態は全く同様であり、オフィスビルに代表される床の構造的な供給過剰、人口の減少に伴う都市施設の過剰、およびヒートアイランドに代表される地球環境問題等から来る都市活動の限界という大問題がある。

経済学と都市学とは両極端から同じ方向へシフトしつつあるとも言える。このような観点から、経済政策論が都市にとって大変参考になる。例えば、経済体制改革論では公の範囲を見直す視点が重要になるが、これは都市風景にとって決定的に重要な視点に

なる。

以上のような構造変化を前提とすると、これからの都市研究は効率性の向上を基本的視点とするものではない。需要の顕在化のあり方を諸施設の供給過剰あるいは都市活動の限界とあわせて考察する視点が基本になる。入れ物としてではなく社会としての都市が基本的視点となる。これは例えば人々のつながりを自発的なものとして強化する視点である。つまり社会的共通資本を創造する視点である。

学問分野としては、かつての都市工学や都市経済学と並行して社会学や歴史学、心理学、哲学、文学、風土学、美学、宇宙物理学、言語学、記号学、認知学等が同等に重要になる。新しい学が最も関心を払うべきものは人間である。これは、先にも述べたように、歴史、文化、風土と表裏一体のものである。

都市づくりの主たる目的はコミュニティ形成ということになるので、都市整備の効果として測定されるべきものは定量的なものではなく定性的なものの割合が高くなる。たとえば、地域住民の自信、地域への愛着度、明日への希望、人々への連帯感、等々が重要になる。事業の進め方としては、まずは住民の話し合いから始める。その過程で良い絵が生まれてくることを専門家がさまざまな助言をしつつ辛抱強く待つ。その結果として街づくりの具体的事業の優先順位が決まってくる。その事業は特定の分野に限られるものではなく、住民組織を強化しようというものであるかもしれないし、教育を高度化しようというものであるかもしれない。このようなことは既におよそ10年前からイギリスの再生政策における基本的な視点となっている。いきなり具体

的な事業を実施するのではなく、まずは住民の間での話し合いを促進するところから始める。

以上を一言でまとめれば、20世紀は全体を部分に分ける時代であったが21世紀は部分を積み上げて全体にする時代である、ということにもなる。多少繰り返しになるが、最後に要点をまとめておきたい。

20世紀の都市政策は供給政策であった。需要をいかに賄うかというのが基本的な視点で、要するに足りない物をいかに効率よくつくるかという政策であった。この政策は極めて単純な視点で行うことができた。工学的観点、制度的観点、狭義の経済学的観点で考えればよかった。都市とは何か、社会とは何か、人間とはなにか、などという面倒なことはあまり考えなくてもよかった。政策をテクニックのレベルで、シミュレーション可能なものとして考えればよかった。政策をすぐに役立つ即物的なものとしてとらえても大過はなかった。少なくともそう思われていた。その時代は終わってしまった。今都市で問われていることは「都市」なる場が人間を幸福にするか否かということである。

かつて都市政策の中心が供給政策であった時は人々のニーズは基礎的なものが中心でその内容はおおむねわかっていたので、主に供給側が政策の内容を決めることができた。しかし経済水準が高くなって人々のニーズが多様化し、更に社会問題、環境問題等の複雑な問題が出てくると、需要の内容を把握することが次第に難しくなり、必然的に政策決定プロセスにおける需要者の役割が大きくなる。身近な街づくりに関しては、やがてその内容のほとんどを需要者が直接的に決める時代になるかもしれない。

人々のニーズをいかに都市づくりに向けさせ、主体的に現実空間をつくっていったらうかということがとても大切な課題になる。そしてこれは大変複雑な課題である。都市とは何か、社会とは何か、コミュニティとは何か、人々の幸福とは何か、何のために現実空間を良くしなければならないのか、生きるとは何か、という問いに人びとが自ら向き合わなければならない。もちろん都市の専門家は率先してそのような問題に真剣に取り組まなければならない。

我々は既に21世紀に生きている。しかしまだまだ20世紀的である。鹿島茂によれば、「ヨーロッパではここ数世紀にわたって、世紀の切り替わりは15年ほどずれこむのが慣例になっている」(鹿島茂『パリ・世紀末パノラマ館』角川春樹事務所1996年)。その理由は、「ひとつの世紀に対して総括を出すのに世紀末の15年を要するばかりか、そこから新しい世紀を生み出す準備にまた15年を必要とする」(同)ということである。これから大きな変化が起こるのであろう。これからどのような変化が起こるのか、あるいは今足元でどのような変化が起きているのか、次項から経済、社会、生態の順で考察していこう。

5. 都市の経済

(1) 経済の意義

この項の目的は都市を経済の観点から考察することである。このように述べるとおそらく直ちにイメージされやすいのは、都市の経済活動をいかに効率化するか、活性化するかという類のものであろう。しかしこのような「経済」理解は大変狭い。経済活動の効率化、活性化というのは経済のひとつの視点にすぎない。

「経済」が「経世済民」に由来することは周知のとおりであるが、その具体的な意味を大辞林(第二版)により見ると以下のようになっている。

- (1) 物資の生産・流通・交換・分配とその消費・蓄積の全過程、およびその中で営まれる社会的諸関係の総体。
- (2) 世を治め、民の生活を安定させること。
- (3) 金銭の出入りに関すること。やりくり。
- (4) 費用や手間が少なくてすむこと。節約。

商売の観点から街をつくと(4)を象徴する風景ができることがある。都市づくりをプロジェクト単位で眺めると(3)への関心が高くなりがちである。(2)は大変広い意味であるが市民社会としての都市にはなじまないお上の視点の概念である。

都市の経済を総合的に考察するときは(1)の視点が重要になる。重要なのは「全過程」を考察することである。「全過程」というのは営まれる経済活動全てであって言うまでもなく市場経済に限定されない。また、短期的な経済のみならず長期的な経済も含む。むしろ后者が重要である。都市は極めて長きに渡って、通常であれば数世代以上に渡っ

て存続し続けるものであるから、そのような都市をつくる際に短期的な採算を優先するのは不「経済」である。ジェームス三木の次の見方が参考になる。

ドラマの主演には絶対条件が二つある。一つはトラブル解決能力。もう一つは人生を持っていること。これは街づくりにも通じるはずだ。

人生とは何か。好みやこだわりの積み重ね、個人の文化の集積だ。江戸当時の日本人は熾烈に人生について考えていた。自分はいかに生き、死ぬべきか。人生観を突き詰め、潔さ、奥ゆかしさ、気品が生まれた。

今は学問が自分を高めるためでなく、受験や就職、金もうけの手段になりつつある。日本人はこの50年間、生活の向上ばかりを目指した。(中略)

政治や経済は文化を支える手段にすぎない。手段が目的化すると世界中おかしくなる。(中略)どうも私たちは若い人に手段ばかり教え、目的を教えていないのではないか。(中略)観光収入も大事かもしれないが、文化を大事にした街・人づくりを考えてほしいと切に思う。

(ジェームス三木「100年後の街に残る文化を」
『ふるさとづくりシンポ2004』

日本経済新聞2004年5月5日朝刊)

経済をきちんと把握するためには、先の定義で見たように社会の成り立ちをしっかりと視野に入れておく必要があるということであろう。社会に関しては後に考察することとし、以下ではまず経済政策論の様相を手がかりにして狭義の経済に関する議論の動向を見てみよう。

(2) 経済政策論

今回の長期不況ではさまざまな経済政策論が展開されたわけだが、その実に混乱を極めた様相を見ておくことが意外にもと言うべきか強引にもと言うべきかこれからの都市を考える上で極めて役に立つ。以下その内容を概観する。

経済政策論の分類

昔に比べると最近の経済政策論は実に多彩であるが、ここでは思い切って以下のような単純な分類を設ける。

- < > 財政拡張派
- < > リフレ派
- < > 金融・産業再生派
- < > ビジョン派
- < > 倫理回復派
- < > 何もしない派

各派の主張の要点を簡単に述べると、は公共投資等で財政支出を拡大すべきという主張である(その前提条件はいろいろある)。は金融政策を中心に強力な対策を講じてデフレから一刻も早く脱却すべきという主張である。はまず不良債権を処理すべきという主張である。は短期の政策は手詰まりなので人々の意欲を高めるための長期ビジョンをつくるべきという主張である。は日本の組織、人間自体がだめになっているので教育等で日本を改造すべきという主張である。はじたばたせずじっと耐えるべきという主張である。

高度成長期から安定成長期にかけてはいわゆるケインズ政策が全盛で、景気対策としてはの財政政策が主流であった。その後、

変動相場制への移行や金融取引の自由化を背景に景気対策としての有効性は徐々に財政政策から金融政策へとシフトしたが、バブル崩壊後の経済対策等を背景に財政赤字が急膨張したことがその動きを加速させ、現在ではに替わってが主流になっている。

一方、バブル崩壊で金融業、建設業等特定の業種に不良債権が累積してそれが経済循環の障害になっているとの認識から、まずそれを取り除くべきであるとするの主張も1990年代の早い時期から有力になっている。

その後、不況が長期化して失われた10年などと呼ばれるような状況になったことから、もはや短期の経済政策では日本経済は復活せず日本経済の構造を長期的視野で改革するためのビジョンが必要であるとのの主張が出てきた。この派は年々有力になってきているような印象があるが、それは市場飽和问题、地球環境問題等、市場経済の構造問題あるいは外部問題が大きくなってきたことによるものと考えられる。

の主張はデフレ不況以前から存在するものであるが、日本社会の特殊性、閉鎖性がいよいよ経済の停滞を深刻化させているとの認識から最近再び強く主張されるようになってきている。

の主張は、現下の状況はデフレ不況と呼ぶべきものではなく物価下落は国際環境の変化等により必然的に引き起こされているものであるから、それに日本経済が適応して自然治癒力を発揮するのを待つべきであるという比較的新しい説である。

次項では各派の具体的な主張を識者の文章を引用しつつ概観する。

各派の主張

< > 財政拡張派

(主な論調)

八田達夫の以下の主張がわかりやすい。

かりに乗数効果を一として、波及効果が何も無いとしても、不況下では余っている貯蓄をだれかが使ったほうがよいのですから、それなりの効果はあるでしょう。(中略)私は、財政政策の金額としては、みんなが考えているよりは大量に支出すべきだと思っています。いわば、低い均衡と高い均衡があって、放っておくとすぐに低い均衡に戻ってしまいますから、ある種のビッグ・プッシュが必要です。そのビッグ・プッシュを持続的に与えることが必要で、景気がちょっと回復したからといってまた減らしてはならない。持続的にある程度の財政支出の努力はすべきです。

(岩田規久男・八田達夫『日本再生に「痛み」はいらない』東洋経済新報社2003年)

乗数効果が1でも「それなりの効果はある」というのは特に経済が危機的状態にあるときに必要な発想であろう。その場合政府支出の効果は投資でも消費でも同じということになる。

複数均衡の考え方に関しては、クルーグマンが「均衡点を複数つくれば話が簡単になりすぎる」と指摘しているが(ポール・クルーグマン『クルーグマン教授の<ニッポン>経済入門』山形浩生訳、春秋社2003年)、このクルーグマンの指摘はマクロのレベルで考える場合に説得力がある。一方、ミクロの質的効果がマクロの量的効果に結びつくと考えれば、複数均衡というのは重要な視点

であるように思われる。

例えば街づくり活動に対して集中的に財政援助を行なうことによって街づくりが軌道に乗り、後は街の人たちの自発的な活動によって街が活性化していく、ということが考えられる。このような考え方は発展途上国に対する援助のあり方を論ずる開発経済学では古くから「離陸理論」のような形で論じられていた(例えばロストウの『経済成長の諸段階』などが有名)。通常の経済状態では地域活性化への集中的な財政資金投下は行ない難いであろうから、デフレ・ギャップが大きい時に構造改革をかねて集中投下し新しい均衡点へ移行する、という方法論は一考に値するように思われる。財政拡大効果はこれまでマクロでしか論じられてこなかったが、どのような経路を通じて波及効果が生じるかということの詳細に分析してみると財政政策の有効性を確保する新たな方法が見出せるかもしれない。周知のようにマクロ経済学に対してはミクロ的基礎を欠いているとの批判が行なわれてきているが、経済が構造変化を起こしつつあるときはマクロ経済とあわせてミクロ経済の質的变化を視野に入れることがとりわけ重要であるように思われる。特に財政拡張派やリフレ派などのようにマクロ的手法の有効性を前面に出す主張を行なう場合には、その背後にどのような経済構造改革が必要なのか(あるいは市場に任せればよいので必要ないのか)をあわせて考えることが重要であろう。

財政拡大の波及経路に関しては、インフレ効果を通じた波及を考える小野善康の次の文章も興味深い。

まったく意味のない公共事業であっても、非

常に大規模に行えば効果があるということは指摘しておきたい。しかし、そのメカニズムは、ケインジアンがいうように、その時点で所得を増やすことができるから、ということではない。(中略)要するに、インフレ効果が消費を刺激させるのである。(中略)何が何でも最も効率的に活用しないならば、やらないほうがよいということではなく、何かで活用しさえすれば何もしないよりもよほど役に立つと考えることが重要である。(中略)モノをもっと買うようにして、失業という最大の無駄を省くようにすべきである。(中略)非効率な公共事業よりも、労働力を失業状態のまま放っておくことのほうが、よほど非効率であることを忘れてはならない。

(小野善康・吉川洋編著『経済政策の正しい考え方』東洋経済新報社1999年)

〔公共投資の乗数効果〕

財政政策に関しては乗数効果の大きさが話題になることがある。通常は内閣府の短期経済モデルで公共投資の実質乗数の推移を見るのであるが、それは長期的には低下してきている。特に1970年代後半における落ち込みが激しく、また、1990年代においてもおおむね緩やかに低下している。その理由としてはマンデル=フレミング効果やリカードの中立命題が言われているわけだが、1970年代の落ち込みは変動相場制への移行を背景に前者が、1990年代の落ち込みは財政赤字の急膨張を背景に後者が主な要因になっているという考え方が説得力がある。

一方、乗数効果は低下していないとする説もある。そのひとつの根拠はモデルの数値は単純には比較できないというものである。特に1970年代後半の低下はモデル構造の

抜本的変更により過大に出ている可能性が高いようである(古いモデルは供給面を考慮しない構造になっている)。また、その後もモデルの構造が変更になっているので、多少の変化は誤差の範囲ということらしい。ただし1970年代後半の低下を全てモデル構造の変更に戻すことはできない(当時はそのモデルが現実に適合していたのであるからむしろ現実の経済が変わったという側面も大きい)。また、その後についても誤差の範囲とは言えるものの、数値の多くが低下方向に偏っているという状況である。

なお、乗数は低下していないと主張するものの中には名目乗数で論じているものもあるが、短期経済モデルの基本構造は実質で組み立てられている。実質乗数を名目乗数に変換する際には公共投資の波及効果以外に公共投資の変化が引き起こす物価変動も入り込んでしまう。すると、公的固定資本形成デフレーターより GDP デフレーターの方が上昇率が大きい場合ないし低下率の縮小幅が大きい場合(デフレ下における建設不況の場合など)には、名目乗数は大きく出してしまう。また、GDP に占める公的固定資本形成の割合が小さいほど名目乗数は大きく出してしまう(デフレーターの変化は公共投資追加前の数値にも影響するため)。実際、1990年代後半において名目乗数と実質乗数との乖離が生じているのであるが、この間デフレーターは1995年暦年基準で2001年度の数値が公的固定資本形成93.9、GDP94.6となっており、また、公的固定資本形成の対GDPシェア(実質)は1995年度8.6%から2001年度6.6%に変化している。

なお、企業経営ですら下記のように実質で論ずべきとする意見がある。

ビジネスは名目の世界という発想は従来型の売上重視経営に近く、実質価格重視は利益重視の経営に近い。企業経営の本筋は後者であって、価格下落が普通になった時代に起きた大きな変化は、売上高一点張りの経営がもはや不可能になったということである。

(小菅伸彦『日本はデフレではない』

ダイヤモンド社2003年)

乗数は低下していないとする主張にはその理論的根拠が示されていないものがあり、その点は大きな問題だと思うが、経済モデルの精度の関係上、あるいは採用した方程式の構造上、変化は誤差の範囲という可能性はおおいにあるものと思われる。1.2を1.1や1.05などと区別する合理性はないかもしれない。もしそうであるならば財政政策には多様性、柔軟性を持たせることができるであろう。

例えば、都市関係で言えば地域の人々による街づくり協議会の設立・運営に時限的に手厚い財政援助を行なうということが考えられる。これは全国の都市にまんべんなく適用可能な政策であり、また、地元の人々を中心とした街づくり活動を活性化する政策なので、地元経済の拡大効果を全国的にもたらすことが期待できる。

< > リフレ派

(財政政策から金融政策へ)

景気対策の中心的な手段はかつては財政政策であった。金融政策の効果は財政政策に比べて小さいと考えられていた。特に日本では「ケインズ政策」に「人気」があった。ところが1970年代初頭に国際為替市場が変動相場制に移行したことから状況は一変し、

財政政策は無効だが金融政策は有効と言われるようになってきた。その傾向は1980年代以降金融の自由化が進展したことから一層強まった。さらにその後のデフレ経済の下で金融政策の有効性はますます強く主張されてきている。例えば浜田宏一は次のように指摘している。

財政政策でなければデフレは治らないという人々が金融政策ではなくて財政政策が必要と言っているのだとすれば、まったくわかりません。人がそう信じているのだから財政政策は有効だという意味に限り、私は財政出動に反対ではありませんけれども常備薬を使わないで、風邪になったのに風邪薬を使わないで胃腸薬が効くと、胃腸薬を飲ませて風邪を治そうというのが、現在の政府一部のデフレ対策であり、またマスメディアの大半の記者が思っている認識であるようです。少しずつ変わってきてほしいですね。

(浜田宏一「日本経済の停滞に対しどのような政策が考えられるのか」『ESP』2003年1月号)

財政政策から金融政策へのシフトについては、野口旭が次のようにまとめている。

財政政策の効果は非常に限定的だという点は、学界でも合意が得られつつある。旧ケインジアンは概ね、「金融政策は効果はないが、財政政策は有効だ」と考えていた。しかし、新保生二「デフレ対決の勝利宣言は時期尚早」(『論争 東洋経済』2000年3月)が紹介するように、マネタリズムとの論戦と理論的混淆、そしてその後の実証研究の結果、現在のマクロ経済学者の多くは、マクロ安定化政策の中心はむしろ金融政策だと考えている。典型的なの

は、90年代前半のアメリカの景気回復過程である。(中略)この緊縮財政と金融緩和という政策ミックスは、今後の日本のマクロ政策運営においても大いに参考になる。

(野口旭『経済学を知らないエコノミストたち』
日本評論社2002年)

ケインズ政策が有効であるとするのは既に日本だけであるとも言われ、それは日本の経済学が外国に比べて遅れているためであるとも言われていたようだが、今や日本でも景気対策としては財政政策よりも金融政策を主張する識者が圧倒的に多くなった。中でもリフレ派はインフレ・ターゲティングのような「非伝統的」手段をも積極的に用いるべきだと主張する者が多く、政策論の最先端を行っているような感がある。

(主な論調)

この派を代表する者として日本でも人気の高いクルーグマンは、次のように述べている。

日本がデフレ対策でこれほど苦しんでいる理由は財政拡張策が日本を救うという1940年代のイメージに囚われているからだと思っている。現実はそのではなく、財政政策は経済が恐慌に陥ることを防いだけで、自律的で持続的な経済成長はもたらさなかったのである。(中略)

日本銀行は外貨や長期国債を買い入れ、インフレターゲットと為替相場のターゲットを設定し、物価水準に関する協定を結ぶべきである。(中略)

ケインズ政策は、問題のある短期間を乗り切るのには有効に機能する。しかし、長期的な解

決策としては有効ではないのである。事実、日本の公共事業支出は、日本経済の長期的な問題を解決するうえで何の役割も果たさなかった。

日本はケインズ政策を忘れたほうがいい。なぜなら、公共事業支出は、どの国でも汚職や利益誘導政治の温床となっているからである。(中略)段階的に公共事業を削減し、別のもの代替する必要がある。その代替的な政策とは、金融政策である。インフレ的な金融政策が、公共事業支出に取って代わるしかないのである。(中略)

(ポール・クルーグマン
『恐慌の罠 なぜ政策を間違えつづけるのか』
中岡望訳、中央公論新社2002年)

日本では中原伸之が政策の概要を次のように簡潔に述べている。

わが国において、是非、早急にインフレーション・ターゲティングを導入すべきであると考えています。政策の目標について具体的な数値目標がなく、一方、オベ等の政策手段についてまったくフリーである状況というのは、民主主義国家においてはあまり望ましい状況であるとは思っていません。(中略)

私はまず量的緩和という新たなフレームワークの緩和策とインフレーション・ターゲティングという人々の期待を変えうる政策を組み合わせることで、景気が回復するような対策を打ち出してみようというアクションを起こすことがこそが日銀にとって必要であると思っています。それでも効果がない時は、国債等のマネーと非代替的な資産を購入していくなど、方法はいろいろあるわけで、何をやっても意味がないと手をこまぬいているべきではないと思っていま

す。

(中原伸之『デフレ下の日本経済と金融政策
- 中原伸之・日銀審議委員講演録』東洋経済
新報社2002年)

岩田規久男の次の説明も大変わかりやすい。

財政支出の拡大で景気が回復したとしても、財政支出を減らせば、たちまち元の木阿弥になってしまう。(中略)財政支出拡大政策はデフレという貧困な土壌の改良には役に立たない。あるいは、財政支出拡大政策では、民間の経済活動によって立つ土台を強化することはできないといってもよい。(中略)

インフレ・ターゲット付き長期国債買い切りオペ増額に対しては、日本銀行のエコノミストをはじめとして、さまざまな反対論が根強く存在する。(中略)

第一の反対論は「資金需要がないから、量的緩和をしても銀行の貸出は増えない」というものである。しかし、差し当たり貸出が増えなくても、資産価格の上昇や円安などの効果を通じて、消費や投資や輸出などの需要が増加し、それにとまって資金需要も増加する。

また、差し当たり、銀行貸出が増えなくても、大企業の証券(資産担保証券を含む)発行が容易になるから、それによる資金調達が増えるであろう。中小企業はそのようにして資金調達した大企業から、企業間信用という信用の供与を受けることができる。(中略)

貸出と資金需要が伸びない主たる理由は、デフレによって、一方で、期待実質金利が90年の金融引締め期と同じ水準まで上昇しているために借入需要が伸びず、他方で、正常債権でも不良債権に転化するリスクが高いため

に、銀行が貸出に慎重にならざるをえないという点にある。資金需要と貸出を増やすには、デフレ期待が完全に払拭され、穏やかなインフレ期待が生ずるまで、貨幣を増やし続けることが基本的な政策である。

(岩田規久男『デフレの経済学』

東洋経済新報社2001年)

財政政策は無効であり金融政策こそが有効である、とする経済学者は今や主流派であり論者は極めて多いが、もうひとり例として原田泰の指摘を引用しておく。

80年代から90年代を通して、86年と98年と2001年を除けば、マネーサプライは実質 GDPの動きに連動している。それに対して、公共投資は、87年と96年と99年を除けば、まったく連動していない。(中略)金融政策が発動され、マネーサプライが増大するときには、ほぼ必ず実質 GDPが増大しているのに、公共投資が増大しても実質 GDPが増大することはそれほど多くはないということである。(中略)

日本経済全体の貯蓄投資バランスを金融政策によって変えることはできない、という反論があるかもしれない。(中略)国内投資が不足であれば、それは公共投資によって補うしかなく、財政政策のなすべき仕事である、という反論である。しかし、貯蓄が過大で投資が過小であれば、海外に投資をすることになる。(中略)そのときに、日本にも海外にも失業のない状況であれば、それでなにも困らない。(中略)無理やり国内の貯蓄と投資をバランスさせる必要はなく、過度の金融引き締めが、本来あるべき貯蓄投資バランスを過度に黒字にしていたと考えるべきである。(中略)

80年代前半、実質公的資本形成の伸び率

はマイナスだった。(中略)このトレンドが続いていたとしたら、GDP に占める公的資本形成の比率は、とくに日本以外の先進工業国なみの2~3%に低下してははずである。(中略)80年代前半の着実に堅実な改革からこそ学ぶべきである。(中略)

大胆な金融緩和への転換を行えば、景気はすぐさま回復する。物価の下落期待がとまれば、支出と雇用が拡大するからである。

(原田泰『「大停滞」脱却の経済学』

PHP 研究所2004年)

以上のような主張に対する反論としては、インフレ目標を設定してもインフレにはならない、インフレ目標政策はひとたびインフレになると制御ができなくなりハイパーインフレをもたらす、資金需要がないところでいくら金融緩和しても効果がない、等がある。最初の反論に対しては、「宣言したことを実現するための手段を事前に縛ってはならない」(岩田規久男『まずデフレをとめよ』日本経済新聞社2003年)、「だからだめなんだとあきらめるよりも、副作用が財政政策ほどない金融政策を満開にして、走ってみる」(浜田宏一『ESP』2003年1月号)等の反論が、ふたつ目の反論に対しては「リスクは常にある。肝心なのは(リスクと成果との)バランスだ」(グレン・ハバード『日本経済研究センター会報』2004年2月号)等の反論がある。最後の反論に関しては後の項で見ることとする。

リフレ派の主張に対しては小宮龍太郎が厳しい批判を行なっている。

日銀あるいは政府、あるいはその両者が、ゼロ%よりも上のインフレ・ターゲットを設定すべきだと主張する人が多い。現状ではそれは

要するに日銀に対する“嫌がらせ”のようなものである、と私にはみえる。それは、現状で政府あるいは首相に、1%、あるいは2%以上の「経済成長率ターゲット」を設けよ、という主張と同じようなものである。いずれもできそうにないからである。ターゲットを設けても守らなくても構わないのであれば何のこともないが、インフレ・ターゲット論者は、ターゲットを設けて「達成できなかったときには責任をとれ」と身構えてターゲット論を主張しているわけである。

金融政策に携わる人々は、インフレ率をゼロ以上にしたいと思い、政府の経済政策に携わる責任者達は成長率を少なくともプラスに、できれば2%か3%にしたいと思っているに違いない。しかしそのための方法がないのが現状である。そういう現状でゼロ%以上のインフレ・ターゲットを設定せよというのは、要するに金融政策を担当する日銀に対する“嫌がらせ”に過ぎない。インフレ・ターゲットをゼロ%以上にせよといっている人が提案している金融政策の具体案も、説得力のあるものではない。

(小宮隆太郎・日本経済研究センター編『金融政策論議の争点 - 日銀批判とその反論 - 』日本経済新聞社2002年)

また、伊東光晴は、ピグー、ロバートソン、ケインズなどケンブリッジエコノミストの主張する貨幣政策の非対称性やフィッシャーの主張が実際には無効だったことを指摘し、過去の議論を正確に理解するべきと主張している(伊東光晴「平成不況の中で新しい業績が生まれぬ現実を憂う」『エコノミスト』2004年5月11日号)。

財政の行き詰まりが金融政策の効果をも減殺しているという見方もある。

90年代以降の金融緩和政策は、デフレ脱却に大きな効果を発揮したように見えない。その原因の一つは貨幣流通速度が下がり、マネタリーベースの増加が経済活動を刺激する効果が下がったためだと考えられる。(中略)

流通速度低下の原因は、今のところ不明であるが、「財政悪化が貨幣流通速度低下を招いた」という可能性が存在する。

資産選択を考慮した貨幣流通速度モデルでは、増税不安が高まると、国民は「将来、実物資産や株などの収益に課税される」と予想し、そのため課税されることのない現金を保有したいという需要が高まり、貨幣の流通速度が下がる、というメカニズムが示されている。(中略)

日本では90年代以降、公的債務が増大しており、将来の増税不安も拡大してきた。それが現在の貨幣流通速度の低下を招いたのかもしれない。(中略)現状では、財政が限界だからこそ金融政策も限界だ、といえるのかもしれない。

(小林慶一郎「金融政策の効果がないのは巨大財政赤字が原因の公算」週刊ダイヤモンド 2004年5月22日号)

< > 金融・産業再生派

(主な論調)

この派の主張を一言で言えば、不良債権の存在がマネーの流れを阻害して金融・産業再生を妨げているので不良債権の処理を最優先で行なうべきだというものである。小林慶一郎、加藤創太の以下の主張は、経済論争の問題点をも含めて大変わかりやすい。

政策論争の領域は、「需要サイド論 対 供給サイド論」、あるいは「ケインズ政策論 対

構造改革論」、あるいは「景気対策優先論 対 財政再建論」、といった二元的対立軸によって占められ続けた。(中略)この二元論的論争を振り返って奇異に思えるのは、一部の例外を除き、両者とも相手方からの批判に対し真摯に答えてこなかったことである。(中略)両者を対立する立場や独立した立場ではなく、補完しうる立場として捉え直し、両者をつなごうとする試みも、少数の例外を除いては行われなかった。(中略)

そうした中、「不良債権処理」は、典型的なゼロ・サム・ゲーム的状况として捉えられてきた。(中略)「不良債権処理」が静学的(一時的)なゼロ・サム・ゲームと考えられてきた理由は、不良債権問題とマクロ経済(総需要)との関係が、相互に独立と考えられていたからである。(中略)

不良債権処理を静学的なゼロ・サム・ゲームと捉える固定観念がもはや適当でないことは明らかであろう。(中略)不良債権処理が進み、「バランスシートの罨」が解消されれば、日本経済は自己組織化メカニズムを取り戻し、再び高成長トレンドを回復することが可能になる。(中略)そうやって中長期的に拡大したパイを、当初損失を負担した者の間で配分すれば、それらの者たちは損失を取り戻せるかもしれない(中略)。場合によっては、損失以上の利益を得るかもしれない。(中略)日本経済再生のためには、したがって、不良債権処理を従来のように静学的なゼロ・サム・ゲームと捉えるのではなく、それが動学的なプラス・サム・ゲームだと、認識し直すことが肝要になる。それにより、国や銀行や企業や国民にも、不良債権処理に協調して取り組むインセンティブが生まれるはずだからだ。

ケインズ経済学的な総需要管理政策は、

(中略)投資乗数効果に着目した政策だ。しかし、現在の日本経済における根元的な問題は、バランスシートの毀損を通じた総需要の収縮である。したがって、ここでは「投資乗数」に働きかけるよりも、財政資金を金融セクターに投入することで不良債権処理を行い、金融仲介機能を再建させることで「信用乗数」を上昇させる方が、持続的な総需要の拡大につながる可能性が高い。

つまり、不況になればケインズ型の総需要管理政策 - というのがバブル期までの固定観念だった。しかし、この10年間の経験は、その固定観念が必ずしも時代に適合していないことを示した。今後は、不況の原因を見極めた上、金融セクターへの財政資金投入を通じた総需要拡大 - という政策オプションも考慮していかなければならない。

(小林慶一郎・加藤創太『日本経済の罨』
日本経済新聞社2001年)

不良債権処理の重要性は、さらに小林慶一郎が次のように述べている。

金利と物価は、次のような関係式でつながっている。

$$\text{名目金利} = \text{実質金利} + \text{インフレ率}$$

この式(フィッシャー方程式と呼ばれる)は、短期的にも長期的にも常に成り立つ恒等式だ。

短期的には次のようにいえる。企業にとって設備投資の実質的なコストは「実質金利」だ。設備投資を増やすには、実質金利が下がればよい。ここで、短期的には「インフレ率」は一定だから、日銀が「名目金利」を下げれば、実質金利も下がる。だから金融政策で設備投資が刺激されるのだ。

しかし、それは短期の効果だ。長期的には、実質金利は経済全体の資本の実質的な収益性によって決まってしまう、政策で左右することはできない。(中略)長期的な実質金利が経済実勢によって先に決まると考えると、ゼロ金利政策がデフレの原因である、ということになる。(中略)ゼロ金利政策をなぜ続けているのか。筆者の答えは、「不健全な銀行や企業を破綻させないため」である。(中略)したがってデフレ脱却の方策は、銀行や企業の処理を早く終わらせて、その後、早期にゼロ金利政策を解除することなのである。

(小林慶一郎

「ゼロ金利政策こそがデフレ継続の元凶だ」
週刊ダイヤモンド2004年2月21日号)

また、不良債権の早期処理が重要であるのは、その存在が健全な資金循環経路を塞いでしまい、景気対策として支出した財政資金ですら波及効果を持たなくなる、と考えられるからである。この点を滝田洋一は次のように表現している。

公共事業の請負代金として財政資金を支払ったとしても、建設業者はその資金を借金や含み損を抱えた土地の消却に充てている。ケインズ経済学によれば財政支出は民間の投資を誘発し、経済全体に乗数効果をもたらすはずだった。だが、過剰債務を抱えた建設業は、受け取った財政資金を過剰債務処理のための「強制貯蓄」に割り当てざるを得ない。新規の需要は誘発されず、マネーは火消しつぼの中へと吸い込まれていってしまうのである。(中略)突き詰めたとこ、企業は付加価値を生み出すことを目的とする経済主体なのであり、付加価値を生めない産業に一時的なカンフル剤

を打っても効果は持続しない。(中略)

清算の圧力にさらされているのは、過剰債務と過剰雇用を抱えた企業群であり、制度疲労の著しい政治手法なのである。その意味では、不良債権処理とは、金融再生と産業再生、さらには政治再生を一体にした日本の立て直しにほかならない。

(滝田洋一『日本経済不作為の罪』)

日本経済新聞社2002年)

「日本の建て直しにほかならない」という主張は後述するビジョン派や日本改造派の主張につながるものである。なお、不良債権処理を最優先するという考え方に対しては景気をむしろ悪化させるだけであるとの強い批判もあるが、このような意見の相違は後述するビジョンや構造改革の重要性に対する認識の相違によって生じてくるものであろう。

< > ビジョン派

(主な論調)

ビジョン派はおおむね主流派経済学に対して否定的である。例えば金子勝は次のように述べている。

主流派経済学の市場モデルは、あらゆる物事を瞬時に合理的に判断できる人間が前提とされている。しかし残念ながら、人間は、一度も経験したことがない物事を合理的に判断して選ぶことなど簡単にはできない。その理論的な枠組みは、最初からこのような中長期的なファクターを排除するようにできている。(中略)そもそも、こんなに長期にわたるデフレ不況が起きることなど、主流経済学には説明できないのだ。(金子勝『長期停滞』ちくま新書2002年)

具体的には、経済の実態を次のように説明している。

現実の経済はバブルとバブル崩壊を繰り返す経済になっている(中略)。マネーが一人歩きする経済の下では、資産価格がフローの実体経済を動かす度合いは飛躍的に高まる。(中略)

問題は、バブル経済をつないでゆく金融政策が持続可能かどうか疑わしいという点である。(中略)迅速な不良債権処理と金融緩和政策の組み合わせは、急激なパニックを防止することはできても、その代価として金融市場のボラティリティ(浮動性)を著しく高めて経済を不安定に陥れてしまうのだ。(中略)どこかにリスクが累積して、絶えずそこからシステム不安を引き起こす危険性をもたらすのだ。(中略)

ここで問題なのは、銀行が債務超過であることをごまかして、貸倒引当金を積まないまま当該企業がつぎつぎと倒産していることなのである。(中略)

財政金融政策を動員してマクロ環境を変えるだけで、多額の債務を抱えた問題企業を立ち直らせるには、気が遠くなるような時間がかかる。これまでそうだったように、多くの問題企業が回復する前に財政も金融も破綻してしまうだろう。(中略)

人々は、むしろ雇用や年金などに関する将来不安から消費を抑えて貯蓄に励んでいる。(中略)比喩的に表現すれば、日本経済はマネーやニーズが流れる血管が目詰まりを引き起こしており、それを通さなければ、いかなる政策も効かない状況にある。(中略)その点を無視して、マクロ経済学のテキストにある処方箋をいくら実行に移そうとしても、失敗が繰り返されてゆくだけだろう。その結果、政策手段を

異常な形でエスカレートさせてゆくしかなくなってしまうのだ。

(金子勝『経済大転換』ちくま新書2003年)

あるいは、それ以前に神野直彦とともに次のような批判もしている。

なぜ景気政策が効かないのか。(中略)それは、バブル破綻処理の失敗によって、銀行とゼネコン・不動産業が腐食循環に陥っている点に求められる。最近になって、「バランスシート不況」なる用語が作られ、巨額の財政出動を求める主張が現われた。(中略)こうした主張は、政治的既得権益に対して本質的に切り込むことを回避させる。銀行とゼネコン・不動産業の腐食循環が「バランスシート不況」という一般的表現に置き換えられ、現状の景気対策が銀行やゼネコン救済に終わってしまう事実を曖昧にしてしまうからである。(中略)

実際、政府の景気政策は完全に失敗している。1997年度末から2000年度末までに国債残高は106兆円増える見通しだが、マイナス成長を脱するのが精一杯である。(中略)ゼネコン・不動産業が多額の借入金負担を抱え、それが銀行の不良債権として眠っているからだ。それゆえ、巨額の公共事業費を投じて、ザルに水を注ぐのと同じ「効果」しか持ちえない。

(神野直彦・金子勝『財政崩壊を食い止める』岩波書店2000年)

経済政策が効かない根本原因は、経済の本質から目をそらしているからだという認識であるが、このような認識をふまえて金子勝は次のような対策を描く。

一つの時代が終わり、別の時代がすでに始

まっている。(中略)いま地域経済は崩壊の危険にさらされている。(中略)一見すると、長らくデフレ不況が原因であるかのように見える。(中略)しかし、そこで思考を止めてしまうと、いま日本の都市で何が起きているのか、問題の本質がまったく見えなくなる。(中略)1990年代以降に起きた都心部における零細店舗の減少は、都心部の空洞化を引き起こす段階にまで達しており、それは生活を成り立たせる都市空間、あるいは地域経済の存在そのものを脅かすところまで来ているのだ。(中略)

いま日本で進行しているインナーシティ問題は、欧米諸国のそれと異なった性格を持っている。最も大きな違いは、つぎの二点にある。一つは、問題の中心は移民労働者の集住問題ではなく急速な高齢化の進行であり、いま一つは、地権の細分化と入り組んだ所有権の構造にある。(中略)

問題は、起きている現象の本質が理解されておらず、喫緊の政策課題として認識されていないことにある。(中略)デフレは、資産デフレ 消費デフレ 輸入デフレと継起的に生じてきたが、デフレの最終局面は地域デフレになってゆく。このデフレは日本だけでなく、しだいに世界的同時デフレの様相を帯びてきている。輸出が増えないまま地域デフレを放置すると、国内市場も狭小化してゆきデフレ不況は一層深刻化してゆくのだ。町や村の崩壊は、一層加速することになるだろう。(中略)

地方分権化によって地域経済の自律的循環を取り戻す必要に迫られているのだ。(中略)

地域で環境福祉融合型まちづくり(神野直彦・金子勝『財政崩壊を食い止める』参照)を行う小さな公共事業を掘り起こし、介護・医療体制の充実を図ってゆくのだ。(中略)こうした

小さな公共事業は、地元の中小企業でも十分にできるので必ずしも大手ゼネコンに頼らなくてよい。こうしたまちづくりに、現在起きているコミュニティビジネスの動きなどをからませてゆくのだ。さらに、移譲された税源をもとに、環境や福祉などを中心にして経済の底割れを防ぐ施設も必要だ。これらは非貿易財であり、産業の空洞化にさらされないがゆえに、地域経済の底を厚くする。そして高齢化が進む地域において、雇用を作り出しながら、安心して暮らせるまちづくりの基礎になるのだ。

問題は、汚職や腐敗を防ぎつつ、いかに住民自身の参加を保証してゆくかにある。それには情報公開、会計制度と監査制度の改革、そして事業計画段階からの住民参加の保証など、地域行財政の運営も大胆に変革してゆかなければならない。要するに、国の形を変えなければならぬのだ。(中略)

われわれは、何よりも普通の人々が普通に生きてゆける定常状態を取り戻すことから始めなければならない。もはや過去の残像にしがみついて、一気に高成長を再現しようなどと考えるてはならないのだ。(中略)私たちは、自分たちの狭い利害を超えて、この国の未来を担う世代のために、どのような社会を残してやれるのか。真剣に考えなければならない土壇場にさしかかっていると行ってよいだろう。

(金子勝『経済大転換』ちくま新書2003年)

「過去の残像」を捨て「未来を担う世代のため」の「社会」を考えるということは、とりもなおさず都市風景を考えるということでもあり、その都市風景は「住民自身の参加」によって形成されるものである。またそれは「何よりも普通の人々が普通に生きてゆける定常状態」を実現するためのものであり、それが経

済面においても「地域経済の自律的循環を取り戻す」効果を持つ。具体的には、「コミュニティビジネスの動きなど」をからませながら「環境福祉融合型まちづくり」を進めていく。これはつまるところ、「国の形を変えなければならぬ」ということである。このような主張は、先に引用した伊藤滋の提言と極めて親和的であり、経済政策の面からも21世紀的都市をつくることが喫緊の課題になっているということである。神野直彦の次の提言も同様に理解できるであろう。

グローバル化によって国民国家が動揺すればするほど、人々はアイデンティティを求めて、地域社会への帰属意識を強めようとする(中略)。

良好な自然環境とともに、人間的接触を可能にする公共空間が提供されなければ、地域文化を沸き立たせることはできない。市場主義を拒否した地域再生とは、市民の共同の経済である財政による地域再生であることを意味する。地域再生とは「公」を再生し、大地の上に人間の生活を築く戦略だということができる。(中略)日本では明らかに、社会の共同事業として非市場経済が供給しなければならない財・サービスが不足している。それだからこそ、「ゆとりと豊かさ」も実感できないのである。(中略)

新しい人間の欲求が生じているからこそ、既存の重化学工業の産業構造が行き詰まり、新しい産業の創出が要請され、産業構造の転換が要求されている。その新しい産業の創出のためには、人間の生活に密着した新しい欲求を把握する必要がある。(中略)

国民国家の黄昏を克服するためには、二つのシナリオがある。一つは帝国という公共空間

を形成するシナリオである。もう一つは地域社会の緩やかな連合として世界秩序が補完的に形成されていくというシナリオである。(中略)

アメリカン・ライフスタイルを世界に普遍化すれば、地球は明らかに「死せる惑星」と化す。五十億にも上る地球上の人類が、自然破壊的なアメリカン・ライフスタイルを謳歌すれば、地球の自然環境が破壊されてしまうことは目に見えている。(中略)仮にアメリカン・ライフスタイルで統一された帝国が成立したとしても、欲望にまかせ快樂を貪るのは、一部の階層に限定されるはずである。

(神野直彦『地域再生の経済学』

中公新書2002年)

現在の日本経済の閉塞感に関する神野の基本認識は「日本では明らかに、社会の共同事業として非市場経済が供給しなければならぬ財・サービスが不足している。それだからこそ、「ゆとりと豊かさ」も実感できない」というものであるが、その対策として「新しい産業の創出」が必要であり、そのためには「人間の生活に密着した新しい欲求を把握する必要がある」。「地域再生とは「公」を再生し、大地の上に人間の生活を築く戦略」であることを認識し、具体的な施策として、「良好な自然環境とともに、人間的接触を可能にする公共空間」を形成すること、「地域文化を沸き立たせる」こと、「市場主義を拒否した地域再生」を実現すること、を説く。その結果、これからの社会は「地域社会の緩やかな連合として世界秩序が補完的に形成されていく」ものとなる。

佐伯啓思の次の提言も同様に極めて興味深い。

金銭で評価された市場的効率という一元化された価値のもとにあらゆる決定を委ねるのではなく、まずは安定した文化的生活を可能とする環境、コミュニティを創出するためのインフラストラクチャーの整備こそが火急の課題だと思われる。(中略)

現代の経済は、大方の経済学者が想定するように、ただ市場という「メカニズム」によってだけ動いているものではない。経済の「状態」を表現する言説、その「状況」を示す指標や情報、そしてそれらの言説や情報が生み出す社会的「気分(情愔性)」がきわめて重要な役割を果たす。(中略)今日、この悲観的な「気分」を生み出しているものは、煎じ詰めるどころ、「日本」という国の先行きに対する不透明感、あるいは不信感だ。(中略)

守りまた作り出すべき文化、育てるべき風景、都市と田園への想像力、豊かな人間関係や日常生活、こうした広い意味での「国民の文化」への愛着と責任感だけが、結局、このグローバルな時代に耐久力のある豊かな社会を作り上げることを可能とするだろう。つまり、国家やコミュニティへの責任の意識、言い換えれば「公」の意識こそが、このグローバルイズムの時代に強く求められているということである。その意味で、いまほど、われわれの「国」あるいは「コミュニティ」へ向けられた公共的意識が問われている時代はない。

(佐伯啓思『成長経済の終焉』

ダイヤモンド社2003年)

< > 倫理回復派

(主な論調)

倫理回復派は、経済活動の主体である人間のあり方を問題にする。主流派経済学はいわば人間をブラックボックスにして経済政

策のあり方を考えてきたと言ってよいと思われるが、倫理回復派はその前提を問題にするわけである。

新保生二は、日本を正論が通用しない社会であるとして次のように述べている。

日本経済を均衡回復力の弱い経済にしている一つの要因は、「やり直しがきかない」社会だという特徴です。(中略)もう一つの特徴は、長期継続的な取引を重視するという点です。(中略)第三の要素は、あらゆる大組織の決定に不透明さがついて回り、不良債権や金融政策の転換など重要なことがなかなか明らかにならないという点です。(中略)もともと日本の社会はルールを重視することよりも仲間内への配慮が優先されるという特徴を持っているようです。(中略)

第四の要因は、政策論議が不足しているという点です。(中略)なぜ、論争が少ないのかといえば、論争をすることが得にならないからです。日本では、相手の意見を批判することが、しばしばその人の人格を否定することのように受け取られて人間関係をまずくさせるという結果に終わりがちです。(中略)

第五の要因は、「正しい意見」よりも「わかりやすい意見」のほうが重視される傾向があることです。(中略)正論が通用しないコンセンサス社会が堅固に形成されていくのです。(中略)コンセンサスを作り上げても、それが正しい知識に基づいたものでない限り、何の意味も持ちません。(中略)

今後重要な人材は、コンセンサスづくりが上手な、裏で根回しに専念する「調整型のリーダー」ではありません。(中略)本当に必要な人材は、「正論を堂々と述べ、多くの人を説得できる能力を持ったリーダー」です。

(新保生二『新しい日本経済講義』)

日本経済新聞社2004年)

「あらゆる大組織の決定に不透明さがついて回ること」、「政策論議が不足していること」、「正しい意見」よりも「わかりやすい意見」のほうが重視される傾向があること」に共通する社会的背景は、「日本の社会はルールを重視することよりも仲間内への配慮が優先されるという特徴を持っている」ということであろう。これは、一言で言えば公共心の欠如ということであり、身内でうまくやってしまうというムラ意識が強いということであろうが、昨今の様々な事件を眺めてみればこの点を否定することはなかなか難しいように思われる。「調整型のリーダー」ではなく「正論を堂々と述べ」るリーダーの出現は、国民の多くが待望するところでもあろう。

森嶋通夫は、『なぜ日本は成功したか』(1984年)、『なぜ日本は没落するか』(1999年)で倫理の問題を取り上げてきたが、『なぜ日本は行き詰まったか』(2004年)においても市場経済を運営する倫理のある人材の欠如を指摘している。

戦後に教育された人たちは個人主義や自由主義を信じているが、彼らは満足するに足る教育を受けていない。彼らは勇気に欠け、縁故贖罪を受け入れ、相手方のおどしに容易に屈服する。彼らは競争の結果を受け入れるのに、勇敢でもなく冷静でもない。戦後の新世代のこのような特性は、国家資本主義を崩壊させるのに貢献したが、競争的資本主義の基盤を提供しないであろう。

西欧資本主義(下からの資本主義)の発生に不可欠な要素であった人々の倫理的な強さ

を今日の日本人に見ることはできない。(中略)日本は勇気、公明正大さや正直のような資質をそなえている有能なやる気のある人物に乏しい。(中略)もちろんこれは教育の問題である。(中略)公正な競争に基づく経済を築くために、贈収賄、共謀、脅迫などを除去するように日本経済を根本的に改革することは、日本人にとって - そうしたいという強い願望をすでに失っている日本人にとって - きわめて困難である。(中略)新古典的競争経済を運営する彼等の能力は今やきわめて貧困である。子供たちに個人主義と自由主義の本質と真の意味を教えるような、意味ある教育の改革が必要である。

しかしながら、この方法によって資格のある人々を得るには、大体40年か50年のオーダーの長い時間がかかる。これが達成される前に、日本は元禄時代以後にあったような非常に長い不況を経験するであろう。日本はそれに耐えねばならない。(中略)

東アジア共同体の加盟国は身体的にも文化的にも似ているので、共同体関係の仕事にたずさわる日本人はその歴史的親密感のある雰囲気の中でより自由に働かろうということを付け加えておかねばならない。彼らはその環境に十分適応するであろう。それゆえ、すでに述べたように、日本人は共同体の同僚たちとともにビジネスをすることによって、必要な労働倫理を身につけるであろう。もし日本人がこのような事態に甘んじることができたなら、生活水準は相当に高いが国際的には重要でない国であることはそれほど不幸なことではないであろう。これが21世紀半ばの日本についての私のイメージである。

(森嶋道夫『なぜ日本は行き詰ったか』

岩波書店2004年)

森嶋が指摘するさまざまな問題も、原因を一言で言えば、社会よりも身内の利益を重視するムラ意識、公共心の欠如ということになる。森嶋はその点を次のように述べている。

ヴィルフレッド・パレートの社会学に目を向けよう。彼のレジデュオ(人間の基本要素)の理論によれば、6つの基本要素がある。(1)新しい組み合わせを見つけだそうとする意欲、(2)個人より全体を優先させようとする性向、(中略)日本人の場合には要素(1)は個人的利益に結びついており、そして国全体の人々の利益に関心を示す人たちはいない。確かに日本にも自分の国やより広いコミュニティのことを考えている人たちはいるが、これらの人々は要素(1)を豊富に持っている人ではない。日本の場合、国全体のための新機軸(中略)を考え、主張する人はいないようである。(同)

これが「大人」と若者との間のコミュニケーション・ギャップを引き起こしていることを森嶋は次のように指摘しており、この点は都市社会の本質的問題でもある。

日本人の大人の精神状態、社会慣習および権力構造は戦前や戦中にあったものとほとんど変わっていない。教育部門からきた新入社員は仮採用期間中に再教育、再訓練されたので、彼らは日本人のマナーで行動した。彼らのマナーや人間関係が職場に不向きだとわかった人はその職を失わねばならなかった。この種の再訓練策は1980年代前半まではうまく機能していたが、80年代半ばには、新入社員の多くは社会の「新人類」として扱われた。

(同)

森嶋の議論に関しては、森嶋の過去の著作について小宮隆太郎が批判的書評を書いており、その主な批判点はここでの関心事項ではないが、以下の諸点は倫理を考える上で極めて重要な事柄であると考えられる。

戦前から、日本の各地にキリスト教系や仏教系の多くの小中学校があり、さらにいくつかの専門学校・大学もあり、多数の人々が学んだ。"官"立の学校でも、後に北大になった札幌農学校(当初から官立)の初代教頭で熱心なクリスチャンのウィリアム・クラークは「少年よ大志を抱け」という言葉で広く知られ、その教え子からは内村鑑三・新渡戸稲造はじめ優れた人材が輩出した。(中略)いま『世界』に連載中の隅谷三喜男氏の自伝によれば隅谷氏が在学していた当時の一高は新渡戸が校長であり、校内には内村鑑三の影響が大きかったという(1999年1月号)。私が戦時中から戦後にかけて在学した東京高校でも、大正デモクラシーの流れを汲むリベラルな気風が伝わっていた。戦前から日本の教育には様々な宗教・思想の影響が広汎に及んでいたことは周知のことであろう。(中略)

一つの社会が健全に発展してゆくのに、エリート教育、エリート主義は必要ではない、と私は考える。北欧諸国や米国・カナダ・豪州などはエリート主義、エリート教育に頼ることなく繁栄している。米国には英国のパブリック・スクールに類似した上流階級の独特の学校があるが、米国の高い学術研究を支えるトップクラスの学者や歴代大統領の圧倒的多数は、そのような学校出身者ではない。教育の裾野が広がれば、優秀な人物・指導者はどこからともなく湧き

出て来るものである。

(小宮隆太郎「森嶋通夫著『なぜ日本は没落するか』の批判的書評1(『論争 東洋経済』1999年11月号)」

倫理の回復というのは社会の問題でもあるが個人の自発性が必須のものであるから、宗教、思想あるいは慣習などが外部から強制されてはならないとする意見も識者からは出てくるのであろう。また、その背景として、発言や行動の自由を制約するような社会であってはならないとする意見も出てくる訳である。

一方、「エリート」論に関しては様々な意見があるものと思われるが、名誉欲や出世欲を満たすことを人生の当然の目標とする「エリート」は確かに不要であろう。少なくとも都市づくり、街づくりの分野では不必要である。

< > 何もしない派

(主な論調)

何もしない派の主張は、例えば次のようなことである。

山中で日暮れて道に迷ったらその場でじっと夜明けを待つのが正解であるように、「何かをしない勇氣」もときには必要なのである。政策当局者にその勇氣がなかったばかりに、(中略)日本経済は袋小路に追い込まれてしまったのだ。

(小菅伸彦『日本はデフレではない』

ダイヤモンド社2003年)

何もしないという主張の前提には、デフレを悪い現象とは見ない次の視点がある。

現在の消費者物価の連続的下落はたしかに過去に例のないことだが、これは異常なことでも何でもなし。高止まりした消費者物価を引き下げることこそ内外価格差問題解決の課題だったはずで、そのためにとられたさまざまな構造改革政策の成果がようやく出てきているのが現在の状況だ。(中略)内外価格差縮小をもたらした卸売物価と消費者物価の乖離の解消は、企業の賃金調整を容易にするという点で景気面でも日本経済に好影響を与えている。(中略)下方硬直的な商品・サービスの価格がようやく下落するようになってきたことが消費者物価総合指数を引き下げているのであり、それはこれまでさまざまな問題を生んできた低生産性部門と高生産性部門の並存という日本経済の構造が大きく変わりはじめていることの結果なのである。(中略)デフレを阻止することは構造改革を止めることとほとんど同じなのである。(同)

デフレの意義に関しては、土志田征一も次のように述べている。

日本の景気回復は「輸出による収益増 投資増」と「デフレによる物価下落 貯蓄率低下 消費の維持」により実現されている。(中略)デフレによる物価下落が消費を刺激するということである。今年度もデフレ傾向が変わらず続くと、民間、政府ともに予測されていながら、景気の回復がなぜ続くのか。ここの本質をもっと考えるべきである。需給バランスの悪化で価格が下がる場合は景気回復にはマイナスであるが、供給面の効率化によるデフレは景気回復を刺激する。
(土志田征一「グローバル化・IT化で日本経済の成長持続を」日本経済研究センター会報

2004年3月号)

さて、何もしない派とは言うものの、本当に何もしない訳ではない。

マクロで打つ手がないならミクロの経済政策しか残されていない。ミクロの政策とは企業の生産意欲、投資意欲を高めたり、労働者の能力を引き出すような供給サイドの条件整備、つまり構造改革である。じっと我慢して構造改革を進め、投資が出てくるのを待つしかない。(中略)それでもマクロで何か打つ手があるはずだとジタバタする人たちが取りつかれたのが「インフレにすればいい」という発想である。(中略)問題の根源はゼロ金利でも投資が十分に出ないような経済体質のほうにある。(中略)物価下落の状況下では実質金利が高止まりするというが、マイナス金利でなければ資金需要が出てこないような状況は、不良債権の重みによって投資リスクが高まっていることから生じている。不良債権の抜本的処理を行ってもなおかつそうなら、そもそも投資機会がないという構造問題であって、金融政策ではどうしようもない。(小菅前掲書)

(3) ビジョンと倫理の時代 各派の主張

以上見てきたように、経済政策として実施すべき内容は各派実にバラバラである。しかし各派に共通する重要な要素もある。それは、市場主義だけではもはや経済はうまくいかないということである。一時的なカンフル剤を打てばあとは市場がうまくやるという状況ではなくなっている。市場の外からの行動が経済にとって決定的に重要な要素になってきているのである。

経済政策の重要な要素としてどの派もビジョンを掲げている。ビジョンとは、言うまでもなく市場で提供されるものではない。市場の外部から与えられるものであって市場の動きをコントロールするものである。要するに各派とも市場主義経済の限界を意識している。そして、ビジョンを突き詰めていけば倫理に行き当たる。倫理のない人間がいくら「ビジョン」を作ったところでそれは時間的にも空間的にも他の自由を尊重したしたものにはならず、そのようなものは本当のビジョンではない。以下、各派の主張を見てみよう。

< > 財政拡張派

今日では財政拡張派の多くは「まったく意味のない公共事業でも効果がある」とは考えていないようであり何らかの選別が必要と考えているようであるが、その選別のためには八田達夫が指摘するようにビジョンが必要である。

結局のところ、役に立つ財政支出を選ぶためには、日本経済に関する長期的なビジョンが必要です。(岩田規久男・八田達夫前掲書)

そして、その前提として八田は「すべての公共投資に費用便益分析を義務づけ」、更にその前提として費用便益制度を改善して「癒着構造」を排除することが必要であるとしている。要するにビジョンを策定するためには狭い利害を排除して倫理を確立することが必要ということである。

「まったく意味のない公共事業であっても、非常に大規模に行えば効果がある」とする小野善康も他の箇所では次のように述べている。

何もしないよりも道路を作ったほうがよいということによって道路を作れば、道路関係の事業が増えて、多くの若年失業者が道路関係の仕事をするようになる。(中略)道路工事関係のノウハウだけが蓄積されるというのは、わが国の将来の発展にとって望ましいとはいえない。(中略)将来どのような産業に労働資源を配分していくのがよいかという、長期的な視点を持つべきである。(中略)公共事業は、公共事業関係の各省庁でどのように配分するかではなく、省庁を越えてどの事業が望ましいかを正確に判断し、優先順位の高いものから実施することが重要である。(小野善康前掲書)

< > リフレ派

資金需要がないところでいくら金融緩和しても効果がない、というリフレ派に対する批判があることを先に述べたが、これは要するに「紐は引くことはできても押すことはできない」という批判である。現実の経済指標を見る限りこれは極めて妥当な主張であるように見える。日銀がマネタリーベースを2桁で大幅に増加させてもマネーサプライは1桁のわずかな増加しか示さなかったという時期が長く続いた。

このような反論に対しては、そもそもインフレ・ターゲティングの趣旨をよく理解していないという反論がある。例えばクルーグマンは以前から次のように述べている。

教科書的な答え方をすれば、国民に「将来、インフレが起きる」と確信させることが出来れば、「流動性の罨」から抜け出すことができるのである。これが「流動性の罨」から抜け出すための第一の回答である。(中略)そのためには「ど

うやって現状から抜け出して、どのような経済にするのか」という問題に答えなければならない。そうでないと、国民は将来に対して確信を持ってないだろう。(中略)だが、その問題は理論的にはうまく説明できていない。なぜなら、これは人々の予想を変えさせる問題だからだ。(中略)

日本銀行はゼロ金利政策を取ると同時に、買いオペレーション(公開市場操作)によって市場から国債を買い入れて、代わりに現金を供給している。だが、それでは何かをやったことにはならないのである。なぜなら、人々は既に過剰な現金を持っているからだ。だから、さらに追加的に通貨を供給しても、政策的には無意味である。(クルーグマン前掲書)

要するに現在の金融市場でいくら通貨を供給しても国民が将来についてしっかりとしたビジョンを持たなければ効果はないということである。そして、これはひとえに人々の予想の問題なので解が経済学で理論的、一義的に決まるものではない。

国民が信頼できるビジョンを持つためにはその背景に構造改革の方向の明示とその着実な実行とがなければならないが、リフレ派はこの点も重視している。

リフレ政策を支持するリフレ派は、長期的に見て、潜在成長率そのものを引き上げる構造改革を極めて重要であると考えている。(中略)規制改革や特殊法人改革などによる民間活力の活性化や、地方経済の自立化を促すための地方税・財政改革も必要である。(中略)リフレ派は、リフレ政策と構造改革とは相互に補完し合う政策であって、代替的な政策ではなく、リフレ政策だけを採用すればよいと考

えているわけではない。

(岩田規久男

「インフレ目標政策とリフレ派の構造改革」

週刊東洋経済2004年1月17日号)

92年と93年の公的資本形成は、ともに15%近く上昇した。政府が仕事を与えて、所得を守ったのである。しかし、景気刺激効果は小さく、財政赤字は拡大した。国債残高の累増とともに、政府が仕事をつくって所得を守ることが次第に困難になっていった。規制や制度で守られていない人びとは、守られている人びとへの反発を強めるようになる。何を変えたらよいかわからないが、何かを変えなくてはならないという気分が蔓延する。(中略)

構造改革とは、政府の介入を減少させ、人びとの自発的意思がよりよく働くようにすることである。(原田泰前掲書)

構造改革とは人々に何かを与えることではなく「人びとの自発的意思がよりよく働くようにすること」である以上、構造改革はビジョンの提示と人々の倫理の確立とを伴うものでなければならないであろう。この点は街づくりにとって本質的に重要である。

< > 金融・産業再生派

金融・産業再生派もビジョンの重要性を指摘している。例えば、小林・加藤前掲書では「グランド・デザイン」という言葉を用いて次のように述べている。

日本の政策決定現場においては、ある狭い空間内では合理性を持って、全体としては意味をなさない、あるいは、全体としては有害な政策が濫造される、という事態が半ば常態

化してしまった。一方、経済全体のことを考えたグランド・デザインはいっこうに描かれなくなる。(中略)

ここで必要なのは、政策当局者が、無数に存在する「仕切り」に囚われずに、日本経済全体のことを考え、政策を立案するよう誘引づけることである。また、自らの属する「仕切り」内のことだけを考えた「言いつ放し」の政策提案に対しては、その政策が影響を及ぼす他の領域の問題について、政策提案者の立場を問いただしていく必要がある。(中略)

日本の経済政策立案過程、経済・経済政策の分析手法、あるいはより広く、日本の市場・企業などは、数多くの概念的・制度的・組織的な「仕切り」によって区切られている。しかし、その多くは、すでに合理性を失った時代遅れの「仕切り」だ。そうした時代遅れの「仕切り」と現実の経済社会との間に生じたギャップが、必要な経済政策の実現を阻み、日本経済を長期的にわたり低迷させた。(中略)日本経済が低迷を脱出するには、したがって、既成の「仕切り」を打破し、局所解のパッチワークではなく正しいグランド・デザインを描く体制を整えることが肝要となる。そのためには、既成の「仕切り」に囚われない思考枠組や政策体制を再構築しなければならない。

(小林慶一郎・加藤創太前掲書)

「グランド・デザイン」を描くためには「仕切り」を取り払わねばならず、「仕切り」を取り払うためにはそれに囚われない「思考枠組」が必要なのであるが、その「思考枠組」は倫理に裏打ちされたものでなければならないであろう。

< > ビジョン派

ビジョン派はビジョンを重視しているからビジョン派なのでビジョンに関しては改めて説明することはないが、倫理に関しては金子勝が「近代的人間」論を次のように展開している。

さしあたり近代的人間を 個の自己決定権と 共同性 の緊張関係の中にしか生きられない存在と規定する。その意味するところは単純である。まず人々が 個の自己決定権 を行使したと感ずるのは、人々が形成する 共同体 の規範・コードの文脈においてのみ可能になるという意味である。他方、 個の自己決定権 を保障しようとして、三大生産要素(土地・労働・貨幣)の私的所有権を徹底して市場化を推し進めれば、市場化の限界に突き当たって、 共同性 の規範・コード自体が破壊されてしまうという意味でもある。つまり両者は、相互補完的に「結合」していなければならない。(中略)

他者から独立した一個の人格として自己決定権を持ちたいという願望は、他者との関係においてのみ - すなわち共同性とその規範・コードの文脈においてのみ - 自己確認するものである。近代的人間は、労働過程においても、 個の自由な処分権 = 自己決定権 と 共同性 の結合の中にしか生きられないのである。(中略)

個の自己決定権と共同性の関係は、前者があくまで主役で、後者は単に前者を補っているという関係ではない。社会的公共性を満たす規範やコードが存在しないと、個も自己決定権を行使できないという関係性にあるからである。しかし、本源的生産要素の市場化の限界ゆえに、市場自身には、こうした倫理的規範・コードを自生的に作り出す力は備わっていない

い。不確実な将来に対する人間の「合理的」認識能力に限界があるとすれば、社会的公正を満ち、誰もが信認する規範やコードが存在して、はじめて人々は、それを目安にして自己決定の範囲を確認しながら行動を定型化させてゆくのであって、市場メカニズム自身が自動的に均衡を作り出すのではない。市場主義的政策によって、こうした規範やコードを「破壊」してゆくと、収斂すべきルールを見失った人々は、常に他人の「期待」のありかを伺いながら行動せざるをえなくなる。実際には、安定的な規範やコードが欠如すれば、人々は内面的自立も保持しえなくなるからである。皮肉なことに、自由主義の名の下に「全てを自己責任でやれ」と呼びかけられた瞬間に、かえって「効用判断の個人間独立性」は失われ、人々は他人の「効用判断」に依存するようになる。(中略)

生産要素市場における制度やルールが不安定化して信認が崩れだす時、人々は 個の自己決定権 と 共同性 の均衡点を見失い、そのバランスは深刻な動揺に陥る(中略)。そもそも市場は内生的にモラルを作り出す力は存在しない。市場が自動調整的に均衡点をもたらすのではなく、制度やルールの安定性が人々の「自己決定権」を充足させつつ、ある一定の方向に人々の行動を定型化させてゆくのである。そこでは、相互に独立した効用判断の可能性がアブリアリに前提となるのではなく、むしろその限定合理性ゆえに、人々の行動の目安となる社会的公正やモラルを相互に認めあうことが不可欠となる。

(金子勝『市場と制度の政治経済学』

東京大学出版会1997年)

市場メカニズムに基づく都市づくりは何をもたらすのか、敷地単位の経済効率性の追

求は都市全体の経済効率性をもたらすものなのか、深く考察しなければならない。少なくとも都市の経済効率性を物理的なものだけで測る時代は終わっているであろう。

< > 倫理回復派

倫理回復派はビジョンの欠如をも問題視している。

いくらコンセンサスが成立してもそれが正しい状況認識と処方箋に基づいていなければ何の意味もありません。イギリスのサッチャー元首相によれば、「コンセンサスとは、誰も反対しないが誰も信じていないことを求めるために、すべての真実や信念を犠牲にすること」です。(新保前掲書)

日本は成長余力がなくなる寸前まで経済成長を追求した。その結果、最後の段階でさえ、企業は将来での成長に備えて、敷地を買い漁った。こうして土地ブームが起こり、土地バブルが膨らんでいった。バブルがはじけるとともに、このような土地への投資は不良債権という遺産を残した。これはその投資を行った企業、それらの投資に融資した銀行、そして特に土地を担保にして企業に資金を前貸した銀行に問題を課した。こうして成長の追い風は全く停止してしまった。経済の帆船は全く無風の凧のなかに閉じこめられ、もはや動けなくなった。(中略)無風状態にあるときでも、彼らは拱手傍観するしかない。(森嶋前掲書)

倫理の欠如はビジョンの欠如と表裏一体のものであろう。

< > 何もしない派

何もしない派とは言いつつも、実は「やるべきことはたくさんある」(小菅前掲書)。

これほどまでに財政赤字が累積すれば、誰もが増税不安や社会保障システムへの不安に駆られるのは当然である。そういう大雑把な意味で、将来の負担増への不安が現在の消費を抑制させていることは誰の目にも明らかだろう。(中略)この国はいったいどうなってしまうのだろうと多くの人が不安を募らせている。(中略)

財政がやるべきことはたくさんある。失業者の生活基盤の確保や能力開発などをはじめとしたソーシャル・セキュリティネットワークの構築、明確な将来ビジョンに基づいた医療、介護システムや社会保険制度の改革、環境保護など、国民が安心して暮らせる社会づくりのために金を使ってもらいたいものである。(中略)

今、本当に危機に瀕しているのは日本経済よりもこの国の民主主義そのものではないのかと感じられてならない。(中略)国民生活に大きな影響の及ぶ政策転換を主張する以上、日本経済に、現在何がどれだけ起こり、何が起こっていないのか、新しい政策の採用によって何が変わるのかについて具体的・定量的に明らかにしなければならない。

(小菅前掲書)

ビジョンの明確化のために様々なことをやらなければならないということであるが、その考えの根底には「民主主義そのもの」に関する「危機」意識がある。

ビジョンと倫理に関するひとつの風景
経済の閉塞状態を打破するためにビジョ

ンと倫理とが必要になる、ということは実例がないとわかりにくいかもしれない。そこで、ここではひとつの例として酒場の風景を見てみよう。

とは言っても筆者は酒場とは無縁なので、歌詞を参照する。参照するのは加藤登紀子が歌う「時代おくれの酒場」である。そして、それと対照するものとして Mary Hopkin が歌う "Those were the days" である。どちらも名曲と思われるが、タイトルからしてすでにベクトルが逆を向いている。

まず、酒場に対する視点を比較すると、前者は「この街には不似合いな時代おくれのこの酒場」であるが、後者は Once upon a time there was a tavern である。そこにやってくるのは、前者は「ちょっと疲れた男たち」つまり「風の寒さを忍ばせた背広姿の男たち」であるが、後者は we すなわち me and my friend である。

酒場の中の雰囲気は、前者は「酔いが回ればそれぞれに 歌の一つも飛び出して 歌を歌えば血が騒ぐ せつなさに酔いどれて 気が付けば窓の隙間に 朝の気配が忍び込む」状態であるが、後者は laughed away the hours であり sing and dance である。

心の中は前者が「どこかに何かありそうな そんな気がして 俺はこんなところにいつまでもいるんじゃない」という状態で、彼らは「違う明日を待つ男」であり「昨日を捨てた男たち」である。後者は We'd thought they'd never end と身近な幸せを大切にしている。その背景には We'd live the life we chose という自主性と We'd fight and never lose という自分たちがそれを守るという意志とがある。

結局どうなるか。後者は Through the door came familiar laughter / I saw your face and

heard you call my name / Oh my friend we're older but no wiser / For in our hearts the dreams are still the same と幸せな結末である。前者は「俺の女もどこかへ行った」ということになり最後は「ららら～」で、寂しい。要するに前者は人に選択される存在、後者は自分で選択する存在ということになる。

ところで現代の日本人は何を選択しているのか。慶應義塾大学佐藤雅彦研究室の調査では、例えば次のような結果が出ている。

あなたが自分らしさを感じられる日は

平日 33 % 休日 66 %

(2003年11月10日調査)

連休に対してのワクワク度が

前より減った 65 % 前より増えた 34 %

(2002年11月11日調査)

(佐藤雅彦監修『日本のスイッチ』)

毎日新聞社2004年)

短期的視点で経済を語り得ない時代

以上様々な論調を見てくると、足元の経済運営に関してすらもはや短期的な視点だけでは語り得ない時代になっているという印象を強く受ける。短期的な景気刺激策は、財政政策、金融政策ともに、それらだけでは(つまり構造改革あるいはビジョンや倫理を伴わない限り)手詰まり状態にあると考える論者が多くなっている。経済が構造変化を起こしていることから市場経済の内からの自律的發展力はもはや期待できないということであろう(規制さえ撤廃すれば大丈夫という論者もいないわけではない)。

経済の構造変化としては、サービス経済化により経済波及効果が縮小したこと、IT化により物が動かなくなったこと、グローバル化

により閉鎖的な取引慣行が維持できなくなったこと、GDP に対する輸入の割合が上昇したこと、経済成長鈍化により公平性への関心が高まり不透明性に対する批判が高まったこと、物の時代から知恵の時代になり皆が同じ方向を向く集団主義体制が不経済になったこと、スピードの時代になりスケールがメリットからデメリットに転化したこと等様々なことが考えられる。しかしこれらは経済の成熟化に伴う問題であっていずれ調整されていく問題であろう。

これらとは別のところにある構造的により深刻な問題が指摘され始めている。それは貧富の格差の拡大であり、その背景にある雇用機会の縮小であり、さらにその背景にある労働生産性の向上である。一言で言えば労働者を多くは必要としない産業構造になっていくということで、市場経済の外に置かれる人の数が増加していくということである。この点を橋本俊詔は次のように説明している。

いくら株価が高くとも、あるいは企業の業績が好調であっても、国民が生活上で豊かさや満足を感じていないのであれば、経済の求める最終目標を達成していないと判断すべきであろう。(中略)

第一に、(中略)国民の間に貧富の格差が拡大中である。(中略)たとえ景気の回復(すなわち平均所得の増加)があっても、一部の人の生活水準は下降していると見なせる。

第二に、(中略)雇用が増加するという兆候はなかなか見られない。(中略)日本の経済が、ひとときのアメリカ経済のように、ジョブレス・リカバリー(雇用なき回復)を経験する時代に突入していると想像させる。

第三に、たとえ企業が新規雇用を増加させても、その多くはパートタイマー、アルバイト、派遣労働者といった非正規労働者が中心であって、なかなか正規社員を採用しない。非正規労働者の労働条件は賃金その他で劣悪であることは皆の知るところであり、第一の理由で述べた貧困層の増加という理由にもつながっているのである。

第四に、国民の多くは失業不安、年金不安、健康不安、所得減少不安、犯罪不安、食品の安全不安、テロ不安といったように、さまざまな不安を感じる中にある。社会不安もあり、必ずしも経済に関する不安ばかりではない。(中略)

まとめれば、大多数の人にはここで述べた事情により、豊かになる気配はないし、不安がなくなるということがない。むしろ悪化を感じる人の数のほうが多い可能性が高い。(橋木俊詔「経済を語るときの最終目標は家計」週刊ダイヤモンド2004年5月22日号)

酒井隆史は、この点を以下のようにより衝撃的に表現している。

もはや現代都市は生産を基軸とせず、それにともなって統合のベクトルも向きを変えはじめる。新たなシステムを特徴づけるのは、上昇する社会的不平等と二極化への傾向である。つまり社会的スケールのトップとボトムの方の同時上昇。(中略)

社会的必要時間の減少とそれにともなう生産へのフレキシビリティの導入は、安定したフルタイム労働を少数の特権的なものとする傾向をともなっている。ポストフォーディズムにおいては、生産性の上昇はもはや完全雇用とは相関関係のうちにはない。効率性と生産性を

上昇させるために必要なのはむしろ解雇、レイオフ、配置転換、パートタイム化など多様な形態をとる人員の削減をとおした「ダウンサイジング」なのである。(中略)つまり、ネーションの範囲内のほとんど全人口を潜在的な労働者あるいは・かつ消費者として見なしていた時代は決定的に終わったということだ。(中略)

現代の資本主義においては、労働コストをどこまで下げるかが、利潤の要となる源泉であり、グローバル化、情報ネットワーク化によって資本は、地域やそこに居住する生産者の論理をまったく考慮することなく、生産点をフレキシブルに移転する。移転したあと、残された人びとはもはや単なる「無用な人間」となるわけだ。

(酒井隆史『自由論 現代性の系譜学』

青土社2001年)

このような事態が進行すると、遊休資源の有効活用という考え方自体がもはや無効になり、失業率を自然失業率に近づけようとする伝統的経済対策論の基礎が崩れてしまう。そしてそれは同時に都市経済の地すべりの構造変化を引き起こす。酒井前掲書によればジョック・ヤングはこのような社会を「排除社会」と名づけ、それを次の3つの要素で構成されるものと説明している。

中心となる核

安定したキャリア構造と人生を携えた人口のかなり大きな部分。そこでの社会的管理＝統制は、労働や娯楽の双方においてますます軽い、ほとんどディズニーじみた様相を呈するようになり、表面上は親切でやさしい。

防疫線

核となる集団とその外部にある人びととの

あいだの明確な境界線。その手段は、例えば、市街計画、都市を分割する道路網、私的な土地の封鎖、特定の領域へのアクセスを困難にすること、料金政策や価格政策、取締り。

外集団

社会一般の抱えるトラブルのスケープゴート。「アンダークラス」として怠惰と犯罪に生きる人々。寄せつけずかつ排除されるべき存在。

中世ヨーロッパにこのような都市がいくつも存在していたのは周知のとおりであるが、現在の目に見える我々の日常都市と比較すると SF 的な印象が強い。しかしコールハースは既にこのような状況が現実には生じていると指摘している。

私たちはショッピングのプロセスにおける軍事化の増加傾向を見ることもできます。(中略) そのスケールとロジスティックスの複雑性の故に、私たちの都市は、好むと好まざるにかかわらず、ショッピングによって決定される部分が大きくなってきているのです。(中略)

マッピングはもはや地形学に関するものではなく、現在地図が示すのは、収入の水準に則して色分けされた典型的なアメリカ都市です。富裕の山脈と貧困の渓谷です。この種の都市の読解と分析は次第に全世界的な現象になりつつあります。(中略)

このことは私たちの都市には高度にコントロールされた部分とまったく見捨てられた部分とがある、ということの意味するものです。月並みな構図が都市の肝要な部分を描くことはもはやありません。そこには途方もなく制御された領域とその周囲の荒涼とした空白の領域とが

あるのです。

(レム・コールハース「ショッピング/ラゴス/珠江デルタ/ローマ都市」TN プローブ編『都市の変異』NTT 出版2002年)

今後の日本の都市がこのような事態にまで至るのか否か(あるいは既に至っているのか)はともかく、長期的に見れば現実の経済はその方向に向かって進んでいるように見える。例えば、商店街が二極分化しつつある。需要が減少するために空洞化する商店街と需要が維持されるために商店主が店舗賃貸業に転じてチェーン店が進出する商店街とである。これは、見捨てられた地域と均一化された軽い地域とへの二極分化と見ることができる。雇用に関しても職にしがみつく者(中高年者、専門職等)と職が得られない者(若年者、非専門職等)とへの二極分化が進んでいる。山田久は最近の雇用情勢を次のように説明している。

アジア諸国のキャッチアップの進展に伴い、輸入浸透度の上昇に示唆されるように日本の製造基盤の縮小傾向がみられるも、製造部門では、生産性伸び率の鈍化 = 成長率低下を通じて賃金下落圧力となっているほか、安価で良質なアジア製品の流入は、国内財価格を押し下げるとともに賃金デフレの圧力となっている。

一方、サービス部門については、「製造部門の成長率低下 サービス価格下押し・交易条件悪化 サービス部門の利潤縮小」というルートを通じ、賃金への下落圧力を強めているのである。(中略)

「賃金デフレ」の進展により、既に雇われて

いる人々の失業発生を抑制することで社会不

安が緩和されてきたこと自体は評価されてよい。しかし、その背後で長期失業者が着実に増加しているほか、若年就労環境が大きく悪化し、将来世代の職業能力が不足する状況をもたらしている点を見逃せない。企業内では労働時間の偏在が生まれ、日本企業の強みを支えてきた「世代を超えた同胞意識」や「職場における仕事能力の伝承プロセス」という、かつての職場でみられた光景は失われつつある。(中略)賃金デフレが失業問題を緩和し、消費性向の上昇が景気底割れを回避している背後で、かつての日本社会の発展を支えてきた要素は確実に蝕まれつつある。

(山田久『賃金デフレ』ちくま新書2003年)

ちなみに最近(2004年4月)の完全失業率は総数では5.0%(男性5.1%、女性4.9%)であるが、15~24歳では10.8%(男性11.6%、女性9.6%)である。統計で一割を超えるということは潜在的な失業(職を積極的に探していない者、一時的な職に就いているもの、大学で留年している者等)まで含めればかなり深刻な事態である。また男性の60~64歳においても8.1%と高い水準になっている。世帯主との続き柄の別に見ると、一般世帯では世帯主が3.3%、世帯主の配偶者が2.9%であるのに対し、その他の家族が8.5%であり、単身世帯では6.4%となっている。職を得られない者が社会関係を得られない者にもなっていくのである。

雇用の不安定化、流動化を通じた職場の人間関係の崩壊が、社会における人々の規範の喪失をも引き起こしているとの指摘もある。

日本の企業組織は「機能集団」としてばかり

でなく、「共同体」の役割も帯びていた。バブル崩壊後の長期的な経済不振がこの企業組織の根っこを揺るがし始めた今、日本は急速なアノミー(規範喪失)状態に陥ろうとしているように見える。(滝田洋一前掲書)

このところデジタル関連の投資や輸出に支えられて景気は拡大を続けているものの、その持続性に関しては周知のとおりさまざまな議論がある。ピークアウトがこの秋になるのか来年になるのか、あるいはもっと先なのかは不確かであるとしても、長い目で見ればいずれにしても雇用環境の構造改革及びそれとあわせた地域社会、都市社会の構造改革は避けて通れない。雇用改革に関して山田は以下のように提言する。

チームワーク・能力開発を強化する新しい仕組み作りを模索することが求められている。成果主義から年功制に回帰することはもはや不可能であり、所得格差のもとでも万人が働き甲斐を見出せる成果主義のあり方を追求するしかない。(中略)

ただし、賃金デフレにも「効用」ともいべきものがある。正社員・非正規社員の賃金格差拡大に歯止めの兆しがうかがえることや、自己投資やボランティアに積極的に取り組もうとする動きが出てきたことがそれであり、これらは仕事と生活の新たなバランスを創造する可能性を秘めているようにみえる。(中略)

「成果主義」を十分機能させるためには、人事・賃金制度を超えて、経営改革の問題として捉える必要がある。(中略)真の成果主義とは、市場構造の変化を見通した経営者の新しい事業に対するビジョンがまずありきであり、そのビジョンを具体化する仕掛けとして、従業員に対

する成果主義人事とコーポレートガバナンスの確立による「経営陣に対する成果主義」が、いわば車の両輪として同時に実施されなければならないということである。(中略)

あるべき産業・雇用構造の特徴をより具体的に提示すれば以下の四点を指摘することができる。

第一は、海外現地生産も含めた日本企業の連結売上高のグローバルなシェアについて、現在の水準を拡大させることである。(中略)

第二は、付加価値ベースでみた国内産業全体に占める製造業ウェイトが現状水準を維持するということである。(中略)国内を「開発拠点」や「マーケティングの拠点」として位置づける、「製造業におけるサービス革命」が必要であろう。(中略)

第三は、事業向けアウトソーシング・ビジネスおよび個人・公共サービス市場が着実に成長し、最大の雇用の受け皿となることである。日本メーカーが「グローバル企業」ないし「アジア企業」に脱皮し、開発・マーケティング拠点として国内製造業が付加価値額を維持できるようになったとしても、製造業の雇用が減るというトレンドには変化はないであろう。雇用の受け皿となるのは、「企業内業務におけるサービス革命」と「消費におけるサービス革命」を背景に成長が期待される、事業向けアウトソーシング・ビジネスおよび個人・公共サービス分野であろう。

第四は、エネルギー、通信、金融、流通といった「デリバリー産業」部門ではサービスの多様化および低コスト化が進み、国内産業における付加価値ウェイトおよび雇用シェアは横ばいで推移することである。「デリバリー産業」部門の効率化は産業活性化の前提条件であり、それは規制改革・競争政策の展開により達成

されることが必要である。(同)

経済成長のエンジンとなるグローバルな基幹的産業は育成しなければならないが、その雇用吸収力は弱く、また、そのような産業を育成するために従来型サービス業は効率化しなければならないのでその雇用吸収力も弱い。従って、新しいサービス産業として、事業向けアウトソーシング・ビジネスおよび個人・公共サービスを拡充し、その分野で雇用を吸収しなければならない。

この新たな産業の主な分野は、地域社会、都市社会と密接に関わるものであり、必然的にそれらの社会のあり方を見直す中で産業の発展が図られるということになる。

また、基幹的産業とこれらの産業との間には大きな生産性格差が生じるであろうから、所得再分配の仕組みも整えなければならない。

公平性に関して国民的なコンセンサスを得て所得再分配の仕組みを整えつつ、生活分野等身の回りにおける雇用機会の拡大を図ることが経済対策として非常に重要になっている。これは足元の短期的な経済動向ばかり見ていてはできることではなく、高い倫理を持った市民が自分たちの利益の狭い枠を乗り越えて社会全体の観点から雇用維持の方策を考え長期的なビジョンをつくることを必要とするものである。そして、そのような市民の手になる長期的経済社会ビジョンなしには、今後の都市の姿も全く描けない。言い換えれば、今や市民が主体的に経済社会ビジョンと一体のものとして都市の姿をきちんと描かなければ、あるべき経済対策の方向性すら決められない状況になってきているということである。

(4) 都市へ

幻想から現実へ

上記の最後の点を簡単に言えば、経済の入れ物であった都市の時代が終わり、都市をつくること自体が経済になったということである。

かつて人々はピカピカした近代的なビルの向こうに豊かな未来を見た。都市自体は単なる手段であって、希望はその向こうにあるものであった。皆が向いている方向を一緒になって向いているだけで未来が向こうから来るはずだった。しかしそれは幻想であった。気が付けばビルの向こうには何もなく、昔あった風景も消え、人々のうつろな視線が焦点を結ぶことなく宙を漂っている。近代的なビルは今や閉塞感の象徴ともなりつつあるという意見も出てきている。

大雑把に言えば以上のようなことであろうが、これからの経済の鍵になるのが、人々が主体を取り戻せるか、自分の生き方に個人としてこだわりを持てるか、都市を自分たちが生きる場として認識できるか、自分たちの手で都市をつくっていくことができるか、生活空間をつくっていくことができるか、ということである。主体ではなく手段と化した人間ばかりでは雇用過剰は解消しないし、人々が「外集団」に転落していくおそれなしともしない。最近の若い世代が言うような、ある時間家畜や機械のように我慢して働き、残りの時間を架空の世界で楽しく生きる、という生き方も限界に来ている。人々が主体的に経済や都市の現実を直視しない限り未来はないであろう。いまここが生きる場だと人々が思うことができる都市が必要である。

都市の人間が「他人指向型」(リースマン『孤独な群集』)の人間になってしまっている

ならば、自己を主張して人から突出することを最もおそれ、集まっても周りを眺めるばかりの安全な横並び行動しかとらないであろうから、彼らが主体的に街をつくることは難しい。しかし方針なりビジョンなりは自分達で作らないと主体性は回復できず、それらが外から与えられてしまっただけでは何の解決にもならない。

明るいビジョンは外から与えられるという幻想を「孤独な群集」が捨てきれなければ地域社会をつくることは難しい。幻想が完璧に打ち砕かれるまで何もしないほうがよい(セーフティネットを張る以外は)という主張も出てくるわけである。しかし幻想が消えるまでに何が起るかわからないということを考えれば、現実を取り戻す何らかの契機を早期に見出すことがやはり重要であろう。さしあたりコールハースが以下のごとく指摘するような日本の「知識人」の改革が必要である。

知識人について以前から不可解に思っていることがあります。彼らは表明された意見に対し、共通言語をまず作ろうとする。この手続きをやった後、今度はそこに参加しなくなり、だんだん離れていく。「手続き」とはつまり、Aは悪い、Bは良い、Cは中間、Dはまあまあ、Eは言語道断……といった評価のコンセンサスを即座に固める、いわば儀式のようなものです。そんなことをやっているから、この種の討論は先に進まない。結局、人はあなた方の内奥の信念について知りたいんじゃなくて、自分の信念があなた方の信念と一致しているかどうか、確認したいだけなんだと思いますが……。

(TN プローブ編『都市の変異』NTT 出版
2002年)

これは極めて鋭い指摘である。周りの意見を気にするばかりで自分の思考がなければ研究会など開催しても真の議論にも研究にもならないし、フッサールの言う「自分自身で考える人 Selbstdenker」が今都市においても最も必要であると言ったところでそのインセンティブが働かなければ言葉の空費に過ぎない。「ともに哲学する synphilosophesin」などということは到底あり得ず都市社会の形成も難しい。

地域社会の再創造

経済学者は都市社会の形成について具体的にどのようなことを言っているのであろうか。佐伯啓思の文章を引用する。

今日、日本に求められているものは何か。それは、何よりもまず、日本社会が歴史的に保持してきた文化や価値に即した形で、国家の将来像を描くこと以外にない。(中略)

独自のものを歴史の中から見出し、選択し、再提示し、創造する必要がある。伝統とはただそこにあるものではなく、創造するものだからである。そしてそのためには、それなりの国家についての将来像が提示されねばならないであろう。(中略)

拠るべき価値が一体何であるかについてはむろん容易に表現できるものではないし、簡単に合意できるものでもないだろう。しかし、多様で多層化された価値が、自生的に形成されたコミュニティや地域、生活様式、生活の中に組み込まれた文化の中に堆積していることも事実であろう。こうした価値を掘り起こし、高齢化、人口減少、環境保持、そして低成長といったほとんど動かしがたい条件の中で、そこに新たな意味を与えてゆ

くことこそが必要とされている。(中略)

ケインズは、資本の海外逃避を防ぐべく、政府が公共計画を立て、とりわけ都市の美観の整備、田園のアメニティの確保、住宅政策など、要するに、決して貿易可能な国際商品ではない、その国に独自のものを創出することを提唱した。いま、わが国に必要なことは、こうした公共計画である。それを新たな「国づくり」といってもよいだろう。地方政府が公共計画の主体だと考えれば、これは「地域づくり」「街づくり」といってよい。

(佐伯啓思前掲書)

施策のひとつとして「街づくり」を提唱しているわけだが、その理由は「自生的に形成されたコミュニティ」の文化の中に「多様で多層化された価値」が堆積しているからであり、その価値を掘り起こすことが歴史や伝統を踏まえた独自の文化を創造することにつながるからである。これは、遠くの幻想を見るのではなく身の回りの現実を見るということであろう。

ケインズが「都市の美観の整備」を提唱したことが示されているが、そのような事業を通じて独自の文化を創造することは人々が自らの立脚点を再認識することにおおいに寄与するに違いない。また、佐伯は「公共計画」の重要性を指摘しているが、これには都市の中の公空間を充実させていくことも含まれるであろう。

本稿では、これまでのところ、都市が今もっとも必要とするものは人間であり、その人間をつくるのが風景であると考えてきているが、その風景を含むより広い概念としては「公空間としての地域社会」という概念がある。そのような空間がいかに人間形成にとって

重要であるか、安藤忠雄の以下の指摘が大変参考になる。

結局、今の若者たちの生命力を押しつぶしてしまったのは、あまりに<満ち足りすぎた>生活環境だったように思います。(中略)日本人は、それまでよりどころとしてきた価値観の一切を置き去りにして、<豊かさ>を求めて奮闘してきました。その結果が、現在の快樂至上主義の、<モノ>にあふれた生活です。(中略)<豊かさ>の代償が、心の<貧しさ>だったのですから、何とも皮肉な話です。

深刻な経済不況から、社会全体が日本の未来を不安視しています。でも、それ以上に深く病んでいるのは、国にとって最も大切な、人間の育まれる環境ではないでしょうか。

(安藤忠雄「心の<貧しさ>と向き合おう」

朝日新聞2003年2月8日朝刊)

日本の閉そく感を打ち破るには、どのようにしたらよいのか。(中略)日本にはもともと、個性豊かな地域社会があり、それを支える家族があった。家族は地域に対して誇りと責任をもった。しかし、戦後、近代化が進む中、(中略)米国型消費社会へのあこがれも手伝い、人々はいい会社に入り、いい給料をもらい、欲しいものを手にすることを一番に考えた。(中略)戦後日本は多くの会社人間をつくったが責任ある個人を育てることに失敗した。(中略)

成績のいい人が日本を代表する企業に就職している。彼らは失敗をしないようにそつなく振る舞う。(中略)今の日本社会には、新しいことに挑戦する風土もなければ、個人

にもその勇気がない。(中略)失敗をしないように生きてきた人たちが、突然緊張感を高めて、自分の責任で行動し、創造性を発揮するというのは、ほとんど不可能である。創造的なものというのは、不安や緊張の中で死に物狂いで仕事をし続けているときに生まれるものだ。

創造には、生きることへの喜びや確かな手ごたえといったものも必要だが、これは個人に根ざしている。私に偏らず公の精神をもち、相手を大切に思いやる気持ちは、家族や地域社会のなかで培われる。これらを失った日本にも「創造」や「責任感」は回復するのだろうか。(中略)

21世紀は、地域社会や家族を見直していく世紀になるだろう。その中から、責任ある個人と、それを束ねていくリーダーが生まれてくることを期待する。

(安藤忠雄「責任ある個人とリーダー育てる家族や地域社会の見直しから」日本経済新聞2004年3月18日)

社会的共通資本としての都市

「公空間としての地域社会」を都市の概念として提示したものに宇沢弘文の「社会的共通資本としての都市」があり、今後の都市のあり方を考える上で極めて重要な視点を提供している。以下、要点を引用する。

文化的、社会的、人間的な側面に目を向けるとき、日本の都市の多くは必ずしもよくなったとはいえないのではないだろうか。このような疑問に答えるためには、都市の本来の機能は何かという、より根元的な問題に直面せざるを得ない。(中略)

かつて私たちは「最適都市(Optimum

City)という概念を提起した。「最適都市」は、いわゆる近代的都市の理念を超えて、都市の中で生き、生活を営む市民の視点からみて、どのような構造をもち、どのような制度をもった都市が望ましいのかということを探るために導入されたものである。(中略)

社会的共通資本としての都市というとき、最適都市の考え方をさらに発展させて、社会的、文化的、自然的な観点から魅力のある都市をつくるための制度的諸条件を明らかにしようとするものである。このとき、基本的な役割を果たすのは、ジェーン・ジェイコブスの思想である。

ジェイコブスの四大原則の第1は、都市の街路は必ずせまくて、折れ曲がっていて、1つ1つのブロックが短くなければならないという原則である。(中略)第2の原則は、都市の各地区には、古い建物ができるだけ多く残っているのが望ましいということである。(中略)第3の原則は、都市の多様性についてである。都市の各地区は必ず2つあるいはそれ以上の働きをするようになっていなければならないということである。(中略)第4の原則は、都市の各地区の人口密度が充分高くなるように計画したほうが望ましいということである。(中略)

ジェイコブスの都市は、人間的な点から魅力的で、しかも地球環境にやさしい、21世紀の都市のあり方を示している。(中略)この点と関連して言及しなければならないのは、望ましい都市とはどのような形態をとらなければならないのかということにかんする社会的コンセンサスの欠如という現象である。(中略)

人間的な魅力を備えた都市はまずなによりも歩くということを前提としてつくられな

ければならない。(中略)日本の大都市の多くはすでに「くるま社会」の限界に到達しつつあって、いま、ジェイコブス的な転換をおこなわなければ、都市における社会的不安定性、文化的俗悪は、不可逆的な被害を私たちに与えることになることは間違いないであろう。

(宇沢弘文「社会的共通資本としての都市」、宇沢弘文・國則守生・内山勝久編『21世紀の都市を考える』東京大学出版会2003年)

20世紀の都市社会が著しく喪失してきたものは宇沢が言う社会的共通資本であろう。例えば江戸時代の江戸の町と現在の東京とを比較してみれば、心ある者は我々が喪失した価値の大きさに愕然とするに違いない。社会的共通資本こそが、21世紀の都市を語る上での最重要のキーワードでなければならないであろう。日本政策投資銀行は宇沢弘文を中心に都市に限らず制度等も含めさまざまな観点から社会的共通資本の研究を進めてきているようであるが、目に見えないものも社会的共通資本として重視するそのような視点こそが、いま都市にとって最も必要なものであろう。

自由な都市、弱い都市

『都市計画』No.207にジェイコブスへの大変興味深いインタビュー記事が掲載されているので、以下に抜粋して引用する。

日本は確かに小さな国ですが、「空間の幻影」(illusion of space)というものを持っています。(中略)町の一方には汚されていない海岸があり、すぐ裏には山があるというふうに非常にワイルドな自然が町と間近に存

在しているということです。その場所それぞれをあるがままの形で認めるということによって、「空間の幻影」、すなわちそこにより大きな空間があるという印象が造られているわけです。(中略)

日本では、新しいものも古いものも同じように尊重されています。これこそ私の求めていたことです。また、人だけでなく「物」(quality of things)に対する尊重の気持ちがあります。(中略)

私が重要だと思うのは、人々の自尊心とということについてです。カナダとアメリカは、両方とも移民国家なのですが、移民に対して、根本的に違う考え方を持っています。アメリカでは、「るつぼ」(melting pot)と言われるように、全ての人がアメリカ人として同化される(はずだ、べきだ)という考え方があります。一方、カナダは、「モザイク」(mosaic)という考え方を持っています。様々な色や形をしたたくさんの破片が全体として一つの模様をつくっていることに例えられる社会です。

(玉川英則「近代都市計画へのアンチテーゼ」『都市計画』No.207、1997年7月17日)

ジェイコブスが重要視しているのは、自然の尊重、過去の尊重、及び他人の尊重である。この視点は、カントの「真の自由」の考え方に極めて近い。カントは、人間が真に自由であるためには他者の自由を尊重しなければならない、と述べたわけであるが、他者には、過去の他者、現在の他者、未来の他者が存在するわけである。

人間が真に自由になるためには他者に対して謙虚でなければならないということであるが、カナダの都市や過去の日本の都市はそ

のような要素を持っていたということである。それは、風景で言えば、自分の存在を小さくする風景ということになる。

ジェイコブスの表現で特に印象的なのが、「様々な色や形をしたたくさんの破片が全体として一つの模様をつくっていることに例えられる社会」というところであるが、これは藤本壮介の建築に対する考え方を連想させる。勝矢武之は、藤本壮介の講演(2004年4月26日)を次のように総括している。

近代は空間と時間とを、ものや出来事に先行する先天的なフレームだと考えてきました。(中略)藤本は、空間や時間が先天的なフレームなどではなくて、ものとの間、出来事と出来事の間においてこそ生み出されるものだと考えています。それゆえ空間と時間とを近代的なフレームから解放し、関係の中で捉え直すことが藤本の建築の主題となるのです。(中略)

部分と部分が互いに関係しあうことで意味を持ち、そうした小さな秩序が不確定さや乱雑さを内包しながら、全体へと展開されていく。そんな建築のあり方を藤本は「森」に例えます。一本の木の中に森はなく、木と木が互いに関係しあいながら立ち並ぶことで、全体としての森ができる。それは特定の機能を持った部分(部品)が大きな秩序のもとで組み合わせて作られた、機械の様な近代建築とはずいぶん異なっています。

(http://www.tnprobe.com/modern/report/040426_02.html)

このような建築を藤本壮介は「弱い建築」と呼んでいるが、この表現を借りるならば、21世紀の都市は「弱い都市」を目指すべきであ

るかもしれない。あるいは、都市の中のそのような部分をもっと大切に扱うべきかもしれない。独立した小さな部分部分が相互に緩やかにつながって全体を形成する。これは部分部分が自己を誇示する20世紀型都市とは対極にあるものであろう。

20世紀の都市が「強い都市」であったとするならば、それは最初に枠を作って全体の形を設定し、次にその中にモノを作っていくという方法、つまり計画やデザインによってできたものであった。21世紀の都市が「弱い都市」であるとするならば、それはモノができていくことによって全体の形ができてくる、というものになる。方法論のこのような大転換は、過去の都市計画の枠を一気に突き抜けることを通じて都市の新たな可能性をもたらすかもしれない。本稿の冒頭で述べたように、風景とは外からの力によってできるものではなく自発的にできるものであると考えるならば、「弱い都市」の形成は「都市の風景」の形成とも言えるものであろう。

「弱い都市」と似た考え方をしているのが渡辺誠の「誘導都市」ではないかと思われる。それは「デザインしないでデザインする方法」ということであり、「デザインしない」というところに20世紀的でない新鮮さが感じられるのである（「デザインする」と受けるが）。

計画やデザインは、人間が決めるかサイコロが決めるかのどちらかであるが、サイコロを少し賢くしたのが「誘導都市」プロジェクトである、と説明されている。つまり、「絡み合ったたくさんものから指示した条件に合うものを見つけてくる」という程度に賢くしたサイコロで決めるのである（GD、Computer Generated Designと呼んでいる）。あるいは、「現在の設計のように「線を決める」のではな

く「条件と意図から」建築を「生成」しようとするもの」であるとも説明されている。誘導都市発案の契機は次のように説明されている。

都市は設計できない。そう思ったことから、「誘導都市」プロジェクトは始まった。都市「計画」と聞いて、ふつう、何を思い浮かべるだろうか。「輝ける都市」のスケッチ、「東京計画1960」のモニタージュ、用途地域の色分け図、交通量予測の計算書。いずれも結果を記したものである。1枚の絵としての都市、ゴールとしての図像。

一方、都市はいかに語られているであろう。生起するできごとの集積、変化する過程、断片シーケンスの重なり、メディアネットの中、そして意識の上に、都市はあるとされる。こうした認識論は、しかし、では都市をつくらうとするとき、極めて無力なことに気がつく。都市はつくるものではない、といって認識の描写に戻ることは容易だが、実はその間にも都市はできていく。（中略）

要するに、都市をどうやってつくったらいいか、誰にも分からないのだ。分からないから、今までの教科書どおりにやっている。やった結果の評価基準は、経済収支だけだ。ひとが集まり、もうかれれば成功。そうでなければ失敗。

都市をつくることは巨大なシステムの仕事である。何かがおかしい、とみな思いながら、意思決定と実行に要する煩瑣な手続きと長い時間の経過の中で、個人の意思より、既存のしくみが自動律となってしまう。その結果が、現在の街の姿なのである。

（渡辺誠『建築は、柔らかな科学に近づく』

建築資料研究社2002年）

このような問題意識は今や数多くの都市関係者が共有するものであろう。都市をどうやって作ったらよいか、悩みながらいろいろな議論がなされてきている。その中でも「誘導都市」は極めてユニークで興味深いものである。

もちろん GD とは言っても「条件」は誰かが決めなければならない。それさえ決まり、また必要な情報が全て計量的に用意できれば、そこから先の判断は機械が得意とするものである。しかし、言うまでもなく都市づくりに関する情報を全て計量化するのは難しい。つまり、人間の感性を全て数値に置き換えるのは難しい。そこで「誘導都市」では「コンピュータとひととのコラボレーション」が重要になってくるのであるが、人間の感情は時により大きく変わり、「風の中の 羽のように いつも変わる女心 涙こぼし笑顔づくり うそをついて だますばかり 風の中の 羽のように 女心かわるよ ああ 変わるよ」という歌もあるくらいなので、コラボレーションこそが重要なのである。そして、そこに関心が集まることにより、都市づくり手法大変革への展開も期待されるわけである。

さて、コンピュータが関与するか否かに関わらず、個々のモノがそれぞれの思いに基づいて出現したり消滅したりしながら次第に全体の風景が見えてくる、という状況で「弱い都市」が形成される場合、個々のモノに何らかの規範がなければ混沌が生まれるだけであろう。しかし、その規範が外から与えられてしまっは(例えばコンピュータ(にプログラムを入れる人間)がルールを全てを決めてしまっは)風景にならない。結局、真に自由であるためには内からの倫理が必要になり、その倫理を彷徨等の手段によってつくら

なければならない、という元の話に戻る。

ところでオランダのライツェ・ラインで採用されたインデックス・システムは「弱い都市」の手法に近づいた手法ではないかと思われる(『PROBE 02』TN プローブ2002年)。彷徨えるオランダ人気質ならではの成果であるかもしれない。

「強い都市」と「弱い都市」との対比に関しては、次の文章が参考になる。

A 地域では、江戸時代からの水路で村々に水を分けているが、特に水が欲しい出穂期や渇水期には分水点で水の争奪戦になる。上流集落は見張り小屋を建て、石やら筵やらホースやら総動員で我が田に水を誘導する。下流集落は水利調整と称して夜間それを壊しに来る。かくして我田引水の手練手管が発達するが、大喧嘩はきわどく回避されていた。収穫が終わってみれば、水はうまく配分され、水路もちゃんと維持されている。

一方 B 地域では、巨費を投じた近代的な渇水設備で水道のように各田圃に水が行く。分水点は地下だから、もはや水争いも起こり得ない。しかし同時に、農家が灌漑施設から疎遠になり、その結果、却って導水機能の維持が困難になってきた。

周到に計画された近代設備がたちまち機能低下に陥り、一見無軌道な水争いゲームが二百年以上も機能し続ける。渾沌が秩序、秩序が渾沌を生む。

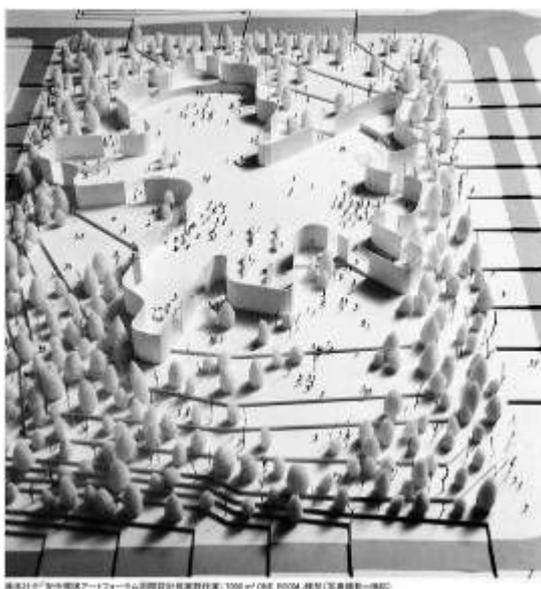
(藤本隆宏「水争い」『あすへの話題』)

日本経済新聞2004年5月28日夕刊)

「渾沌が秩序、秩序が渾沌」というのは本稿冒頭で引用したラゴスの様相を連想させ

るが、安中環境アートフォーラム国際設計提案競技(2003年8月)において最優秀賞を受賞した藤本壮介の「7000㎡ ONE ROOM」(下図)にも同様の視点を感じられる。

7000㎡ ONE ROOM



(出典)『建築文化』2003年12月号

この提案に関して藤本壮介は次のように解説している。

ひとつの大きなスペースなんだけれども、いろんな枝が伸びていて、枝の端のほうに行くと独立性が高くなっていく。そして空間の端にいる人からも、ほかの活動をしている人が遠くに見える。つまり、空間的には一体なんだけれど、いろいろな場所がそれぞれ独立して共存している。それぞれが距離感を持ちながらつながっている。(中略)それは、接続と離散という状態を同時に満たしているインターネットの世界に近い空間かもしれません。(中略)

WEBの世界には距離がないから、リンク

先に瞬時に移動できますが、建築にはどうしても距離が生まれてしまう。そうだとしたら逆に、その距離を生かすかたちで場所と場所をつないだり離したりすることができないかと。つまり空間というものの可能性をもっと広げていくという感じです。今回のように、凹凸をつけることで距離的には近いけれど分離されている空間が生まれたり、遠いけれど空間的には一体であったり、そういう建築ならではの場所と場所の関係をすることが、建築として新しいのではないかと考えています。(『建築文化』2003年12月号)

このような発想は街における人と人との関係性を見直す21世紀の都市空間づくりにとっても大変有用なものであろう。既存の空間の中では路地にこのような特性が見出せる。路地は建設された当初はただの真っ直ぐな通路でしかなかったが、住民がその空間を使い込み手入れをしていく過程で、近いけれども分離されている、あるいは遠いけれども繋がっている、という空間になってきている。

経済政策の統合

「弱い都市」形成への道筋がしっかりとできれば経済政策論に関する各派の主張はひとつに収斂できるかもしれない。

「市民の(市民に由来するという意味)、市民による、市民のための街づくり」の方向、体制、プロセスが合意されれば、そのプログラムに従って公的支出についても教育、医療等のソフトと文化施設、通信施設等のハードとを統合した優先順位を設けることができるであろうから、不況の際の財政政策も透明化できる。財政拡張が短期の景気対策ばかり

でなく長期の街づくりにも大きな意義があるということを皆が理解すれば、それで将来不安に陥るということもかなり軽減できるであろう。同時に、早期に処理すべき債権と今後可能性が開ける債権との区別もつきやすくなる。ビジョンは上から与えられるものではなく市民が自ら不断に作り続けるものとなるため、その信頼性、現実適応性も格段に向上する。

街で弱者をサポートする体制が整ってくれば、街から遊離した組織への依存度が低下し、また街づくりに対して主体的な関心を持てるようになり、倫理水準は狭い枠を超えて高くなっていく。これはひとえに街の中にどれほど公空間を広げていくことができるかにかかっている。

経済再生の鍵は街づくりの鍵でもある。それは、人々が自主的に将来の希望を語り、動き、金や物や力や情を出すということである。そのようなもろもろのフローを拡大させることによって経済も街もよくなっていく。

心構えとして重要なのは、誰かが見通しを与えてくれるのを待つということではなく、自分たちで見通しをつくるということである。これは結果よりもプロセスを大事にするということであり、イギリスの第三の道と同じ考え方である。岩井克人は「会社は誰のものか」という問いかけをして株主主権論に疑問を呈しているが(岩井克人『会社はこれからどうなるのか』平凡社2003年)、都市の分野では「街は誰のものか」という問いかけを行なうことが極めて重要になっている。

なお、先にも述べたことであるが、街づくりで雇用を吸収するとはいってもその分野は本来の性格から(労働集約的という性格から)労働生産性は高くない。労働生産性で賃

金が決まるようだと、どうしても先端産業に比べて低賃金になる。しかし労働生産性は高くなくても生み出す社会的価値は大きい。そこで労働生産性と賃金水準との切り離しが必要になる。日本経済運営のためには各分野の経済活動が必要不可欠であるから、それら諸活動からもたらされた成果を活動毎に分けるのではなく全体をひとつのパイとして、それをいかに公平に分けるかという視点が重要になってくる。要するに、街づくり活動へは、社会への貢献度を考慮して労働生産性を超えた所得分配が必要である。あるいは分野によってはフェア・トレードのような仕組みを取り入れることが可能であるかもしれない。

いずれにしても、新たな都市風景を創造するためには経済対策とあわせて所得分配のあり方を考えることが必須である。単に労働生産性のみで所得の多寡が決まるようであれば、まちづくりに関心を持つ者は少なくなり、また、生産性の低い人口を生かすことができなくなる。結果として労働者のかなりのものが市場経済活動から排除され、国民経済の規模はかえって縮小していく。排除された者は社会負担を大きくするので実質的な付加価値はますます小さくなる。その問題の典型が今既に大きな問題となっているホームレスであろう。

街づくりに対する支援としては人の活動に対する支援を強化していくことが必要である。そうすることによって人の活動に支えられた「弱い都市」ができていく。

最後に、上で見てきたように、経済学はいまや倫理の問題に踏み出している。正確に言えば倫理の問題を取り戻しつつある。経済学の祖と言われるアダム・スミスはもともと倫理学への関心から経済学を研究したので

あり、『国富論』を執筆しつつも『道徳感情論』の改定を行ない続けた。20世紀に技術論、制度論に陥ってしまった経済学もようやくここに来て本来の学問の意義を認識し始めていると言える。技術や制度を論じることによって抽象論よりも現実の役に立っているという思い込みで陥ってしまったのは経済学ばかりではないが、今や本源的な問いに向き合うことなしに小手先の制度論を展開するのは無意味だということが分かり始めてきたのではないだろうか。もちろんアダム・スミスの倫理と本稿で言う倫理とが全く異なるものであることは言うまでもない。

(5) 都市の市場経済化 消費し尽される空間

経済学者は今後の都市における公空間形成の重要性を指摘しているわけであるが、現実には私空間が膨らんでいる。土地面積で見てもそうであろうが、容積で比べれば公空間と私空間とのバランスは急激に後者に偏ってきているのではないだろうか。以下に槇文彦と松葉一清との対談を引用する。

松葉 公共の空間が反故にされて、人はただ、ものを買ひ、飲み食いして充足している。
(中略)東京ではその公共空間がこんなに商業化されてしまっていていいんだろうかという抵抗感が私にはあります。(中略)

槇 かつてある種の公共性をもって存在感を主張してきたものが、今や消費文化に侵食されている。公共空間の本質というのは、その空間がどこまでいっても消費されない強さを持っていることなんです。駅であり、タウンホールであり宗教空間、そういうものが、次第に消費空間におきかえられていく

ことに対して、たいへんな疑問があります。
(中略)

松葉 戦後すぐの日本の建築家の、都市を構築する志にはすごいものがあったと思うんですが、その後はほとんどの建築家が挫折して、都市計画や意欲的なプロジェクトから撤退してしまった。そうすると東京に住んでいる人は建築家の恩恵をほとんどこうむらないまま、現実の都市において圧迫感だけ受けて暮らしている。(中略)

槇 今の世の中ではなぜかレトロ調が強くて、大正や明治、昭和初期のものを残すという動きがありますね。(中略)やはり建築家ははじめから終わりまで作り上げたアートであり、プロダクトとしての重みというのを感じているからこそだと思います。

松葉 しかも、それにみんなで重みをつけてきた。

槇 記憶の装置としてね。そういうものが現実にあれだけの関心をひきつけながら、冒頭に松葉さんがおっしゃったように、なぜ日本の社会はこんな形で消費文化を横行させるのか。(中略)

松葉 裁判やリコールによってしか、残したい人の意思表示ができないのは困ったことです。(中略)

槇 ニューヨークの IBM ビルの一階にガラスのアトリウムがありますでしょう。何も無いところに竹が植えてあって、椅子が置いてあって。(中略)

松葉 2003年以降の再開発にそういう公共の場があるのかというと、どうも無いんじゃないかという気がします。(中略)

槇 保存することによってだけ、いい街ができるわけではないし、作ることに對しても積極的にどうしたらいい街ができるかという、作

る側の意識のレベルの問題がある。それが近代においてなかったのかもしれないね。

(中略)

松葉 その構図は、日本全体がどこにも鋭角な人を育てていかない状況そのままです。(榎文彦・松葉一清「対談 建築家の責任」『東京人』2003年4月号)

また、榎文彦は以前次のようにも述べている。

われわれの都市では、さまざまな異なったクローズド・システムが一見穏やかなオープン・システムの中を浮遊している、そんな状況ではないか。そして、それらのクローズド・システムには、お互いに関係がない。(中略)今、クローズド・システムを、その与えられた領域ではそこに内在する特殊なルールを持っているシステムと定義します。その時、われわれのメトロポリスは均一化するどころか、逆に意外にもそうしたクローズド・システムを持った領域も増殖しつつあることに気がつきます。

(榎文彦「建築はいかに社会に潜在するものを実現しうるか」『PROBE 01』TN プローブ1999年)

このような現象を榎は「ディズニーランド化現象」あるいは「ラスベガス現象」と呼んでいるが、これらは私空間の増殖であり、将来は「軽い核」になるものかもしれない。榎は、今後つくりださなければならぬ空間を「自己と他者との関係を常に考えさせる」空間であるとしている。

ところで、コールハースは都市のテーマパーク化の源流にあるのが、意外にもジェイコブスの運動であると述べている。

アメリカの都市から小さな店舗が姿を消し、商業活動がより大きなモールに集約化されていった1960年代から70年代にかけて、ジェーン・ジェイコブスは街路生活を再発見するための運動において大きな成功を収めました。逆説的ですが、(中略)この運動の成功が引き金となって、ゾーニングは歩行者専用路を強化し始めるようになり、(中略)ジェイコブスのおかげで、商業活動は都市生活のひとつの条件となったのです。ショッピングの独裁のなかで「真正さ」を守るための努力が、テーマパークを生み出してしまったというわけです。(中略)

現在ショッピングは他の活動に組み入れられ、エンターテインメントや教会組織、あるいは教育とさえもいっしょになってハイブリッド化しているのです。ショッピングなしの空港がもはや存在せず、また空港なしのショッピングが存在し得ないということからわかるように、私たちは奇妙で危険な状況を生み出してしまっています。(中略)

この現象はおそらくラスヴェガスにおいて最も顕著かもしれません。(中略)2001年、私たちは巨大な量塊として建設された都市の状況が、ショップ群と完全に同一化していることを発見したのです。(中略)すべてが徹底的に飾り立てられた内部空間であるという継ぎ目のない都市的状况となってしまうのであり、(中略)空間は完全な飽和状態にあり、伝統的な意味での空間はもはや何の役も果たせないのです。(中略)

ジャンクスペースは信じ難いほど空間に貪欲なのです。これほど多くの巨大な主題提示、多くのヴォールト屋根、多くのドーム、多くの装飾スペースがある空間は他にありませんが、しかしそれらがほとんど何の効果ももたないので

す。(中略)あなたはうっとり魅了されるのですが、とても悲しいことに、その信じ難いほどの強烈さにもかかわらず、それは文字どおり記憶に残らない建築なのです。(中略)ジャンクスペースは「たちの悪い」マテリアルで飾られた典型です。つまり、そのマテリアルは際限なく柔軟性・融通性に富んでいるということです。

(コールハース前掲書)

テーマパーク的なジャンクスペースの出現がジェイコブスの運動に起因するというコールハースの指摘は大変興味深い。ジェイコブス的な運動がほとんどなかった日本でもその類の空間が最近急増していることを考えると、それらをどの程度までジェイコブスの運動に帰すべきなのか、さらなる考察を要するかもしれない。

またジャンクスペースであっても、それで消費者が満足しているのであれば、そのような空間の存在自体を批判してもあまり意味がないような気もするが、そのような空間が増殖することによって社会にマイナスが及ぶようであれば、それはやはり何とかしなければならぬという意見も出てくるであろう。

テーマパーク的な都市空間が増殖してきた要因は、むしろ経済の成熟化・消費ニーズの高度化に社会の変化(ポストモダニズム、物語消費ニーズの拡大等)が重なったことであると考える方がわかりやすいかもしれない。消費ニーズの高度化に関しては次のような説明がある。

少なくともわが国の社会は商品で、家の中はモノで埋め尽くされているように感じられる。

また、今やモノを手に入れるために必要なエネルギーも最小限ですむようになりつつある。

(中略)

こうした状況に陥れば陥るほど我々はある種の欠乏感に苛まれる。一つは消費欲・独占欲の延長線上にある「売ってないモノ」を求める欲求であり、もう一つは「持っていることの意味」に対する疑惑である。(中略)成熟すればするほど持っていることでは満たされない「状況に対するあこがれ」が強くなる。(中略)

取り替えることのできない時間を慈しみ、かけがえのない人々とのつながりを確認し、「時の流れ」の状況をともに感じる「時間消費」を基調としたライフスタイルへのあこがれが潜んでいるのではないだろうか。

都市は人々の人生の舞台である。舞台はこうした「時間消費」の喜びを演出する空間でなければならない。

(岸井隆幸「豊かな「間(ま)」と「時(とき)」が生み出す日本型都市空間、日端康雄・北沢猛編著『明日の都市づくり』慶應義塾大学出版会2002年)

経済の成熟化から生まれる消費者の力は、本来であれば街づくり、風景づくりに向かう可能性を持つのであろうが、現実にはその力が商業空間の中に吸収されてしまい、風景を消失させる「量塊」が出現している、ということかもしれない。その行き着く先が、「ディズニーじみた軽い核」と「寄せつけず排除されるべき外集団」とへの分化になるということであろうか。

もっとも、クローズド・システムは最近出現したものではない(例えば江戸時代には橋詰広場に見世物小屋等が集積した娯楽街があった)。また、人々はクローズド・システムの中だけで生きるわけにはいかないから、場所に応じて舞台を使い分ける知恵くらいはあ

り、街や風景が消えていくなどということにはならないのではないか。年配者なら普通そのように思うであろう。一方、1970年代以降に思春期を過ごした者はどうであろうか。この点は次回の考察課題であるが、現実空間を忘れてジャンクスペースにうっとり魅了され続ける文化はありえないと言い切れる者は、果たしてどれほどいるのであろうか。

市場経済がもたらす空間

急激に増殖しつつある「消費し尽くされる空間」は、都市の土壌の表層に薄く広がりつつある市場経済を養分として乱れ咲くあだ花の類いのものであって、深い水脈の上にしっかりと根を下ろし風土の一部となるものでは決してないという見方もあろうが、そのようなものでないからこそ将来に関してはさまざまな可能性があるとの見方もあろう。はたして市場経済化の進展はこれから空間にいったい何をもたらすのであろうか。

昨今では世界的な資本移動を背景にグローバリズム対反グローバリズム、経済対社会、市場対文化等さまざまな摩擦が生じてきているが、総じて言えば社会や文化等の繊細な主張に対して市場主義の主張はあまりに単純であり、単純であるがゆえに強い浸透力を持っているような印象がある。これは思想のない虚無の強さであろうが、それゆえにそれは人間を因習等から解放するという働きもするし、人間の「動物化」、「家畜化」と言われる現象を引き起こす働きもするであろう。

市場経済化が行き着く先の空間の姿をしっかりと考えることが今最も必要とされていることであろうが、その点に関してはミシェル・ボア『資本主義の世界史』の次の記述が参考になる。

第三次部門への産業の重点移行という見かけの背後で、現在進行中の現象の本質とは、「商品の全般化」という土壌肥料の上に開花したともいえる「全般化資本主義」の登場ではないであろうか。すなわち人体(機能)の商品化(健康投資や保健、血液、臓器、生殖力の売買、将来は人間の存在全体の遺伝管理という展望さえある)、社会的機能の商品化(教育と情報、知識、世論の管理、将来は政治決定、緊張関係および紛争の管理)、より高度な人間活動の商品化(科学研究、知識、知的・芸術的業績の追求、諸原則と諸価値の管理の展望)、人間の対自然環境との関係の商品化(汚染対策とエコビジネス、クリーンな生産と都市化、自然と地球の管理の展望)……などである。

文化そのもの、情報と映像の処理と伝達、生命体の繁殖、さらには人間のより高貴な活動として長い間みなされていたことまで - そこに資本主義がはいり込めば逆に足をとられかねないようなこれらの新分野にさえも、資本主義はあらたな生き残りの機会を見出した。(中略)

それは - すでにはじまっているが - 人間の生活のすべての瞬間、社会の運行のすべての側面、そしてますます観察されていくことだが、いまや人間の単なる「環境」に矮小化されてしまった地球のすべての次元での、「万物の商品化」(ウォーラー・ステイン)となるであろう。要するに人間と諸社会と大地の商品化である。(中略)

金によってますます侵略され、魅惑される社会生活全体の貨幣化と賃金労働の拡大の運動は実に強力なものであることが理解される。その対極に、社会の金銭関係に従属した後背

地あるいは生き残り地帯として、「インフォーマル」部門、新しい貧困、新しい排除化が生まれている。

(ミシェル・ポー『資本主義の世界史』

筆宝康之・勝侯誠訳、藤原書店1996年)

仮に万物の商品化が進むとするならば、もはや伝統とか風土などと言ったところで、それらは時間の経過とともにやがて単に商品の切り売りないし集積に過ぎないものとなっていく。それらは膨大なデータベースから適宜選択されてきた情報の集積にしか過ぎなくなるので、伝統や風土を大切にしなければならぬという考え方自体が消えていくかもしれない。もしそうであるならば、テーマパーク的空間こそが来るべき空間であって、それ以外の空間は単なる残花にしか過ぎないということになる。

なお、ポーは、市場経済が浸透すると「万物の貨幣化」が生じるとして次のような情景を描いている。

ひとりの子供と父親が田舎を散歩している。急に子供が不安になって立ち止まり、たずねる。「パパ、誰にお金払うの」。レジャーランド、有料スキー場、有料海岸と、野外の活動で金から逃れられるものがますます減ってきている。

噴水の水は無料であったが、いまや水道は有料で、鉱泉水あるいは「泉」の水の販売(ビン詰め、各地の自治体ではポリタンクあるいは「村の湧き水」)はわれわれの世界のすべての暖衣飽食地域で広まっている。これに対して、多くのスラム街では、浄化されていない水道の水の取り合いをめぐって争いが絶えない。すべての国々にとって、飲料水販売は完全な経

済活動となっており、水が不足している国では水は輸入品となっている。いつ、水は石油より高くなるのであろうか。

似たようなプロセスが清浄な空気を求めて空気に対してもはじまった。メキシコの街角では、通行人に酸素吸入サービスをする商売が登場したとのことである。空気調整が設計時点から組み込まれた建物がますます増加している。いくつかの原型(「バイオ・スフィア」、バイオ・スフィア」)によって構想されている「人工都市」プロジェクトもある。空気商品が確実に根をおろしているのだ。(ポー前掲書)

都市全体の空気が管理されるような事態になってくると、経済力が足りないばかりにそもそも都市に入れない人間すら出てくるかもしれない。都市の中では、全てが金に置き換わる。土手の芝生に寝転ぶ時も「パパ、お金持ってきた?」というようなことになる。

しかしお金で済むならまだ救いがあると考えるべき事態に徐々に移行しているかもしれない(お金なら必要な分だけ信用力の裏づけなく匿名で稼ぐこともできる)。原さとる(井原哲夫)が1981年に執筆した『海舟未来に行く』(毎日出版社)は、全ての対価がキャッシュ・カードで支払われる未来に勝海舟がタイムトラベルして大変な目にあうという話だったと思うが、つまりそこは「パパ、カード持ってきた?」という世界である。しかし事態はさらに先に進んでいる。近い将来「パパ、ケータイ持ってきた?」ということになりそうな勢いでケータイの決済手段化が進んでいる。こうなると「中心となる核」からドロップアウトした人間はもはや生きていけない。「中心となる核」と「外集団」とを分離する物理的な「防疫線」も必要なくなる。ケータイを失えば命を失

う世界になっていく。

都市の商品化

これまで引用してきた「軽い空間」、「消費し尽される空間」の特徴は代替性が高いということであろう。代替性が高いがゆえに、「とても悲しいことに、その信じ難いほどの強烈さにもかかわらず、それは文字どおり記憶に残らない」ということになってしまう。以下、この代替性について少し考察してみよう。

市場経済とは商品が市場で取引される形態が一般化して成り立つものであるが、その一般化のためには商品の規格化が極めて重要になる。言い換えれば、商品の代替性が重要になる。代替性がない財ばかりでは価値を評価する場はお宝鑑定的になってしまう、その取引空間の広がりも極めて限定的になる(逆に市場経済が浸透するとお宝鑑定に対する関心度が高まる)。

一般論で言えば代替性は工業製品が最も高い。購入したものが他と違っていれば交換してもらえるし、あるいは修理してもらえる。不動産の代替性は低い。他と同じものは基本的には存在しない。その不動産を主要な集積要素のひとつとする都市の代替性はさらに飛躍的に低い。かなり多くの人にとって代替性はほとんどないであろう。

代替性が低いということは市場で情報が得にくいということである。いわゆる情報の非対称性なるものが大きい。そこで、取引には時間がかかる。工業製品に比べて不動産の購入に要する時間は圧倒的に長くなる。手続きも複雑になる。仲介業者から重要事項説明を受け、契約書を作成し、登記をし、といろいろある。

これは、代替性が低い財ほど権利関係が

複雑になる傾向があることにもよる。パソコンやラジカセのような工業製品を市場で購入する場合の権利関係の変化は極めて単純である。それは、所有権の一元化が確保されているからである。ところが不動産となると、所有権が複数に分かれていたり、さらに所有権以外の権利が設定されていたりする。そのために取引のプロセスが煩雑になるのであるが、非代替性や権利関係の複雑性を「個性の強さ」ということでまとめてしまえば、個性の強いものほど扱いが大変になるのである。

家を建てるとなるとさらに大変である。まずは理想を描き、好ましい設計者を探し、財布の中身を見直し、日頃の生活様式を見直し、理想をあきらめ、パース・模型を作り、施工者を探し、材料・工法を検討し、見積もりを行い、地質調査を行い、設計を変更し、工程表を作成し、契約書を作成し、周辺住民への説明を行い、着工し、工程表を変更し、棟上式を行い、左官工事、電気工事等の日程調整を行ない、完成し、訴訟になる。建築は闘いだ、と言われるのももっともで、要するに建築とは「軽い消費」の対極に位置するものである。

街や都市になるとなお一層大変である。比較するものが他の街や都市ということになるので代替性は著しく低下する、はずである。一方、設計の自由度は拡大し、関係者の数は増加する。権利関係は極めて複雑になる。建築が個人あるいは小集団の闘いであるとするならば、街づくりは大集団の闘いである。建築が「エイリアン」なら街づくりは「エイリアン2」である。ところが現実には街づくりに命をかけている人はあまりいない。どうしてだろうか。

ここで、代替性は何によって決まるかを考えてみなければならない。工業製品が代替的で不動産が非代替的であるというのは常に真実であろうか。その性質は物に内在するものなのであろうか。必ずしもそうではない。例えばどこにでもある商品でも、特定の人からもらえば希少性を獲得する。キャラメルのおまけのネクタイピンでも一生身につけてしまう。一粒で300メートルどころか地球を一周してしまう。要するに代替的か否かは人の心が決める。千年の恋に落ちた人は相手の非代替性がほぼ無限大になる。そのような感覚は結婚斡旋業者は持たない(持ったら商売になりません)。もちろん感情自体には善も悪もないので、これは善悪論とは関係ない。

都市についても同様である。長年住んで愛着を持っている人にとっては都市は非代替的であるが、デベロッパーにとってはかなり代替的である。もちろん都市に愛着を持っていないことは悪ではない。これは、県や日本、アジア、地球等に愛着を持っていないことが悪でないのと同じである。そのようなことに善悪論を持ち出すようでは、テラ・フォーミングやエウロパ・プロジェクトなどは発案すらもできない。

以上まとめると、モノの代替性は人間の心が持つモノへの愛情の大きさに反比例する。したがって街への愛情が小さければ(例えばマンションが便利で快適ならいいくらいの感覚では)、街づくりに大きなエネルギーをさこうなどとは思わなくなる。愛情は、都市が市場経済の下で商品化されるほど低下する。愛のある心は繊細で傷つきやすく弱い。愛のない心は粗野かどうかわからないが傷つきにくく強い。

市場経済が浸透して都市が代替財に近

づけば、人々はそのような財として都市を需要し、代替性の高いものとして周辺環境を見るようになる。この観点からするならば、戦前からの居住者が都市に強い愛着を感じるのは単に居住期間の長さだけによるものではないことがわかる。つまり都市の市場経済化の中で価値の質的転換が生じている。古い人は街をかけがえのないものとしてみているかもしれないが、市場経済が浸透した中で生まれ育った新しい人は街すらも商品として見ているかもしれない。新しく都市に移り住んだ人は目の前にマンションが建って自分の家の日当たりが悪くなってはじめて自分の家の環境を守るために立ち上がる、ということにもなる。もちろんこれは善悪論とは関係がない。

誰が都市を決めるのか

ここで本稿冒頭の疑問に戻るのであるが、都市とはいったい何なのか。目に見える都市と目に見えない都市とでは都市の意味がまるで異なるのではないか。価値が質的に異なるのではないか。

上述したように市場経済化の力は非常に強い。このままの傾向で推移すれば都市空間のほとんどは商品化されていくかもしれない。そして、その中で都市の伝統、文化、風土等は無意味化されていくかもしれない。そのような都市の変容は善悪論では語れない。善くもなく悪くもない。ただし人間の判断があるべきか否かという問題はある。市場経済化の力で都市が変容することでよいのか、あるいは何か他の力を注入すべきか、あるいは人間が計画すべきか。

この問いに答えるのはなかなか難しいが、面白みに欠く無難なことを言えば、それぞれ

必要であるということになる。市場経済がつくる部分、他の力がつくる部分、人間が計画する部分、それぞれが必要である。

市場経済がつくる部分は人々のニーズを適確に捉えるために必要である。これは私空間ということになる。他の力がつくる部分は人間が真の自由を獲得するための倫理を持つために必要である。これは公空間ということになる。「他の力」とはさしずめ「弱い力」ということであろう。人間が計画する部分は都市が機能不全を起こさないために必要である。

都市をつくる時上記3つの部分のうちどの部分を最上位に置くべきか。この問いも答えるのが難しいが、「他の力」が「弱い力」(愛の力)であるならば、弱い分だけ上位に置かなければバランスがとれないであろう。市場経済の力は大変「強い力」(金の力)であるから、これは最下位に置くべきであろう。人間の計画がその中間に入る。いわば人間の計画が「弱い力」と「強い力」とをとりもつモデレーターになるわけである。この場合「計画」はもはや最上位ではない。

都市づくりの難しさ

以上のような事情なので都市づくりは難しい。これからは人々が都市づくりに取り組むことで経済を支えていかなければならない。人々が街づくりに取り組むためには人々の心に街への愛がなければならぬ。都市づくりで経済を支えるためには街に経済活力が生まれなければならない。経済活力が生まれる街は市場経済化されやすい。市場経済化された街は代替性が高くなり人々はそこに愛を感じなくなる。

これからの街づくりが、街に経済活力を

生み出す、と同時に、街を市場経済化しない、という2つの課題を同時に追求しなければならないのであれば、それはナイフの刃の上を渡るような難しさを伴う。

、ともに満たすと人はアイデンティティを確保でき、自我の否定を伴いつつ大きな世界につながる。これは物も心も豊かな状態である。を満たしてを満たさない場合、都市の風景はパーツの集積となり、存在感がなく愛を呼び起こさないものとなる。アイデンティティは消失し、否定すべき自我はなく、否定作用は自他の存在に向かう。これは物は豊かで心が貧しい状態である。を満たさずを満たす場合、物は貧しいが心は豊かな状態であり、極端な場合はホームレスの集合ともなる。、ともに満たさない場合、悪い意味でのスラム街になる。

どのような状態を選択するかは人々が決めることであるが、、ともに満たす方向を目指すのであれば、市場経済化の力はとても強いので、まずはの確保を図るべきであろう。市場経済化しないための鍵としては、まちづくりを労働集約的な経済の場とする、そのために極力機械に依存しないまちをつくる、不動産の所有・経営・利用を極力一致させる、あるいは単なる所有にも金で解決できない社会的責任を課す、個々の住宅の外に私有地を拡大させて公空間とする(道路、広場、公園等)、地元の人々が経営する農業・商業を振興する、まちの中でカネが循環する工夫をする、他にない独自のまちをつくりあげる、等々さまざまなが考えられる。

市場経済化しないということは、外部の者を受け入れないということではない。外部の者であってもまちで決めたルールに則り、市場取引以外の場でもまちに貢献する意志の

ある者は、積極的に受け入れる(例えば、緑地整備、防犯活動等をボランティアで行う者など)。

念のために補足すると、市場経済化とは今日的な意味で言えば経済関係で人の顔が見えなくなることである。もちろんこれは物理的に見えないということではなく、人の心が見えないということである(あるいは見なくてすむということである)。したがって、は必ずしも対面関係を必須のものとするものではない。市場経済化のように見えてもそうではない場合もある。

なお、市場経済化であっても資本が街に社会的責任を持つ(アダム・スミスのな)古典的状况であれば、街づくりと相反するものではない。問題は、資本が短期間のうちにあちこち移動する今日的状況にある(かつてのアジア危機的状况)。このような状況下で街を維持・発展させていくためには「弱い都市」を「弱い都市」として守り育てるという姿勢が重要になる。

おわりに

「弱い都市」をつくるためには、あるいは「弱い都市」を支える人をつくるためには、「都市の風景」を大切に扱うことが重要である、というのがここまでの一応の基本的考え方である。つまり、人間が風景の中に溶け込み、風景と自己とを一体化することによって自己が大きなものにつながり、翻って身の回りの小さなものを大切にできるようになる、という考え方である。

しかし、改めて考えてみれば、このような考え方は極めて古典的であり単純である。今やこのような考え方の基礎となる人間の指向性や社会関係は、都市では失われている

のではないか。これからの都市では風景など誰も求めないのではないか。求めないどころか風景と自己とが一体になるなどということ徹底的に忌避するのではないか。都市に加わるということ徹底的に忌避しつつ都市から出て行くという積極的な選択もなし得ない人間が多くなっていくのではないか。そのような社会では風景など無意味ではないのか。風景は一定の社会の成立を背景に発見されたと言われているが、そうであるならば、一定の社会の成立(あるいは崩壊)を背景として風景が喪失(あるいは忌避)されることもあるのではないか。このようなことを考察するのが次回の課題である。

序章は次回に続くが助走し続けて場外に消え去ることだけは避けたいと思っている。

参考 街の風景(1) 佃島

はじめに

「都市の風景」の参考として街の実風景を紹介していきたい。今回は隅田川の河口に位置する佃島(東京都中央区)である。

佃島の今昔

文化文政(1808~1828)頃(右:石川島、左:佃島)



昭和55年頃(右:石川島、中:佃島、左:月島)



(資料)中央区郷土資料館の展示模型

1. 佃島の人と風景

はじめに佃島気質なるものを思わせる印象的な文章をふたつ引用する。

東京だなんて、住むところなんかありゃしませんよ、人はみな口をそろえてそう言う。しかし、私にはひそかに住みたいところがあるのだ。そ

れは佃島。今でも、あすこには私の育ったところの下町の面影が残っているからである。どの家も、門なんかなく、いきなり格子戸になっている小家がちで、その格子戸がよく雑布掛けをしてみがかれているので、短時間では出し得ない健康な美しい色艶を放っている。そういう家を見ると、中へ上がらないでも私には間取りの具合から、掃除が行き届いた茶の間の様子まで手に取るように目に浮かんでくる。毎日この人達が食べている物まで分かる。私達の食卓から消えてしまった質素でうまい物の数々がある。

(小島政二郎の随筆(1965年1月10日朝日新聞)、佐原六郎編著『佃島の今昔』雪華社1972年より引用)

佃の住人は鉢物が大好きなのだ。狭い島の小さな間取りに、つつましく暮しているの、場所ふさぎにならない、なるたけ小粒な物が、分にあうのである。人を押しつけるような、あるいは見くだすような巨大を好まない。大きなものは住吉さまの一の鳥居と、住吉さまの八角の宮神輿と、東京で一、二を争う町内神輿、この三つだけでたくさん、というのが佃の人たちの本音なのである。

(出久根達郎『佃島ふたり書房』

講談社1992年)

「人を押しつけるような、あるいは見くだすような巨大を好まない」人が住む「格子戸がよく雑布掛けをしてみがかれている」街というのは、21世紀の来るべき人間像、来るべき都市像であるかもしれない。このような人と街とができた背景には次のような風景があったことも多少は関係しているような気がする。

佃島は、潮干狩とお月見の名所にもなり、『江戸名所図絵』には、

弥生の潮乾には、貴賤袖を交えて、浦風に酔をさまし、貝拾い、あるは磯菜(海草)摘むなど、その興殊に深し。月、平沙を照しては漁火白く、芦辺の水鶏、波間の千鳥も、ともにこの景色に入りて、四時(四季)の風光足らずとすることなし。

と、美文調でほめているし、俳人宝井其角もこう詠んでいる。

名月や ここ住吉の つくだじま

(北原進・文ノ東京にふる里をつくる会編

『中央区の歴史』名著出版1979年)

2. 佃島の起源

佃島の起源に関しては全国地理教育研究会監修『エリアガイド 地図で歩く東京 1 東京区部東』(古今書院2002年)の次の記述がコンパクトでわかりやすい。

徳川家康が本能寺の変に際し、摂津国西成郡佃村で難渋し、これを助けた庄屋孫右衛門の恩に報いるため森姓を与えた。そして、漁師34名とともに江戸に招き、隅田川河口の干潟洲を埋め立てた地に移住させ、将軍家に白魚を献納させていたのが佃島の始まりである。

本能寺の変に際して家康を助けたのが佃島の起源というのは誠に劇的である。この点は桜井正信編『歴史散策 東京江戸案内 巻の一』(八坂書房1994年)にも「のちに佃島の名主となった森孫右衛門が、本能寺の変のとき、たまたま家康の危機を救ったのが縁で、家康が江戸に入部した際、摂津国西成郡佃村の村人を33人引きつれて佃島に住みつかせ、幕府に白魚を献上する役目を

務めさせることになったと伝えられている」と同様の記述がある。しかし一方、これらとは異なる記述が北原進・文ノ東京にふる里をつくる会編『中央区の歴史』(名著出版1979年)に次のようにある。

徳川家康が江戸にはいる頃、摂津国の多田神社と住吉神社に参詣しようとした時、神崎川に渡船がなく、西成郡佃村・大和田村の漁師が船を出して渡御せしめたことがあった。その功により、家康が伏見城に在城の時は、御膳魚を献納するよう命ぜられ、また西国への用状の急達にも船を差し立てるように、特別な御用を仰せつかったという。このため大坂の陣にさいしては、軍事上の密使を運んだり、御膳魚を搬入するなど、さらに家康の信を増すことができた。その後、佃村の漁師34人が江戸に召し出され、浅草川で家康らの遊漁がなされたのにさいし、網を引いてみせ、慶長18年(1613)8月10日に、海川漁獵の免許を得たのである。

かくて寛永年間にはいり、鉄砲洲の東の干潟に100間(181メートル)四方の地を拝領した。ここを埋立てて島を造り、正保元年(1644)2月に摂津の住吉神社を引いて移り住み、旧村の名をとって佃島としたのである。

家康参詣の折に渡御せしめたというのはあまり劇的でないが、金山正好・金山るみ著『中央区史跡散歩』(学生社1993年)にも同様の記述がある。果たしてどちらが正しいのであろうか。岡本綺堂は「白魚物語」に「魚河岸某家の記録の書写」として以下の文章を引用している。

天正年中(案ずるに十年か)恐れながら東照宮様御上洛遊ばされ候砌、多田の御廟並

に住吉明神へ御参詣の節、同所神埼川渡場に船御座なく、安藤対馬守様御下知にて佃村孫右衛門へ仰付けられ、即ち同人支配の漁船を以て、神君を始め奉つり、御供の多勢御渡申候。

(岡本綺堂『綺堂随筆 江戸の思い出』

河出文庫2002年)

この文面どおりなら本能寺の変は何の関係もないことになるが、綺堂は次のように解釈している。

「多田の御廟に御参詣云々」とあるは徳川家を憚って斯く記したので、実は明智が謀叛の砌、家康主従夜に紛れて都を落ちた途中の事であろう。その縁に依って、家康が江戸開府の後、彼の森孫右衛門等もつづいて出府したものと見える。(同)

こう述べる根拠はよくわからないが、計画的に参詣したのに渡船がなかったというのは考えにくいのでやはり本能寺の変に際してということなのであろうか。そうであれば、家康との絆も強いものとして理解できる(摂津佃村の名称も漁業のかたわら田もつくれという家康の考えにより改称したという説がある)。

しかし、その功により江戸に呼んだというのは飛躍がある。呼ばれる方にとっては断る余地がないであろうし、江戸は大阪に比し未だ開府直後の辺境地であるから、これは結構有り難迷惑である。なぜ摂津の漁師が江戸に出てこなければならぬのであろうか。その理由に関しては石井きんざの話が面白い。

慶長8年以前の城下町建設は、町寄を初め、

商人や地元住民が主体となって町作りをしたが、(中略)9年からはじめた江戸城修築には外様大名達に石材の運送を命じて諸国から木材を運送させた。またすべての大名に江戸に屋敷を与えている。外様大名は江戸に屋敷をもち妻子を置かなければ、反逆の意思をもつ者としていつ幕府に没封されるか解からないからだった。

江戸城修築には外様大名等70名に対して千石について何人かの人夫を出すことを命じた。この人夫を使って江戸城外も埋め立てさせ日本橋、京橋を造成している。この土は神田山を切崩した土だと言う。(中略)江戸の人口も江戸作りの槌音にあわせ膨張する一方であった。

一番心配したのは食糧だったが幸い、戦いも慶長5年の関ヶ原の戦い以後平和が続いているので粟麦米それに野菜は何とか入荷したので不自由はなかったが、魚の不足は何うにもならない。牛馬その他の獣肉は一般の人は食べず、魚を頼りに栄養を取っていたが、その魚が手に入りにくかった。江戸の漁師が獲る魚では間に合わない。その現われが魚の騰貴だった。(中略)

当時江戸の漁師の漁法は少しも進歩せず、普通の投網、四ッ手、釣り位いで獲っていたのでは江戸市民に食べさせる量がたりる訳もなく城築り町作りにかり出された人夫は日々の労働の烈しさから疲労して倒れる者が出るあり様。栄養不良で鳥目(日暮になると見えなくなる病い)になる者も多く、日本橋本町二丁目の『益田五霊膏』と言う目薬が鳥目によいと言われて売れ大儲けをしたとか言う。公儀に魚不足を何とかして欲しいと大名から町人、職人までが願い出た。

徳川家康の重役(後の老中)達も江戸城内

で色々対策を考えたが良い知恵は出なかった。当時まだ江戸城にいた家康に重役が話をすると

『それならば、佃村の漁師を呼ぶが良い』
と言った。家康は佃村漁師が使っている漁法を知っていたので

『今の江戸の人達を救うには、佃村漁師に漁具を持って来て貰うより致し方あるまい』
と言った。
(石井きんざ著・発行『佃島漁師夜話』1989年)

これはフィクションということではあるが、著者は史実をたんねんに調べた上で小説にしているということで、佃村の漁師が江戸に出てくる理由としては極めて説得力がある。このような事情が史実であったとするならば、とても小さな佃島が江戸で果たした役割はとても大きかったということになる。

このような次第で、佃村の漁師の間で議論を重ねた末、家康の要請を受けることに決し、慶長17年(1612年)、森孫右衛門以下34名(人数には異説あり)の漁師が江戸へ向かった。江戸では当初安藤対馬守重信の小石川屋敷を住まいとしていたが、対馬守が亡くなった直後の寛永17年(1640年)、当時向島(むこうじま)と呼ばれていた干潟(東西南北各90間)が下げ渡されることが決し、埋め立て工事が終わった正保元年(1644年)、書面により正式に下げ渡された。これが佃島の起源である。

佃島の起源に関しては佐原六郎「古文書から見た佃島の起原」が簡明にまとめているので、以下にその部分を引用する。

東京都中央区鉄砲洲の辺りは、もと海に囲まれた大小の島々の散在するところであった。

現在も同地の鉄砲洲稻荷神社所蔵の古絵図を見ると三百数十年前のこの地域の有様がよく窺われる。図の左下の部分には向島と森島という相接近した二つの島が描かれている。向島は後の佃島であり、また森島は鏡島とも呼ばれ、後の石川島に相当する。(中略)

佃島(向島)は全く海中に点在する渺たる干沢の一つに過ぎなかった。この干沢が後に築立されて人間の住みうる人口島となり、やがて佃島と呼ばれるに至ったのは正保元年(1644)のことである。

(佐原六郎「古文書から見た佃島の起原」

『東京の歴史第4号』中央区資料昭和56年)

なお、佃村の漁師が江戸に下降した時期については、慶長年代説の他に天正年代説がある。佃島之古事記は「天正十八年八月、徳川家康公当地御入城の砌り、撰津国西成郡佃村より転住したる住民に有之候事」と記しているそうであるが、江戸佃島の神主平岡日向守好信と名主忠蔵(森資将)とが署名した文書(明和2年)には、天正18年(1590年)説一通、慶長17年(1612年)説四通となっているそうなので、慶長年代説の方が多数説である。仮に天正年代説を採るならば家康の江戸入場と同時期であり、家康は江戸の食糧事情を見通していたということになるかもしれない。参考までに、武江年表から天正と慶長の関連記事を以下に引用する。

天正18年(1590)

今年8月1日(陽暦8月30日)、台駕はじめて江戸の御城へ入らせ給へり。そのころは御城の辺、葦沼汐入等の地にして田畠も多からず、農家寺院さへ所々に散在せしを、慶長に至り始て山を裂、地をならし、川を埋め、溝を堀、

士民の所居を定め給ひしより、万世不易の大都会とはなれり。

慶長8年(1603)

今年、江戸町割を命じ給ふ。『慶長見聞集』に、日本60余州の人歩をよせ、神田の山を崩され(今、駿河台の東南なり)、南の入海四方30余町埋させ、在家を立させ給ふと云。

(金井金吾校訂『定本 武江年表』

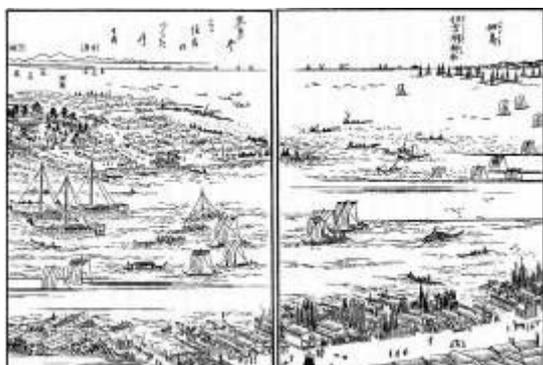
ちくま学芸文庫2003年)

鶴岡蘆水画『隅田川兩岸一覽』

天明元年(1781年)



江戸名所図会



3. 島形の変遷

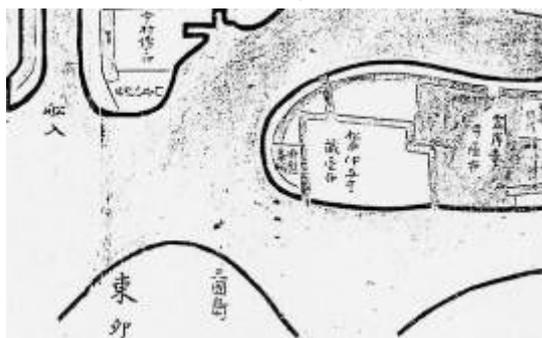
佃島の形の変化を地図で追っていくと、寛永江戸図(1632年)では地図の端に「三国島」として所在が示されているに過ぎず、新添江戸図(1567年)においても同様であるが、江戸方角安見図鑑 乾(延宝7年、1679年)でようやく方形の形が示され、元禄江戸図(江戸図鑑綱目 坤、1689年)や明和江戸図

(1771年)で位置が隅田川河口にきちんと示されるようになる。

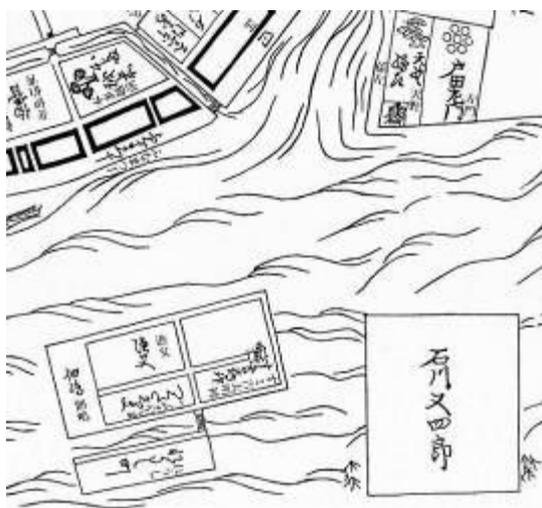
その後、伊能忠敬江戸実測図(1817年)では石川島と佃島とが一体となり、安政江戸近郊図(1857年)や明治東京大絵図(1871年)でもほぼ同様の形状で描かれている。

明治時代中期以降、現在の佃2、3丁目や月島地区の埋立てが開始され、参謀本部陸軍部測量局東京五千分一図(1884年)や新撰東京全図(1892年)、東京一目新図(1897年)等にその姿が示されるようになった。

寛永江戸図(1632年)



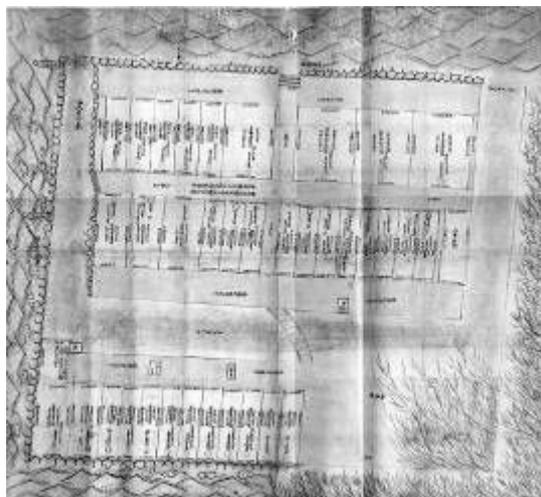
江戸方角安見図鑑 乾(延宝7年、1689年)



安政4年(1857年)尾張屋板
「築地 八丁堀 日本橋南絵図」



宝永7年沽券絵図(金子為雄氏蔵)



東京五千分一図(1884年)



4. 町割の変遷

佃島の町割を示す最も古い資料は宝永7年(1710年)の沽券絵図である(下図)。沽券絵図とは、町屋敷の間口、奥行の寸法や地主名、家主名等を記したもので、これに記載されていることが江戸町民としての一種の存在証明となっていた(「沽券に関わる」という言葉はここから来ている)。

江戸に関して現存する沽券絵図は、玉井哲雄『江戸町人地に関する研究』(近世風俗研究会1977年)によれば、宝永7年～正徳元年のもの、寛保4年～延享元年のもの、及びそれ以降のもの3期に分けることができるということなので、佃島の沽券絵図はそれらの中の最初期のものに入る(宝永7年の沽券絵図には佃島の他には小伝馬町等のものがある)。沽券図は、町の支配を代官から町奉行に移す直前に作成されていることから、その移管を円滑に行なうための資料であったようである。

佃島の沽券絵図の地割をわかりやすく示したのが次図であるが、間口は一番広いものが12間、一番狭いものが4間となっており、奥行は全て20間である。

宝永7年におけるこの町割の形は、『京橋区史 上巻』(東京市京橋区役所編1937年)記載の「佃島記録」の佃島建設に関する次の記述とよく符合する(古田悦造「近世佃島における集落形態の一考察」東京学芸大学紀要第3部門社会科学第33集、1981年12月)。

右地面西側北角折廻し三拾五間・裏行町並九左衛門所持仕申通りにて、五間口役地に致し、其他は三拾四軒分に割、仲間地に請取、三拾壱人漁師居屋敷に仕、…

沽券絵図の地割



(資料) 『中央区佃島地区文化財調査報告』
(東京都教育委員会1984年)

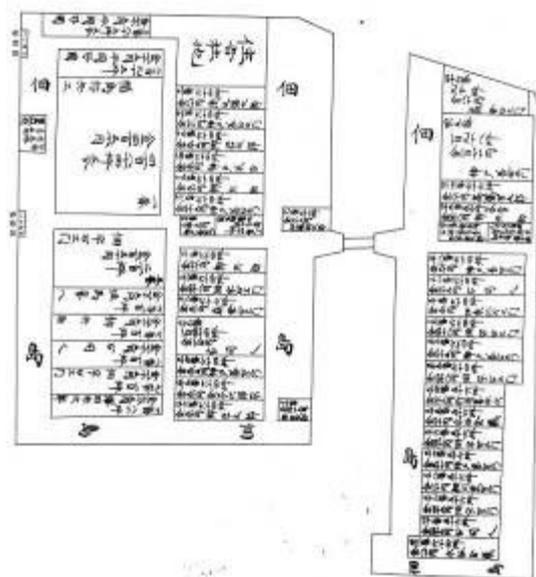
35間というのが上図右上の1～3の部分であり、34軒とあるのは上図の全36筆から1～3及び住吉社の24を除いた32筆におおむね一致する(古田前掲論文)。

古田悦造は、佃島のこの町割の形を江戸型と京型の折衷であるとしている。すなわち、江戸幕府は奥行20間とする点で江戸型の町割りにこだわり、佃島の漁民は表口、裏口を道路が面するという点で京型にこだわった(摂津佃村が接する神崎川の上流は京都であった)。江戸の町割が60間四方のブロックを20間四方の9つのブロックに均等に分割し、真中のブロックを会所地にするものであったことは良く知られており、古田の説は、江戸幕府がその奥行20間にこだわったということである。

他方、玉井哲雄『江戸 失われた都市空間を読む』(平凡社1986年)によれば、真中に会所地を設ける60間四方の町割は京間に基づき「徳川氏がその権力を誇示するために建設した江戸という都市の象徴」であり、その形は明暦大火後も原則的には維持されたが、18世紀に江戸の人口が急増するに伴って次第に変更がなされ、京間は田舎間に切り替えられ、会所地にも建物が建てられ、間口はさらに分割された。限られた空間の中で行なわれた佃島の町割はこのような変更を先取りしていたものとも考えられる。そして、このような細分化された町割が、後に見るような豊かな路地空間を生み出していった。

このような町割は今に至るまで驚くほど変わっていない。例えば下図は明治6年の沽券図であるが、筆の変更がある他は宝永7年の沽券絵図とほぼ同じ町割を見て取ることができる。

明治6年の沽券図



以下、明治28年の東京郵便電信局編東

京区分図、1958年住宅地図、1989年住宅地図及び2003年住宅地図を順に掲げる。本来の佃島(現在の佃1丁目)の町割は現在でもよく残っており、他の地区の町割もバブル末期までよく残っていた。高層マンションが乱立し始めたのはむしろバブル後であるが、それでも佃1丁目は依然として高層化が抑えられており、この江戸初期以来の街並みが今後どうなっていくかが東京の都市づくりの文化水準を測る上でのひとつの目安になりそうである。

1989年住宅地図(ゼンリン発行)



明治28年東京郵便電信局編東京区分図



2003年住宅地図(ゼンリン発行)



昭和33年東京都全住宅案内図帳
(住宅協会東京支所発行)



佃島がこのように町割をよく維持してきた背景には、コミュニティとしての独立性があったものと思われる。この点は、佐原六郎の次の文章が参考になる。

東京には昭和二十年の終戦直後まで、旧

幕時代以来のいろいろな特殊小地域社会が
残存していた。ここで特殊というのは、その住
民が一種の同類意識によって結ばれ、周囲の
社会とはちがった古い伝統、習慣、方言、規
範などを共有すること、また小社会というのは、
大都市の中に在りながら、それらの住民の占
める地域が比較的狭く固定して、人口があ
る限度を越えて増加しがたいことによって特徴
づけられる社会を意味する。(中略)今なお多
少とも旧態を偲ばせ、明治、大正の俤をとどめ
ているのは中央区佃の地域社会である。(中
略)

たとえば、フランスのル・モンド新聞のロベ
ール・ギランの「佃島は遠い国である。銀座から
佃島まで距離は短い。しかしながら別世界に
移ってしまう。騒音と激動の巨大都市東京と別
れて静まりかえった、おくゆかしい小さな独立
国にはいる」という表現は面白かった。(中略)

近年ここでも都内各町と同様に住居表示変
更の問題が起こり佃というのは当用漢字にな
いから、町名を津久田、または住江に改めよう
との主張が強くなった。それは大変と地元の町
会を中心に作家、評論家なども反対運動を起
こした結果、ようやく中央区住居表示審議会を
してこの由緒ある佃島の名を存続させることに
した。

(佐原六郎「佃島の社会と文化」)

佐原六郎編著『佃島の今昔』雪華社1972年)

5. 海と空の風景

佃島の優れた風景は、冒頭でも紹介した
ように、海と空から成っていた。これらは戦後
に至るまでよく維持されてきたものと思われ
るが、戦後の経済発展はこの風景を大きく変
貌させた。その是非については立場により視
点により様々な議論があると思われるが、こ

こでは文化人の文章をいくつか引用してお
く。

昭和38年6月には中央区明石町と佃島とを
結ぶ日本最大ともいわれる橋ゲタがかけられ
た。(中略)それ以来都心から江東を結ぶ新道
路建設計画は着々と進行し、39年8月27日
には早くも20億円を投じた長さ220、幅25メ
ートルの佃大橋が完成して佃島及びその附近
の様相を一変してしまった。その日満船飾で最
後の奉仕をした佃の渡しも終りを告げ、更に
最近では高さ約3メートルのコンクリート造
護岸用防潮壁が川沿いに築かれて隅田川の
見えぬ佃島に変じてしまった。

(佐原六郎「佃島の社会と文化」)

佐原六郎編著『佃島の今昔』雪華社1972年)

私は少年のころ、兜町の株式仲買店ではた
らくようになってから、銀座へ出たときなど、

「佃へ行ってみようか」

友だちをさそって、この渡船に乗るのをた
のしみにした。これが佃大橋という味も素っ
気もない鉄橋に変わり、渡船廃止となった
ときの、われわれの落胆は非常なものだ
ったのである。私はカメラを持って、渡
船最後の姿を撮ったりした。

佃島には、銀座のカフェにはたらく女
たちが多く住み暮らしていたようだ。
夕暮れになると彼女たちは渡船に乗
って銀座の店へ通う。その情景もよ
かった。

(池波正太郎『江戸切絵図散歩』)

新潮社1989年)

現在でも銀座のホステスで月島や晴海、勝
鬨のマンションに住む者は多い。私の知
っている女性も晴海に住んでいて夏など
スクータ

ーで通勤している。

知人が最近、こちらに移り住んだ。朝夕運河に面したマンションに住んでいる。こういうマンション族が佃島・月島界隈の新しい住人になっている。(中略)

そしてこの新しいマンション族をターゲットに、現在作られているのが佃島の大マンション群だ。(中略)

いま新富町までの地下鉄有楽町線がやがては佃島まで伸びる。そして大マンション街が完成する。佃島界隈もまた「離れ里」ではなくなってしまうのだろう。東京に住む限り、「またひとついい町がなくなった」というのは感傷でしかないのだろうか。

(川本三郎『私の東京歩き』筑摩書房1990年)

かつて住吉神社の例大祭では神輿が海にまで入ったということだが、今では町の人々がホースやバケツで神輿に水をかけるという。それは、「昭和39年に佃大橋ができて、大人の背丈の2倍もある高いコンクリートの護岸ができたため、神輿が川に下りられなくなり、43年の大祭を最後に消えた隅田川の神輿洗いの名残」(岡田睦子『佃祭り』星雲社1991年)ということであり、風景の変化は分化の形にも大きく影響するのである。

佃島の場合、島であるためにこれまで独自の地域社会を維持してきた反面、あまりにも都心に近いという立地特性があり、経済発展に伴って利便性、安全性が向上するとともに人口圧力が高まると、ある程度必然的に経済に対する風景の相対的な価値付けは低下せざるを得ないという面がある。しかしまた経済的な豊かさが高まるにつれて風景の価値の見直しも将来行なわれるかもし

れない。人工物はいつかは作りなおすことになるであろうから、経済と風景とのバランスのとり方を今後も考え続けることが大切である。

佃島の街路



防潮壁



佃大橋と佃島



6. 外へ向かう風景、内へ向かう風景

風景の定義や意義に関しては後の回で考察する予定にしているが、ここではとりあえず、「風景」とは「自分の心の中に入って行き、自由に遊ぶことができる景色」、あるいは「自分が一体感を感じる景色」とでもしておきたい。絵画で言うならば、一点透視図法を用いた近代西洋絵画ではなく、山水画や絵巻物のイメージである。

風景をこのように見た場合、佃島の風景はどこにあるのであろうか。まず視線を佃島の外に向けると、昔は海や空があり、目が、心が、自由に遊んだが、今は厳しい。例えば下の写真は佃小橋から石川島方向を見たものであるが、空の中で心が遊ぶという状況を作り出すのは難しい。どうしても超高層ビルの枠の中で視線が上下上下してしまう。もっとも絵としてはビルと橋との対比が美しい等の評価も有り得るであろう(しかし本稿関心事の風景からは外れる)。

佃小橋から石川島方向を見る



外へ向かう風景を回復するためには、視点の高さを変える、視線の向きを変える等の新たな工夫が必要になるものと思われる。例えば、次図は日の出湯の煙突の向こうに広がる空である。これなどは見方によっては風景になる可能性を秘めているように思われる。マンションと煙突の古びた感じが時の動きを感じさせるが、その動きと空の動きとのコラボレーションが風景になるかもしれない。マンションがもっと年代を感じさせるようになると、その可能性が大いに期待できるような気がする。

日の出湯マンションと空



外へ向かう風景が厳しい状況であるのに対し、内へ向かう風景は未だに豊かである。

植物と簾



例えば上図は小さな建物のファサードであるが、植物の動きと簾の動きとが実によく調和しており、見ていて見飽きるということがない。それぞれが主となり従となる。ひとつの小宇宙になっていると言ってよい。

次図は佃島に豊富に残る路地の一例である。実に深い奥行を感じさせるとともに、植物の動きが遠くを近くに、近くを遠くを感じさせる。近くと遠くの緩やかな連続性もある。植物の間から垣間見える金魚鉢や植木鉢、縁台などが過去、現在、未来の人の動きを感じさせる。自然と人間とが一体となった穏やか

な営みを感じられる。

路地



このように、佃島の地域の内へ向かう風景は実に豊かである。特に路地の風景が豊かである。この路地をどう扱うかが、これからの佃島の風景を決めると言ってもよい。そこで事項では路地の保存のあり方を少し考えてみたい。

7. 公と私との狭間

佃島を歩いてみると実に様々な路地がある。鉢植えのある路地、本格的な植え込みのある路地、風鈴、縁台、簾などがある路地、金魚の泳ぐ池がある路地、・・・まことに表情が豊かである。もちろん何も無い路地もある。一方、ゴミのある路地、物置になっている路地、洗濯機、ゴミ箱、掃除機のある路地、などというものもある。さらには、出窓が張り出している路地、二階に張り出した物干し場を支える支柱のある路地、二階がせり出した路地、一階までせり出した路地、などというものもある。

二階が張り出し昼なお暗き路地



路地がこのようにさまざまな変貌を遂げるということは、そこが私空間と公空間との中間領域になっていることを示すものであろう。つまり、路地を囲む人々に公の気持ちが強ければ路地は風景のある空間になる。私の気持ちが強ければ公空間は縮小し私空間が拡大する。

この公空間と私空間との境界の曖昧性は、表通りに面した表店の構え（ファサード）にも本来見られるものである。

路地の公と私



次の2つの写真は典型的な江戸町家の構えを示している。すなわち、棟を表通りに並行に置く平入形式で、1階部分が表通りに迫り出している。

この迫り出している部分は本来は公空間であったと玉井哲雄『江戸 失われた都市空間を読む』（平凡社1986年）に記されている。写真で見ると、江戸町家では一階の庇の下が完全に室内空間になっているが、京町家では庇の下には柱も壁も設けず公空間になっている。江戸においても本来は公空間であったのが、時代とともに私空間に取り込まれていったということである。

月島2丁目の町家



公空間だった底下

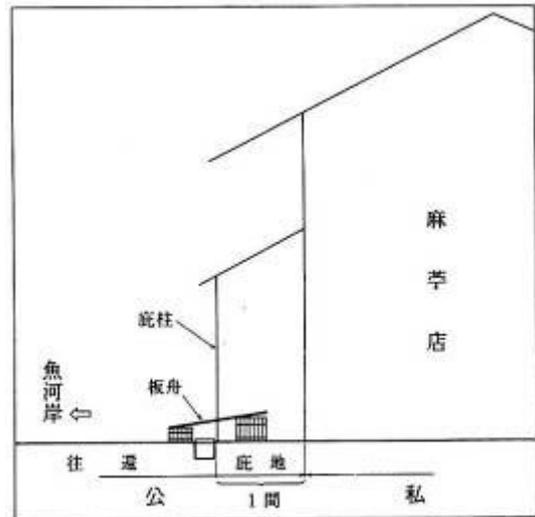


図22 本船町の表店(麻草店)と庇地

(出典)吉田伸之『巨大城下町江戸の分節構造』

佃1丁目の老舗



同様の指摘は吉田伸之『巨大城下町江戸の分節構造』(山川出版社1999年)でも行なわれている(次図参照)。

路地は、現在でも公と私との間で微妙なバランスを保っている。つまり、路地とは公私の境界が曖昧で柔らかく弱い空間となっており、この中間領域的な空間が公と私とをゆるやかにつなぐ風景を作り出しているわけである。その風景は時に公の風景となり時に私の風景となる。公と私との間で揺れ動いている。

路地の生成発展消滅の背景には土地所有形態の変化がある。先に見た明治6年の沽券図でもわかるように、佃島の土地所有は明治に至るまで佃島成立当時の土地所有がおおむね引き継がれてきた。これは昭和に入ってからあまり変わらなかったようで、尾崎一郎(写真)、ジョルダン・サンド、森まゆみ(文)『佃に渡しがあった』(岩波書店1994年)には、郷土史に詳しい町会長から紹介された金子錦之助の次の話が掲載されている(聞き手は森まゆみ)。

私の家は住吉神社の平岡さんの土地です。

大体、佃の住人は家持ちです。土地は持ってなくても家は自分のものです。土地は徳川様から頂いたまままで、地境の青写真や書き付けがなくて、今頃になって困ってますがね。

大地主が土地を所有していたので路地の環境が維持されてきたのであろうが、大村肇他「佃島の住民・家屋の構成と土地所有ならびに井戸水利用の現況について」(東京都教育委員会『中央区佃島地区文化財調査報告』1984年)によれば、1982年10月現在の土地課税台帳では下表のように既に土地所有が細分化されている。

土地面積階層別区画数(1982年10月)

面積階層	30以下	30-50	50-70	70-100	100-300	300-500	500-1,000	1,000以上	計
区画数	48	82	33	18	30	4	—	2	217
割合	(22.1)	(37.8)	(15.2)	(8.3)	(13.8)	(1.9)		(0.9)	(100.0)

土地が切り売りされれば路地にまで張り出す建築も出てくるであろうし、あるいはマンション建設用にまとめて買収されたりすると路地が消滅することにもなる。

マンションで塞がれた路地



8. ロジロジ

以上見てきたように、路地にはさまざまなものが張り付く。鉢植えや縁台、金魚鉢、風鈴が張り付くこともあるし、ゴミが張り付くこともある。洗濯機やゴミ箱、出窓、物干し場が張り付くこともある。最終的には建物が張り付いて路地が塞がれてしまうこともある。このように、路地に様々なものが張り付く現象を、ここでは「ロジスティック」と呼ぶこととする。すると、路地のロジはロジスティックのロジスティクスということになる。そして、ロジスティックのロジスティクスはロジスティック曲線を用いて考えるとわかりやすい(以下、この考え方を「ロジロジ」と呼ぶ)。ロジスティック曲線とは一般的に次式で示される曲線のことである。

$$y = \frac{a}{1 + b \exp(-cx)}$$

本稿ではこの数式を理解する必要は全くない。ロジスティック曲線のグラフを中心にロジロジの概念図を描けば下図のようになる。横軸は路地の形を計量化したものの、縦軸は社会的共通資本の大きさを示す。

ロジロジの概念図



要するに、登るのは大変で滑り落ちるのは楽である、というのがロジロジである。これは、養老孟司の言う知的労働の風景に似ている。

考え方が戦前に近くなっている人が増えているような気がする。(中略)それは一元論のほうが楽で、思考停止状況が一番気持ちいいから。(中略)私は、人生は崖登りだと思っています。崖登りは苦しいけれど、一步上がれば視界がそれだけ開ける。しかし、一步上がるのは大変です。手を離したら千じんの谷底にまっ逆さまです。(中略)原理主義に身をゆだねるのは手を離すことに相当する。谷底にまっ逆さまだけれど、それは離れている人から見ての状態、本人は、落ちて気持ちがいい。それだけのことでしょ。(中略)

一步上がるのは容易じゃない、荷物を背負っているから。しかし身体を動かさないと見えない風景は確実にある。(中略)知的労働というのは、重荷を背負うことです。物を考えるということは決して楽なことじゃない。(中略)

崖を一步登って見晴らしを少しでもよくする、というのが動機じゃなくなってきた。知ることによって世界の見方が変わる、ということがわからなくなってきた。愛人とか競走馬を持つのがモチベーションになってしまっている。(中略)

一元論にはまれば、強固な壁の中に住むことになります。それは一見、楽なことです。しかし向こう側のこと、自分と違う立場のことは見えなくなる。当然、話は通じなくなるのです。

(養老孟司『バカの壁』新潮新書2003年)

9. ジロジロジ

ロジロジは既存の路地をロジする考え方であるが、世の中が豊かになってくるとそれ

によって得られる満足とそれに要するコストとのバランスが崩れてくる。今やより広い住宅に住みたいという欲求、より近代的な街に住みたいという欲求はとても強く、ロジロジで生きるよりも家屋を売却してどこか他で生きたいという考え方が強くなってくる。

これは、世の中豊かになってくるとロジスティック曲線が下方にシフトすることを意味する。つまり、同じ路地が生み出す社会的共通資本が減少するわけである。路地の物理的利用形態が変化していなくても、人々の心がそこから離れると、社会的共通資本が減少する。これは、人々の経済的自立性が高まり、路地の社会資本に頼らずとも生きていける状態になったことを意味する。言い換えれば、路地の効用が他の財の効用との相対関係で低下したということである。「古い物をそのまま残す者はやがてあやまちに陥る」というドイツ人の言葉があるらしいが、それはこういうことを意味する。

このような次第で、ロジロジは次第に困難になりつつある。今のところお年寄りが快適な環境維持に努めている地区が多いであろうが、代替わりとともに路地が一気に崩れるということも考えられる。そこで今必要とされているのは、路地の構造改革、バージョンアップである。つまり次代の路地を生み出さなければならぬ。それを「次・路地」と呼ぶとするならば、これから必要になるのは「ジロジロジ」である。

ジロジロジの方向としては複数考えられる。ひとつは安藤忠雄の路地引き込み型建築への建替えである。例えば東京のコレッツィオーネ、京都の TIME'S などは建物の中に実に豊かな路地的空間を有しており、外からのアクセスも自由である。六甲の住宅も路地

的空間の魅力に溢れている。

コレツィオーネに関してはギャラリー・間編『建築 MAP 東京』(TOTO 出版1994年)に次のように解説されている。

円筒の外周に沿ってらせん階段がめぐり、直方体の隙間には階段状の広場が設けられる。これらの階段が巨大なヴォイド空間となって迷路のように人びとを地下まで誘い込み、空間のダイナミズムを十分に味わわせてくれる。足回りのヒューマンなスケールと、アウトスケールした階段状広場との劇的な対比が素晴らしい。

コレツィオーネ内部



TIME'S に関しては安藤忠雄が次のように述べている。

この計画で強く私の頭にあったのは、境界のない建築ということでした。自然と境界がなく、

使い方にも境界のない建築。たとえ商業建築であろうと、24時間、街に開放することで公共性をもつ訳ですから。

(安藤忠雄『建築を語る』

東京大学出版会1999年)

この考え方は、外に開いた路地の空間と極めて親和的である。また、松葉一清は次のようにコメントしている。

重要なのは、安藤が「タイムズ」において設計したのは、「かたち」ではなく、「空間」であったという事実だ。商業施設は多くの場合、来訪者に夢を与えようと、「かたち」をお伽の城のようにデザインするケースが多い。それがサービスなのか、おもねりなのかは判断が難しいが、安藤が「タイムズ」で試みたのは、そのような具象的な「かたち」を避け、ひとの集まる場としていかに「空間」をつくるかということだった。

(松葉一清『アンドウ 安藤忠雄・建築家の発想と仕事』講談社インターナショナル、1996年)

反テーマパークの思想である。

TIME'S と高瀬川



短冊状のブロックをまとめて大ブロックを形成し、外と内とを緩やかに繋ぐ路地を豊かに設ける。中間階には小庭園をいくつか設けて採光を確保しつつ路地を繋げる。その路地を上へ上へと辿っていくとスケールアウトした広場に行き着き、そこには失われたはずの空と海の風景が蘇っている。このような建築を見てみたいものである。

さて、ジロジロジのもうひとつの方向として、現在の短冊状のブロックをそのまま生かすという方法がある。これに関しては、「ハノイ未来開拓プロジェクト」が大変参考になる。これは、ハノイの「36通り地区」という名称の地区で計画された都心居住プロジェクトである。

ハノイ未来プロジェクトの完成予想模型



(資料)総合論文誌第1号(日本建築学会2003年2月)

この地区の敷地は極端に細長く、間口6.25m、奥行き42.8mということであるが、これは佃島の敷地形状(狭いところで間口4間、

奥行き20間)によく似ている。ここに4階建て、ヴォイド率50%の許容容積という条件の下で施工床面積600㎡、想定人口30人(6世帯)の住宅を設計したのが「小嶋一浩+東京理科大学小嶋研究室+東京大学曲淵研究室」である。その設計思想は以下のようなものである。

断面計画で最も重要視されたのはヴォイドの配置である。これは36通り地区のフィールド・サーベイ、そして分析によって抽出されたもので、世帯を分節する中庭、住戸内の採風を促進する吹抜け、通りの賑わいを敷地内に引き込むためのアクセスルート、そしてプライベートなテラスを実現する細やかなニッチなど、さまざまなヴォイドがパズルのように、しかし整然とルールを持って組み合わせられている。ベトナムという高温多湿の気候条件の中で、そのポラスな建築空間は採風をベースにした環境調整を可能にするものであり、設計者はここに輻射冷房の技術を取り入れつつ、アジア型の、開放系の環境建築の姿を提案しようとしている。

(総合論文誌第1号

『地球環境建築のフロンティア』

日本建築学会2003年2月)

このハノイ未来開拓プロジェクトは今後地球規模での都市のあり方を深く考えさせるものである。その点を日本建築学会誌は次のように指摘している。

新しい計画は近代都市計画が誕生したヨーロッパや北米の都市のためというよりも、これから成長が予測されるアジア、アフリカ、南米の都市のためのものであって、構想の提出にあ

たって、亜熱帯という気候の中で独自の大都市を育ててきた日本に期待される役割は大きい。

小嶋一浩らによるハノイのプロジェクトは、このような背景を遠望したときにはじめてその真価が明らかになる。それがアジア版コンパクト・シティの提案であること、通風、輻射冷房をベースにした環境調整技術を開発し、それを実測によって評価しようとしていること、今後も大きな変貌が予想される大都市の歴史地区の景観とアクティビティを保全しようとしていること。これらの重要な主題が、整理分析され、魅力的な空間の提案として再統合されている。21世紀のアーバンゼーションへの対応を、新たな解答のなかに示したことは、間違いなく我々の建築的想像力を広げるものである。しかし最も重要なのは、アジアの隣人とともに新たな都市の姿を提案しようとする他者への想像力であるだろう。こうした取り組みに、今後も多くの人々が参与していくことが期待されているのではないだろうか。(同)

近年ヒートアイランドが深刻な問題となり、一方これから人口減少時代に突入する。高層建築物を建て並べる意義、超高層マンションを建てる意義を改めて考えてみるのが有益であろう。

佃島ではすでに超高層マンションが林立しつつあるが、本来の佃島である佃1丁目は未だその開発を免れている。そこが今後どのような場になっていくのか、都市づくりのセンスがおおいに問われるところである。ハノイモデルの後、東京モデルも提示されているということなので、日本における今後の都市再生のあり方を考える上で参考になるのではないだろうか。

10. 公が私から生まれる空間

以上は路地の目に見える形のあり方を見てきたが、言うまでもなく路地で最も重要なのは、公が私から生まれる空間がそこにあるということである。つまり、最も大切なものは目に見えない。私が公と緩やかに繋がっているという目に見えない関係こそが重要である。

公が上から押し付けられても、あるいは公が私と関係なく成立しても、路地の意義は消失する。公と私とがある一線で明確に区切られてしまえば、私の内にできる通路は路地ではないし、私の外にできる通路も路地ではない。

佃島超高層マンションのキャッチ・コピー(1)

- 周辺地域に開かれた、緑豊かな広場空間とピロティ。
- 周辺住民の通り道として、近隣の既存の路地を繋ぎました。

佃島超高層マンションのキャッチ・コピー(2)

- 安心の24時間
セキュリティシステム
- リビングダイニングには足元からほがほが
ガス温水式床暖房
- 光ファイバー導入による
大容量・高速インターネット
- 開放感あふれる
高さ2.3mのハイサッシ
(一部タイプ)
- 24時間少風量換気システム
- ホテルライクな快適な一日のため
コンシェルジェサービス

11. 佃島のアイデンティティ

私が公をつくっていくためには、住民が街に愛着を感じていることが必要であろう。これは、街に対するアイデンティティと言い換えることができる。以下では、アイデンティティの要素として佃島には何かあるかを簡単に見ていきたい。

(1) 住吉神社

最初に挙げることができるのが、住吉神社である。この神社の起源は、渡邊保忠「住吉神社」(『中央区佃島地区文化財調査報告』東京都教育委員会1984年)によれば以下のようである。

江戸佃島住吉神社は、天正18年(1590年)8月、徳川家康公当地御入城の砌り、摂津西成郡佃村および大和田村からの移住漁師30余名ともども江戸下降の際、摂津佃村住吉神社神主平岡正太夫の弟、権太夫好次(正保4年正月30日没)が、住吉神社の分神霊を奉戴して江戸に至り、対馬守、その他諸侯の邸内に分霊を奉祭した後、正保(1646年)3年6月29日、佃島に造営された社殿に住吉三神、神功皇后および徳川家康の霊の五座を奉遷祭祀したところに、その起源を持つ。

建物の形式は八幡造(切妻平入りの二つの棟(拝殿と本殿)を並行に並べて幣殿で工の字型に繋いだもの)である(東照宮に採用されたので権現造とも言う)。創建後たびたび火災に遭い現在の建物は明治3年に再建されたものであるが、残されている平面図によれば以前は拝殿と本殿とは連結されていなかった(幣殿部分は露天の空地であった)。拝殿の形式が権現造ではあまり見られない

神明造(屋根に千木と勝男木がある等が特徴)であることから見ても、もともとは権現造ではなかったものを両棟連結して権現造風にしたものであるらしい。社務所は住民集会等の場所ともなっているらしいが、様式変更にも住民の利便性への配慮があるのかもしれない。住吉神社全体が一種のコミュニティ・センターになっているものとも思われる。

住吉神社配置図



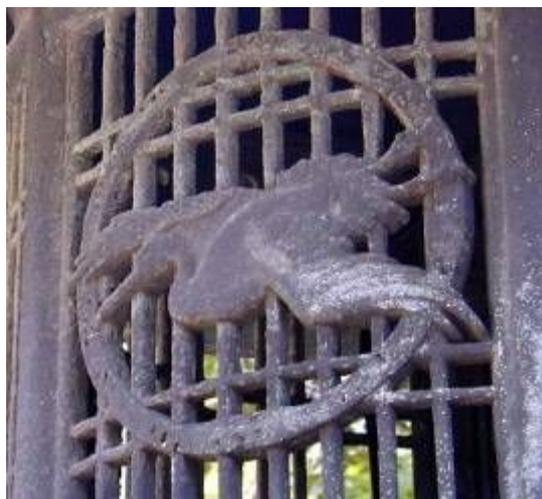
住吉神社拝殿



住吉神社境内には様々な動物の図像がある。水盤舎(中央区民俗文化財に指定されている)の唐獅子、灯籠の鹿、鳥居額面、灯籠、賽銭箱の鶯である。どれも全国の神社で

一般的に見られるものであるらしい(高藤晴俊『図説 社寺建築の彫刻』東京美術1999年)。唐獅子は聖域の守護獣、鹿は吉祥の動物である。鷺は以前はこの地に数多く生息し、佃島ではその鷺の飛ぶ状態を見て天候を予知し、火災の危険性を予知した。そのため、住民は鷺様と呼んで鷺を守護鳥のように見なしたという(そのようなことから住吉神社の替紋が髪鷺になっているという)。このように、住吉神社境内には人間を守ってくれる鳥獣が生息しているのである。

灯笼・賽銭箱・鳥居額の鷺



水盤舎の唐獅子



灯笼の鹿



住民が神社に親しみを感じている様子は、次のように描かれている。

ふだん着のまま、用足しに出た序にといったような格好で、静かに拍手を打ち、瞑目したまま、何事かを祈願する近所のおかみさんが、帰りしなに、人影もない境内に落ちている紙屑を、そっと拾って割烹着のポケットに入れて、何気なく立ち去って行く。これが佃の人々と神社との日常の関係であって、彼等にとって、住吉様は自宅の神棚の延長であり、住吉様を拝み、これを大切に守るのは、何の理屈もない、当然の勤めであり、奉仕なのである。事実、神社もまた、このようなふだん着のおかみさんによって代表される庶民的な氏子たちの切実な祈願と、私心のない奉仕によって、三百数十年の存在を続けてきた。そこには少しも上からの威圧や強制などを連想させるものはない。同様に、この神社の建物も、下駄をぬげば、誰でもすぐに拝殿に上れるほどその床は低く、どこを見ても、こけおどしや虚飾的なところがなく、すべて純真、簡明である。

(佐原六郎「佃島の社会と文化」)

佐原六郎編著『佃島の今昔』雪華社1972年)

「こけおどし」がないという表現は、近代西洋都市を「こけおどし」としたMUTATIONSの記述を連想させる。

(2) 祭り

祭り全般を対象にするとまとめるのが大変なので、ここでは住吉神社例大祭で用いられる幟について見ることにする。

この幟は広重の名所江戸百景で見ることが出来る。広重は幟を絵の中央に縦横いっ

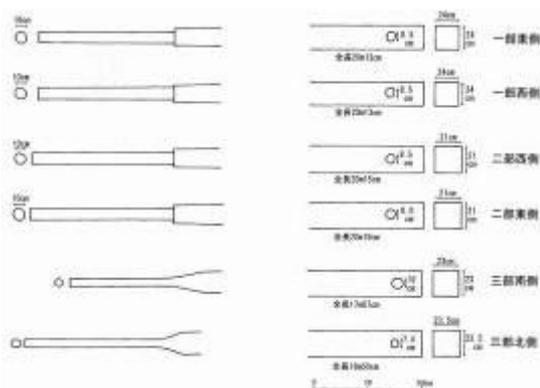
ぱいに描いている。このような小道具をこのように大きく扱うとはさすが広重、斬新な構図などと思っていると大間違いなのである。大間違いというのは、斬新な構図ではないという意味ではない。幟が本当に大きいのである。

広重「名所江戸百景 佃しま住吉の祭」



幟の竿は全部で6本あるのだが、その長さはなんと約18mから20mもある。なぜこんなに大きいのか、それはよくわからないが、3年に一度の例大祭ではこれを島内6箇所を立てる。それでは普段はどこにしまってあるのかというと、地面の中なのである。祭りが終わると皆で土の中に埋め、祭りが来ると掘り出す。これは大変な作業で、この共同作業はコミュニティ形成に大きな役割を果たすであろうし、また、幟竿への人々の愛着も生むに違いない。

大幟竿の実測略図



(資料) 東京都江戸東京博物館

『佃住吉神社例大祭 調査と映像記録』2001年

次のようなこともあったらしい。

先年佃大橋建設工事の折、建設会社銭高組の下請の男が誤ってこの角材の一つにクレーンを引っかけて折ってしまった。そこで佃の人々のはかんに怒って、あわや流血の騒ぎになりそうであった。年十年となく使い馴れ、形や色にも独特の味のにじみ出していた用材のことであるから、彼等の激怒するのも無理はない。しかし会社側の出方で漸くおさまり、会社は遠く埼玉県の奥の大木を切って材木を作り、それを佃に運んで弁償を果たしたという。

(佐原六郎「佃島の社会と文化」

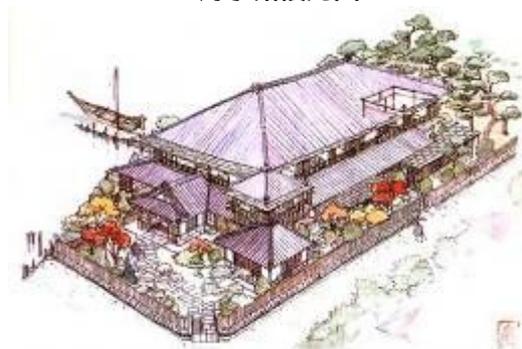
佐原六郎編著『佃島の今昔』雪華社1972年)

(3) 海水館

中央区広報誌によれば、佃3丁目に「海水館」と呼ばれる割烹旅館があった。明治38年に仙台市の建物を移築して開業したが、風光明媚な地ゆえに多くの文人墨客に愛され、様々な名作がここで生まれた。井上明久によれば、明治末から昭和初めにかけては作家、詩人、画家などが主に逗留する宿泊施

設があり、海水館はそのはしりともいべき存在であった(『街めぐり時あるき』日本経済新聞2004年5月9日朝刊)。このような文化の拠点となる施設の存在は、地域の独自性を高める上で大きな役割を果たしたものと思われる。これからは文化の時代、知恵の時代と言われるが、このような施設を再建する粋な事業も少しはあってよいであろう。

海水館復元図



▲「海水館復元想像図」小澤 尚 作(月島図書館所蔵)

(資料) 中央区広報誌『中央』2004年5月1日号

島崎藤村は、明治40年からこの海水館で『春』の執筆を行なっている。現在、海水館跡には、藤村の母校明治学院大学の藤村研究部が建てた石碑がある。

海水館記念碑

